
IS（インフィニット・ストラトス）～破門されし者～

TR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス

IS（破門されし者）

【Nコード】

N7276R

【作者名】

TR

【あらすじ】

IS、それは女性にしか動かせることのできない物
そんなものを動かしてしまった織斑一夏
そんな彼が通うのは女性しかないIS学園だった。
だが、もう一人ISを動かせる男がいた。

女性しかない学園で繰り広げられる、物語が今始まります。

＊不定期更新ですが、頑張っていきたいと思いますので、よろしく
お願いします！！＊

本小説は自サイト『黄昏の部屋』からの転載です。

前書き

このたびは、本作を読んでいただきありがとうございます。

この作品は弓弦イズルさん原作の『IS インフィニット・ストラトス』の二次創作です。

基本的にはアニメを追いつつ書いていきますが、場合によっては小説の方のイベントやストーリーになる可能性がありますのでご了承ください。

また、本作品では残酷的な描写が含まれております。

そういったものが苦手な方はお読みにならないことをお勧めします。

本作の更新間隔は2，3週間から長くて1か月と長いのでご了承ください。

万が一遅くなる場合は活動記録やこちらのほうにてお知らせします。

それでは、本作『IS 破門されし者』をよろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

これより、本作はスタートとなります。
どうかよろしくお願いします。

プロローグ

IS

通称インフィニット・ストラトスのそれは、ある科学者の手によって作り出されたマルチフォームスーツだ。

このISの最大の特徴は動かせるのが女性のみだという点だ。

ISの登場は社会の体制を変えるきっかけとなった。

それまでは男が女性よりも偉い男尊女卑だったがそれも今や女尊男卑の風潮が強くなり始めているだ。

このISは当初、宇宙開発を目的として作られたが、それもうまくいかなかった。

そしていくつかの国と【アラスカ条約】を結んだ。

これはISの武装と戦力に恐れたための対策だ。

この条約によってISの技術は世界中に広まり、さまざまなISが作り出されることになった。

さらにはISでの戦争も禁止となったため、現在ではもっぱらスポーツのようなものになっている。

このISの作成した科学者、篠ノ之 しののたばね 東氏は忽然と行方をくらませている。

さて、そんなISだが必ずしも例外というものはあるはずだ。

そして今、その例外が発生しようとしていた。

二人の人物の手によって……

この物語はそんな二人の物語である。

続く。

第1話 「クラスメイトは全員女子？」

??? Side

「これは……想像以上に、きつい」

俺は織斑一夏、ごくごく普通の高校生……のはずなんだが、ひよんなことから俺の人生は変わってしまった。

て、俺は一体誰に説明してんだ？

ここはIS学園。

世界で唯一のISのことについて学ぶ学園だ。

なぜきついかって？

それは俺の周りにいるクラスメイトが、全員女子だからだ!!

俺は横にいるもう一人の男を見るが……

(全く普通だ)

どうやらあいつの中には緊張という言葉はないようだ。

Side out

ISへ破門されし者へ 第1話 「クラスメイトは全員女子？」

やあ！ 僕は織斑 おりむらま 正樹だ。

って、誰に言ってるんだ？

今僕達は、世界で唯一のIS学園にいます。

周りは女子ばかりだけど。

それはもう覚悟の上。

だから緊張なんてするはずがない!!

(兄貴の方は……見るからにしてるな)

僕は苦笑いを堪えて先生が来るのを待つ。

やがて一人の先生が入ってきた。

緑色のショートヘアにメガネをかけているのが、印象的な女性の先生だった。

(覚悟はしていたが、先生も女性か……)

「皆さん入学おめでとう。私は副担任の、山田 真耶やまだまやです」

先生が自己紹介するが、全員の反応はない。

「あ……え？」

その様子にかなり慌てる先生。

なんだか、可愛そうに見えてきた。

「今日から皆さんはこのIS学園の生徒です。この学園は全寮制。学校でも放課後も一緒です。仲良く助け合って楽しい3年間にしましょうね」

山田先生は学園の説明をするが、誰も反応しない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと出席番号順で」

山田先生がそう言った途端一夏が体を震わせた。

そしてこっち側……おそらくは僕と僕より左側にいる幼馴染にでも、向けているのだろう。

たぶん助けてくれということだろうが……

（自分で少しは考えろ）

ということで、僕はその視線を無視した。

ちなみに僕たちの幼馴染は視線をそらしました。

「織斑君、織斑一夏君!!」

「は、はい!」

山田先生の声に、一夏は上がったような声で返事をした。

それと同時に周りから笑い声が聞こえた。

「……………はあ」

もう溜息しか出なかった。

「あの、大声出しちゃってごめんなさい。でも”あ”から始まって今は”お”なんだよね。自己紹介してくれるかな? 駄目かな?」

「あの、そんなに謝らなくても」

こればかりは一夏と同意見だ。

「えー、えっと……織斑一夏です。よろしくお願いします」

一夏は立ち上がって、自己紹介をした。

それと同時に周りから『それで終わり? まだあるよね?』といった視線が一夏に向けられた。

ちなみに僕たちの幼馴染の彼女は、再び視線をそらしました。

「すー、はー」

（お？これは期待できるな）

僕は気合を入れている一夏の次の言葉を期待した。

そうだよ、これだけだったら暗い奴というレッテルを張られてしま
うしな。

「————以上です」

ガタン！！

一夏の最後の言葉と同時に暮らすの全員がずっこけた。
あれだけ気合を入れて出た言葉が『以上です』って

「え、あれ？駄目でした？」

駄目に決まってるだろ、と思った時だった。

ゴス！！

「いっつう〜」

突然現れた黒いスーツを着た先生に、げんこつで思いっきり殴られ
た。

（というよりあの先生って、まさか）

「っげ！？関羽」

ゴス！！

「誰が三国志の英雄か。馬鹿者」

一夏のあのボケってわざとだよな？

僕はぜひともわざとと思いたい。

「先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君、クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

千冬さんは山田先生に労いの言葉を送りながら教壇に立った。

（というより千冬さんって、もしかして）

「諸君、私がこのクラスの担任の織斑おりむらちふゆ千冬だ。君たち新人を1年

で使い物にするのが仕事だ」

「キャーーーー！！！！！！！！」

千冬さんの自己紹介とともに、クラス中から歓声が響き渡った。
思わず僕もびっくりするほどだ。

「千冬様、本物の千冬様よ！！」

「私お姉さまにあこがれてこの学園に来たんです、北九州から！！」

「私、お姉さまのためなら死ねます！！」

……どうでもいいが最後のは怖い。

「毎年よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。私のクラスにだけ集中させてるのか？」

千冬さん、本当に呆れてる。

「きゃああああ！！！お姉さまもっと叱って罵って！！！」

「でも時には優しくして！！！」

「そして付け上がらないように躡して！！！」

……このクラスの女子のことが心配になってきた。

「千冬姉がこのクラスの担任？」

一夏が一人でつぶやいているのが聞こえた。

「で、お前は挨拶すらも満足にできんのか？」

千冬さんは両手を構えながら一夏を睨んだ。

「いや、千冬姉、俺は」

ドス！

「織斑先生と呼べ！」

一夏は思いっきり机に頭を押し付けられている。

「はい！織斑先生」

「え？織斑君って、あの千冬様の弟？」

「それじゃあ、男でISが使えるというのもそれに関係してるんじ

「や」

今のやり取りで一夏と千冬さん……織斑先生が姉弟であることが分かってしまったようだ。

「静かに！」

織斑先生の一喝で今まで騒がしかったのが一瞬で静かになった。

「んで、織斑弟次はお前だ。兄のような紹介をしたら同じ目にあってもらうぞ」

「は、はい」

織斑先生から物々しいオーラが出ている。

これはなんとしてでも兄貴の二の舞にならないようにしなくては。

「織斑正樹です。趣味は読書と剣道です。よろしくお願いします」

僕の自己紹介が終わると、クラス中で拍手が湧き上がった。

「まあ、よいだろう」

どうやら織斑先生にも合格点をもらえたようだ。

ちなみに担任の織斑先生は、僕と一夏の姉で第1世代のIS操縦者の元日本代表だ。

ある日突然、引退して姿を消してしまったけど、まさか教師をやっているとは思ひもなかった。

「諸君らにはISの基礎を半年で覚えてもらう。その後基本動作は半年で体に染み込ませろ。いいか？ いいのなら返事をしろ、良くな

くても返事をしろ」

な、なんという女帝発言だ。

「はい！」

そしてすんなりと返事をしてしまうみんなに尊敬してしまう。
その後はI Sについての概要を説明をしてS H Rは終わった。

さて、今は昼休みなのだが。

「なあ、正樹」

「なんだ？一夏」

一夏が疲れた様子で声をかけてくるが、言いたいことはよくわかる。

今僕たちはニュースでも大きく取り上げられている。

なぜなら男の僕たちが、I Sを起動させてしまったからだ。

つまりは、今廊下側に僕たちを見物に来ている女子たちが『私話しかけてみようかしら？』『あなた抜け駆けするの？』といった牽制が行われている緊張感が漂っているからである。

『誰でもいいから、この空気をどうにかしてくれ』

初めて一夏と思っていたことが、合ったような気がする。

「あ」

そんな一夏の前に立ったのは髪をポニーテールにして、怒っているような雰囲気醸し出している目（本人曰くこれは元々なのだから）をしている女子生徒、篠ノ之箒だった。

「……ちよつといいか？」

「え？ ああ良いけど……」

一夏が僕の方をちらちらとみてる。
なるほど、気を使ってくれてるんだな。

「僕は構わないよ。久しぶりの対面だし、二人で話してくるといいよ」

「分かった」

一夏はそう答えると、教室を後にした。

（さーて、僕は一人でこの状況を乗り切るか）

それから一夏が戻ってくるまでの時間が、かなり長く感じられたということを記しておこう。

一夏Side

久しぶりに再会した箒についていくと、屋上に到着した。
屋上には一部が芝生だった。

「何の用だよ？」

「うん……」

なかなか用件を切り出さないの、俺から何かを言うことにした。

「6年ぶりにあったんだ。何か話があるんだろう？」

「あ……」

俺の催促でもなかなか話さないの、こっちから話題を振ることにした。

「そういえば」

「な、なんだ？」

俺の言葉に、箒が続きを聞いてきた。

「去年、全国の剣道大会で優勝したんだってな？おめでと」

「な、なんでそんなことを知ってるんだ？」

「なんで？って、新聞読んでるし」

「なんで新聞読んでるんだ？」

いや、そこを疑問で返すのか？

「俺が新聞読んどるといけないのか？」

「いや、一夏が新聞読むなんて、珍しいなと思ったからな」

確かにこのことを聞いたのは正樹からだっただけ。

「それよりもだ」

俺はそのことをごまかすように、わざと話題を変えた。

「久しぶり。6年ぶりだけど箒だっけすぐに分かったぞ」
「え？」

俺の言葉に箒は顔を若干赤らめていた。

「ほら、髪形一緒だし」

「よ、よくも覚えているものだな」

箒は嬉しそうに髪をいじっていた

「いや忘れないだろ、幼馴染のことくらい」

なぜか箒がこっちを睨んでくる。

そんな時、チャイムが鳴り響いた。

「俺達も戻ろうぜ」

「わ、分かっている」

そして俺は正樹の待つ教室へと、足を進めるのだった。
ちなみにこのことを正樹に話した時、

『お前は全人類のために、階段から転げ落ちた方がいいかも』

と言われた。

なぜだ？

S i d e o u t

続く。

主人公設定（ネタバレ注意）（前書き）

必要に応じて増やしていく予定です。

9／2追記：性格（その他）のほうに設定を追加しました。

主人公設定（ネタバレ注意）

【名前】 織斑正樹

【性別】 男

【特技】 速読

【趣味】 読書と剣道

【好きな人】 常識がある人

【嫌いな人】 非常識な人（特に自分は特別だと思い込むような人）、身内や仲間を傷つける者

性格（その他）..基本的にはしっかりもの。

ただし時には羽目を外してからかったり悪ふざけをしたり、時には打算的な考えをしたりすることがある。

人類平等説を唱え、自分が特別だと思い込んでいる人には徹底的に攻撃する。

いつもは優しいが戦闘時は、冷酷な性格になる。

過去に一夏と共に誘拐された際に、何者かに撃ちぬかれた事が原因で肉体を失っている。

現在は一夏と肉体を共有して生きている。

一夏の体力を使うことで、具現化も可能。

具現化している時は不特定多数の人に見え、触れることもできる。

第2話 宣戦布告とクラス代表

「――では、ここまでで質問がある人？」

今はISについての授業中だ。

山田先生の一通りの説明を終えると、クラスの人たちに確認した。

（ここまででわかんないやつってそうそう）

「先生」

ちよつと考えをめぐらしていたため、先生の言葉を聞きそびれた。

「はい、織斑君」

「ほとんど全部わかりません」

（…………いたなここに）

俺はため息が出そうだった。

「え……全部ですか？今の段階でわからない人は、どの位いますか？」

先生が困ったように全員に尋ねるが、そもそもここは事前学習をやっているレベルだ。

案の定誰も手を上げない。

「織斑兄、入学前の参考書は読んだか？」

今まで椅子に座って授業を見ていた織斑先生が一夏に問いかけた。

「えー……あ！あの分厚いやつですか？」

「そうだ。必読と書いてあっただろ」

そういえば前にそんなものが届いていたような気が……。

（あれ？でもあれって確か）

「いや、間違えて捨てましーバァン！！ーたあ？！」

一夏の言葉を遮るように、思いっきり出席簿で叩かれてた。

（というよりも、出席簿が出す音じゃないよ！？）

「後で再発行してやるから、1週間以内におぼえろ。良いな？」

「あのー、織斑先生」

「なんだ？織斑弟」

織斑先生の目つきが厳しい。

「えっと参考書なら今持ってます」

「な、なんでだよ！？」

一夏が驚きのあまり声を上げた。

「何でもなにも僕は読みたかったから、ごみ袋を漁って取り出した」

「なら、なぜその時に織斑兄に渡さなかった？」

織斑先生の言うことも尤もだ。

「いや、捨てる！って言ってたのもう頭に入ってたんだとばかり
バアン！！ーりい？！」

しゃべっている最中に出席簿で思いっきり殴られた。

「なら、織斑弟、それを一週間以内に兄に覚えさせろ。いいな？」

「……はい、織斑先生」

僕は完全とばっちりだった。

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥かに凌ぐ。
そういった『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そう
しないための基礎知識と訓練だ。理解が出来なくても覚えろ。そし
て守れ。規則とはそういうものだ」

織斑先生は最後にそう言うと、山田先生によって授業は再会された。

ISへ破門されし者へ 第2話「宣戦布告とクラス代表」

「PICというのはパッシブ・イナーシャル・キャンセラーの略で
ISの基本システムだ。これがあれば――」

休み時間、僕は一夏にISについてのことを教えていた。
これでも少しは責任を感じているのだ。

「ちょっとよろしくて？」

「んあ？」

そんな時に声をかけてくる女子生徒がいた。

「まあ、何ですのそのお返事？ 私に話し掛けられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

話しかけてきたのは『今どきの』女性の態度そのものの女子生徒だった。

腰まで伸びた金髪に、頭には青いカチューシャを付けている。雰囲気からしてもお嬢様というのは感じられた。

「……ということだけど、理解はできたか？ 一夏」

「あ、ああ何とかな」

僕はその女子高生のことを完全無視して一夏に説明を続けた。

「ちょっと、聞いていますの？」

「あ、ああ。悪いな、俺君が誰だか知らないし」

「私を知らない？ セシリア・オルコットを？」

一夏の答えにオルコットさんは思いっきり机をたたいて叫んだ。

（誰も知りたくねえよ）

僕はいえ心の中で毒を吐いていた。

なんだろう、僕の嫌いな人の性格にどんぴしゃなような気がする。

「あ、質問を良いか？」

「ふん、下々の方の要求に耳を傾けるのも貴族の務めですわ、よろしくてよ」

一夏の質問に、オルコットさんはそう言っただけ承した。

「代表候補生って何？」

ガタン！！

本日二度目のすっこけだ。

というより、ここまでバカだったのか、こいつは。

「あ……あ、あ」

オルコットさんはすでに呆れているし。

「あ？」

「信じられませんわ、日本の男子はこれほど知識に乏しい方なのかしら？常識ですわよ、常識」

「一夏……頼むから兄貴らしい振る舞いをしてくれ」

僕は一夏にため息交じりに言っただけ。

「いいか？代表候補性というのは各国の国家が選り出された優秀なIS操縦者のことだ。というより単語から想像できるだろ……まあ、よく言うエリートのようなものだ」

「そう！エリートなのですわ。本来なら私のような選ばれた人間とクラスを同じくすることすら奇跡、幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

僕の説明に続くように、オルコットさんが再び言い出した。

「そうか？それはラッキーだ」

「……フッ!!」

オルコットさんの言葉に一夏は素で言い返し、僕は鼻で笑った。

「……馬鹿にしていますの？」

「お前が幸運だって言ったんじゃないか」

一夏と僕を睨みつけてくるオルコットさんに、そう言い返した。

「大体、何も知らないくせによくこの学園に入って来れましたわね？唯一男でISを操縦者出来ると聞いていましたけど、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが……」

本当なら今すぐにでも目の前の女子生徒に怒鳴ってやりたかったが、一夏がそれを抑えているのでできなかった。

「はあ。まあでも、私は優秀ですからあなた達のような人間でも、優しくしてあげますわよ？分からないことがあれば、まあ泣いて頼まれれば教えて差し上げても良くってよ？」

僕はすでに我慢の限界だった。

「何せわたくし、入試で唯一試験官を倒したエリート中のエリートですから」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

と、ここで一夏がオルコットさんに言い返した。

「はぁ？」

「倒したっていうかいきなり突っ込んできたのを躲したら、壁に突っ込んで動けなくなっただけど」

「私だけと聞きましたか……」

「女子だけっていう落ちじゃねえのか？」

僕は笑いをこらえるので必死だった。

「あなた！あなた達も教官を倒したっていうの！？」

「えっと、落ち着けよ？な」

一夏はオルコットさんを落ち着かせようとするが、無理だろうな。

「これが落ち着いていられ——」

その時、狙っていたかのようにチャイムが鳴った。

「話の続きはまた後で、よろしいですわね！！」

捨て台詞のようなものを残してオルコットさんは去って行った。
僕も自分の席に戻った。

やがて入ってきたのはノートのようなものを持った山田先生と、織斑先生だ。

「授業の前に、再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」

教壇に立った織斑先生が突然言い始めた。

「クラス代表者とは、対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会など、まあクラス長と考えて貰っていい。自薦他薦は問わない、誰かいないか？」

「はい！織斑兄君を推薦します」

「私も織斑兄君を推薦します」

織斑先生の言葉が終わるや否や数人の生徒が、一夏を推薦した

「それじゃあ、私は織斑弟君を推薦します」

「お、俺！？」

推薦されたことに驚きをあらわにする一夏。

「他にはいないのか？いないのなら、多数決で決める」

それを無視して進める織斑先生。

え、僕？

僕はどうせ代表者にならないだろうなと鷹を括っているから冷静で

す。

「ちょ、ちょっと待った！俺はそんなものにはなりーパァン！！ー
納得がいきませんわ」

一夏の抗議の言葉を遮ったのは、オルコットさんだった。

「そのような選出は認められませんっ！」

（だよな、これはちよつと無理があるもんな）

僕は心の中で、今回だけはオルコットさんの抗議を称賛した。

「男がクラス代表だなんて、いい恥晒しですわ！！ このセシリア・
オルコットに、そんな屈辱を一年間も味わえとおっしゃるのですか
！？」

……前言撤回だ。

称賛どころかブーイングだ。

「實力から行けば私がクラス代表になるのは必然。それを物珍しい
からという理由で極東のサルにしてもらっては困ります！私はこの
ような島国間でIS技術の修練に來ているのであって、サーカスを
する気は毛頭ございませんわ！！」

何だろう……もう我慢の限界なんだけど……

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれ
は、わたくしですわ！！」

ここまで来るともはや関心する。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけない事自体、私にとっては耐え難い苦痛で……!!」

「イギリスだって、大したお国自慢は無いだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ？」

とうとう頭に來た一夏は席を立ててオルコットに暴言を吐いた。

「美味しい料理はたくさんありますわっ!! あなた、私の祖国を侮辱しますの!？」

最初に侮辱したのはそっちだろうが。

「決闘ですわ!!」

互いににらみ合った結果オルコットが一夏を指さして宣言した。

「おお、いいぜ? 四の五の言うより分り易い!」

「わざと負けたりしたら私の小間使い……奴隷にしますわよ!!」

「ハンデはどのぐらいつける？」

「は? あら? 早速、お願いかしら?」

一夏の提案に、オルコットは馬鹿にするような笑みを浮かべた。

「いや俺がどのぐらい、ハンデつけたら良いのかなって」

「は……?」

その瞬間、クラス中に笑いが巻き起こった。

「織斑君、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強いかったのって、ISが出来る前の話だよ」

「もし男と女が戦争したら、三日持たないって言われてるよ」

「てめえら全員黙りやがれ！！！！」

『っ?!』

ついに臨界点を超えた僕は席を立て、思いっきりドスを効かせて叫んだ。

「セシリア・オルコット。貴様はここをどこだと思っている？」

「どこって、そんなのIS学園に決まってますわ！」

「ならば言おう。お国自慢をしたいんならどっかよそに行ってやりな！！ここはな、ISのことを学ぶところなんだよ！！」

僕は思いっきりオルコットに怒鳴りつけた。

「一夏は良いとして、お前は相当な馬鹿者だ。ここにいる限り全守人生徒は対等で平等だ。織斑先生を見てみる、弟に対して他の生徒と同じように扱っている。代表候補生だからって調子に乗ってんじやねえぞ」

僕の言葉に織斑先生が、視線を逸らせた。

「大体、分かっているようだから言うが、代表候補というのはいわば国にとっての看板だ。看板が弱いやつだったら国に恥をかかせる。今はまだお前が一番強いかもしれないが、あんたより強い奴が出てきたらお前は確実に捨てられる運命にある。そんな事も分からない様な低レベルな国と人間に、兄貴の事を馬鹿にする資格はない！！！！」

「あなた！！私のみならず、祖国までもを侮辱しますの！！？」

僕の言葉に、オルコットが突っかかってくる。
しかしそんなことは関係ない。

「もし威張りたいんなら、どこかの誰かのように大きな大会で優勝の一つや二つ取ってからにするんだな。それと喜べ、こんなにも早く人のことが嫌いになったのはお前が初めてだ!!」

「っぐ……」

僕はもう言いたいことは言ったので席に着いた。
オルコットはそんな僕に何も言わなかった。

「勝負は来週の月曜、第3アリーナで行う。織斑兄弟とオルコットはそれぞれ準備をしておくように」

織斑先生がなんとかその場をまとめた。

こうして僕たちはクラス代表をかけて、決闘をすることになった。

(僕って、何をやってるんだろう)

僕の心の中に残ったのは、そんな空虚な気持ちだけだった。

続く。

第3話 部屋割り（前書き）

一日で何とP Vが5, 874、ユニークアクセスが901となっていました。

とても驚いています。

同時に嬉しく思います。

皆さんの期待を裏切らないように頑張っていこうと思います。

それでは、第3話をどうぞ

第3話 部屋割り

オルコットにケンカを売った放課後。

「どうするんだよ、正樹」

「……どうしよう？」

僕の答えに一夏がズッコケた。

「何も考えがなかったのかよ!？」

一夏がそう言ってくるが仕方がないのだ。

「あの時は我慢できなくなってついキレちゃったんだよ。今は反省している」

「反省してるって……」

僕の答えに一夏はつぶやく。

「はぁ……過ぎたことは仕方がないだろう？そんなに戦いたくなかったら謝ったらどうだ？」

「そうだけどさ……」

「男が一度言ったことを覆してどうする!!」

僕は一夏に喝を入れた。

時たまこのように兄弟が逆転することがある。

まあ、僕の気のせいかもしれないが。

「ああ、織斑君たち、まだ教室にいたんですね。よかったです」

そんな僕たちに声をかけてきたのは、山田先生だった。
その手に二枚の紙と鍵を手にして。

IS〈破門されし者〉

第3話「部屋割り」

「「はい？」」

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

山田先生の手にあるもので大方予想できてはいたけどちょっと意外だった。

「俺の部屋、まだ決まっていなかったんですか？前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらって話でしたけど」

「僕もそう聞いていましたが」

一夏の言葉に続くように僕は山田先生に言った。

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理やり変更したらしいです。――織斑君たちは、そのあたりの事って政府から聞いています？」

最後の方は僕たちにだけ聞こえるように言ってきた。
どうやらこれは政府からの指示らしい。

僕たちをここに強制的に入学させたのは、保護云々よりも監視の方がしつくりくる。

「そういうわけで、一か月もすれば個室の方が用意できますから、

しばらくは相部屋で我慢してください」

「えっと、部屋割りは分かったのですが、荷物は一回家に帰らないと準備ができないので、今日はもう帰ってもいいですか？」

一夏が山田先生に尋ねた。

「あ、いえ、荷物ならー」

「私が手配しておいてやった。ありがたく思え」

山田先生の言葉を引き継ぐように現れた織斑先生だが……。
なんだろう、ダースベーダーの曲が聞こえてくるような気がする。

「ど、どうもありがとうございます」

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと携帯電話の充電器があればいいだろう？」

織斑先生の言葉を聞いた一夏が啞然としていた。
ちなみに僕の荷物は、諸事情によりそれほど多くない。

「夕食は六時から七時まで、一年生用食堂で取ってください」

山田先生から、寮についての説明をされたので僕は覚えておくようにした。

「ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。
大浴場は学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、その、
織斑君たちは今のところ使えません」

「あ、そうですね」

「え、なんですか？」

僕はすぐに使えないわけを悟ったが、一夏は全く分からなかったのか、山田先生に聞いた。

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「一夏、お願いだから、性犯罪で逮捕されるようなことだけはやめてくれ」

もう溜息をつくことすらできないほど、僕は呆れていた。

「おっ、織斑君っ、女子とお風呂に入りたいんですか！？ダ、ダメですよ！」

「い、いや、入りたくないです」

山田先生の言葉に一夏は慌てて否定するが、

「ええっ？女の子に興味がないんですか！？そ、それはそれで問題のような……」

と返されてしまった。

ちなみにこれを聞いていた廊下の女子生徒たちは、婦女子談義というものを始めていた。

「織斑くん、男にしか興味ないのかしら……？」

「それはそれで……いいわね」

「相手は織斑弟君……これで行きましょう！！」

「禁断の兄弟愛！？」

なんだか一部に聞き捨てならない会話を聞いたような気がした。

「キッ!!」

とりあえず、そういった会話をしていた人たちに殺気を飛ばしておくことにした。

ズバァン!!

「殺気を飛ばすな、織斑弟」

「……すみません」

その結果織斑先生に思いっきり出席簿でたたかれた。見れば、僕の周りには先生たちと一夏以外誰もいなかった。ということ、僕たちは寮へと向かうことにした。

「ツと、ここが1025室か。それじゃ、また明日な」

「おお、くれぐれも襲うなよ?」

僕たちは一夏の部屋である1025室の前に立っていた。

「襲うか!! そっちも気をつけろよ? なんだってお前は……」

「分かってるって。変なヘマはしないよ」

一夏は言わないが、僕はすぐに意味を理解したので、安心させるように言った。

「そうだな、お前はやらかさないよな」

「あはは、それじゃあ、また後で」

僕は一夏にそう告げると、僕に割り振られた部屋へと歩き始めた。

そしてようやく到着しました。

「まずは……」

コンコン

ドアを軽くノックをした。

一応礼儀のようなものだ。

何せ中には相部屋となる女子がいるのだ。
突然中に入ったら失礼にあたる。

「……………」

しかし中からは何も応答がなかった。

（誰もいないのか？）

僕はそう判断すると、鍵がかかっていなかったなので、中に入った。

「な、なんだこれは！？」

僕は思わず叫んでしまった。

部屋の広さは……まあかなり広い。

ベッドもかなり大きい。

それはいいんだそれは。

「なぜに王室のようなベッドがここに！？」

そうまさにお姫様のようなベッドだ。

「あら、ようやく来ましたのね」

（こ、この声って、まさか！！）

僕はこの声を少し前に聞いていた。

この声は一夏のことを小馬鹿にして日本を侮辱し決闘を申し込んできた、セシリア・オルコットのものだ。

「私はイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットですわ」

どうやらシャワーを使っていたらしい。

浴室の場所から出てくる気配を感じた。

（ど、どどこかに隠れなければ!!）

そして僕はドア付近のベッドがある壁側に背を向けた。

「こんな格好ですけど、あなたのお名前を教え————」
「……………」

とうとう見つかったのか、オルコットの声が途中で止まった。

「えっと……今日からこの部屋になった織斑正樹です」
「……………」

オルコットからものすごいオーラが飛んでくる

「あ、ぼ、僕外に行きます!!!!」
「ちょ———」

僕はオルコットの声を聞かずして、外へと飛び出した。

「って？本気で殺す気か？今のを躲してなかったら死んでるぞ!!」

向こうから一夏の声が聞こえてきた。

「あのバカ、本当に襲ったのかよ」

僕はもう溜息すら出なかった。

「もう入ってもよろしくてよ」

「お、おう」

オルコットからOKが出たので僕は部屋の中に入った。

「……………」

「……………」

もう時間は夜のため、オルコットは寝間着だった。
ちなみに僕と一夏はここに来る前に夕食を済ませておいた。
とはいえ、この沈黙は正直きつい。

「言っておくけど、謝る気はないぞ」

「……………あなた！また私にケンカを売る気！？」

話題がまずかったのか、オルコットがどってきた。

「さあ？ただ僕は家族を馬鹿にしたからああ言っただけで、間違っ
たことは言っていない。自分の力を過信するなということだ」

「な、なるほど。それも一理ありますわね」

どうやらオルコットは渋々とだが納得したようだった。

「お前のことを認めたわけではないが、その怒りは決闘まで持ち越
しだ」

「な、なぜですか？」

「これから同じ部屋なわけだ、それなのにぎすぎすしたのは僕は嫌
なんですね」

朝起きた時から怒りのオーラをぶつけられてたら、命がいくつあつ

でも足りない。

「本当におかしな方ですわね。あなた。まあいいでしょう、改めてよろしく願いますわ」

「こちらこそ！」

そして僕はオルコットと握手を交わした。

それはルームメイトとしての歓迎と、決闘での健闘を祈ったものだ。

「にしても、あんたのベッドはすごいな」

「ええ、私はこのベッドでないとなかなか寝付けないものでして」

僕が今まで気にしていたことを聞くと、驚きの答えが返ってきた。
なんだ？そのマイ枕じゃないと寝られないの豪華版の言葉は。

その後は部屋を使うに当たってのルールを決めたりした。
特にお風呂に入る時間とかは重要だ。

「それでは、最終確認ですわよ」

オルコットが確認するように切り出した。

「お風呂に入る時間は私が夜の7時から8時、あなたが8時以降でよろしくて？」

「おう、まったく問題なしだ」

ということでもとりあえず話はまとまった。

後の暇な時間は何気ない世間話をして過ごすことにした。

「あ、あなた本当に苦労しているのですわね」

「ああその通りだよ。なんであれが僕の兄なのだろうかと疑問にも思う程さ」

とはいっても僕の愚痴だったけど。

特に女性関係の鈍感さには、僕は呆れることしかできなかった。

「あなたも大変ですけど、いつか報われる日が来ますわよ」

「そう言って貰えるとありがたい」

何だかこの時だけ、彼女が天使に見えたような気がした。

「そろそろ、私は寝ますわ」

「だったら電気はこっちが消そう」

と言うことで僕は部屋の明かりを落とした。

そして僕たちは眠りにつくのだった。

それから30分後。

（そろそろいいかな？）

僕は隣で寝ている人を起こさないように、そっとベッドから出た。
そして隣のベッドの方に手をかざした。

「リ・スリープ」

小さな声でつぶやくと、僕の手から光が放たれその光は王室のようなベッドで寝ているであろうオルコットへと向かった。

「さて、これでしばらくは起きないな」

あの光には眠りを濃くする効果がある。
そして僕はそっと部屋を後にするのだった。

第3話 部屋割り（後書き）

というわけで、サプライズ更新になりましたが、いかがでしたでしょうか？

次回あたりで、正樹の現状について明かされます。

そして次回の更新は早くても来月になります。
それでは、第4話でお会いしましょう。

第4話 学園生活二日目（前書き）

遅くなりまして申し訳ありません。
大変お待たせしました。

第4話 学園生活二日目

コンコン

僕は今1025室のドアを静かにノックしています。
なぜかって？

それはもちろん兄貴に会うためだ。

「本当に9時30分に来たな。とりあえず入れよ」

「さんきゅ」

一夏が小声中に招き入れた。

部屋の中は明かりがついていないので、真っ暗な状態だった。

「相部屋の人は？」

「正樹に言われた通り睡眠薬入りのお茶を飲ませて眠らせたから起きないと思う」

僕の問いかけに一夏が答えてくれた。

なぜ睡眠薬を飲ませないといけないのか。

それは僕が原因だ。

「それじゃ、早く始めようか」

「うん、そうだね。また迷惑をかけるけど許してくれる？」

「何を言うんだ？俺達は、”兄弟”じゃねえか。このくらいはお安い御用さ」

兄貴の言葉が胸にしみた。

「それじゃあ、始めるね」
「ああ」

僕の言葉に一夏は目を閉じて左手をこっちに向けてかざした。
その左手に、僕も目を閉じて自分の左手と重ねた。
その瞬間、僕の体は一瞬だが無重力空間にいるような浮遊感を感じた。

『もういいよ、一夏』
『そうか』

次に目を開けると、そこに写っていたのは誰もいない壁だった（・・・）

『それじゃ、一夏早く寝よ？』
『へいへい』

僕の提案に一夏はそう答えると、一夏はベッドに横になった。
その動きと同時に僕の視線も動いた。

『お休み、正樹』
『うん。おやすみ、一夏』

そして僕は深層空間へと沈んだ。
どういふことなのか分かっていない人がいると思うので、説明したいと思う。

僕には肉体がないのだ。
いわゆる幽霊のようなものだ。

（いや幽霊より性質が悪いな）

昼間はあのように一夏の体力を半分借りて擬似的ではあるが肉体を得ることが出来る。

もちろん寝る時も、あの状態でもいいのだが体力がなくなると、一夏から強引に体力を奪い一夏に負担がかかるので、時々ではあるがこうして元に戻って過ごすのだ。

今までは気軽にできたが、これからはオルコットを何とかしてからではないといけないので、気が滅入りそうだ。

（とりあえずは、寝よう）

そして僕も眠りにつくのであった。

IS〈破門されし者〉

第4話「学園生活二日目」

どうでもいいことだが、憑依している時は一夏に合わせているため、一夏が起きないと僕は具現化をすることが出来ない。
つまりは……

『早く起きて、一夏！』

僕は起きているのに、一夏が起きていないため外に出ることが出来ないのだ。

これが憑依するときであれば別に関係はない。

とはいえ意識が覚醒してから30分は動けずじまいなので、とうとう限界だ。

『とっとと起きろや！！鈍感王が！！！！』

「わ!?!」

僕の罵声に一夏は慌てて起きた。

「ったく、ようやく起きたか」

「な、何だよいきなり」

一夏が眠い目をこすりながら文句を言ってくる。

「起きているのに30分も動けないとイライラするんだ!」と言うことで、僕はこれで失礼するよ」

「あ、ああ……」

僕は茫然としている一夏をしり目に、そのまま部屋を後にした。

(さあて、ひとつ走りしてきますかね!!)

そして僕は制服のままで寮を出るのだった。

「おい、正樹」

「あ、織斑先生。おはようございます」

外を走っていると、偶然にも織斑先生にあった。

「今は先生と呼ばなくていい」

「……千冬姉さん、どうしたの?」

言われた通りに呼び方を軽くした。

「いや、寮を出ていくおまえの姿を見てな」

「あ、そうなんだ」

「で。こんなところで何をしている」

「体中をほぐそうと、ランニングを」

俺の答えに、千冬姉さんはため息をついた。

「お前はもう少し自分の身を案じろ」

「……分かっているよ。僕に何かあれば一夏に迷惑がかかるからね」

僕と一夏は一種の運命共同体。

もし僕が体力を使い過ぎれば、一夏の方にも負担がかかる。

「そういう事ではなくてーすみません、そろそろ時間が無くなるので……分かった。呼び止めてすまなかったな」

そして僕は再び走るのだった。

寮に戻り部屋に入ると、そこにはオルコットの姿がなかったのでもま食堂に来た。

「あ、一夏に筈って、何があったんだお前ら？」

そこにいたのは、いつも通りの一夏に不機嫌そうな筈の姿だった。とりあえず一夏の右隣に座った。

「おう、正樹。それが朝からこの通り不機嫌そうなんだ」

「……不機嫌ではない」

いやいや、かなり不機嫌そうだけど!?

「不機嫌なのは生まれつきだ!」

「一夏、お前何をしたんだ?」

「いきなりひどいな!」

一夏が抗議してくるがスルーだ。

「だって、こうなる原因の99%はお前だろう」

「うゝった、確かにそうだが……」

凶星を突かれて一夏もそれ以上講義することが出来ない。

「なあ筈」

「名前で呼ぶな!!」

「……篠ノ之さん」

もはやめちゃくちゃだ。

「頼むから、痴話喧嘩ならよそでやって。隣でやられると満足に食事もできない」

ただでさえ周りの視線がすごいのに。

「織斑君、隣良いかな？」

そんな時にやってきたのは……確かのはほんさんだっけ？達だった

「別に僕は構わないよ、一夏は？」

「え？ああ、別にいいけど」

「よし！」

一夏と僕の答えに、一人は安堵の表情を、のほんさんともう一人はタツチしていた。

「あー、私ももっと早く声をかけておけばよかった！」

「大丈夫。まだ二日目、チャンスはあるわ」

後ろの方でそんなやり取りが聞こえた。

……もう突っ込まないぞ。

「うわ、織斑君たちは朝すっごい食べるんだ」

「男の子だね」

「まあ、体力をつけないとね」

僕の場合は体力を少しでも多く作りだせれば、それだけ一夏にかかる負担も減るからだけど。

「ていうか女子って朝それだけしか食べなくて平気なのか？」

見ればパンに目玉焼きだけだったり、僕達よりは少なめだ。

「ま、まあ私たちは……ねえ」

「平気かな……」

「お菓子いっぱい食べるし」

一夏の言葉に三人は苦笑いを浮かべて答えた。
すると突然箒が立ち上がった。

「私は先に行くぞ」

「ああ、また後でな」

箒はそのままスタスタと立ち去って行った。
それを見た三人が口を開いた。

「織斑君達って篠ノ之さんと仲がいいの？」

「同じ部屋だって聞いたけど」

「ああ、幼馴染だし」

『えっ、幼馴染！？』

一夏の答えに三人が驚く。

「ああ。小学校1年の時に同じ剣道場に通うようになってから、四年生までずっと同じクラスだったんだ」

パン、パン！

食堂に手をたたく音が響いた。

「いつまで食べてる？食事は迅速に効率よくとれ。遅刻したものはグラウンド十周させるぞ！」

その声の主は織斑先生だった。

その声と同時にその場にいた全員が、慌てて朝食を食べ始めた。
ちなみにIS学園のグラウンドは一周5キロある。

もちろん朝からそんなに走らされるのはごめんなので、僕は急いで朝食をとるのであった。

これは後から聞いた話だが、織斑先生はこの寮の寮長なのだとか。そりゃ帰ってこないわけだ。

そして今はSHRだ。

「んん!! 織斑兄弟。お前たちのISだが準備に時間がかかるぞ」

「え？」

「なぜです？」

僕達の疑問に織斑先生が答えてくれた。

「予備の機体がない。よって学園で専用機を用意するそうだ」

専用機と言う言葉にクラス中がどよめいた。

そんな中、僕達の前に立つ人物が一人。

「それを聞いて安心しましたわ！」

それはオルコットだった。

ご丁寧に一夏に指をさしているし。

「クラス代表の決定戦。私とあなた達では勝負は見えていますけど、

さすがに私は専用機、あなた達が訓練機じゃフェアではありませんものね」

よくもまあこうバカげたことを言いきれるものだ。

僕はその言葉を聞いて怒りを通り越しすでに呆れていた。

「お前も専用機と言うのを持っているのか？」

「ご存じないの？ よろしいですわ庶民のあなたに教えて差し上げましょう。この私セシリア・オルコットはイギリス代表候補生。つまり現時点ですでに私は専用機を持っていますの。世界のISはわずか467機。その中でも専用機を持つのは全人類60億人の中でもエリート中のエリートなのですわ！」

「467機?! たった」

一夏が驚いたのは、奇数の少なさだった。

「ISの中心にあるコアが467個。このコアは篠ノ之束の元に作られ、それに関する情報は開示されていないんだ」

とりあえず僕は一夏に説明することにした。

ISのコアの技術は完全にブラックボックスで、世界に割り振られたコアを国や企業が研究、調整して何とかなっているらしいが。

「本来であればIS専用機は、国家、あるいは企業に所属するものしか与えられない。が、お前たちの場合は状況が状況だけにデータ収集を目的として専用機が用意される。理解できたか？」

「な、なんとなく」

「はい」

織斑先生の解説に僕たちはそう返事をした。

良いように聞こえるかもしれないが、言い方を変えれば単なるモルモットだ。

「あの、先生！篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか？」

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

織斑先生の答えを聞いた瞬間、クラス中がさらにざわめいた。理由は十分に分かる。

何せ”あの”博士の身内が、すぐにそばにいるのだから当然だ。

「あの人は関係ない」

「私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない」

そう言って箒は窓の方にそっぽを向いた。

（まあ、仕方がないか）

IS関連で彼女がどれだけの苦勞をしたのかは、僕達には想像もできない。

彼女があままでお姉さんと仲が悪いのはそう言ったこともあるのかもしれない。

「山田先生、授業を」

「は、はい！」

織斑先生の一言で、授業が始まった。

「IS、インフィニットストラトスは操縦者の体を特殊なバリアで包んでいます。ISには意識に似たようなものがあって、お互いの対話……つまり一緒に過ごした時間だけ分かり合えるというか操縦時間に比例してISも操縦者の特性を理解しようとしています」

なるほど、とノートを取りながら思っているとふと気になって横を見た。

一夏は理解できてないような表情をしていた。

「さっぱりわからない」

そうだろうと思いました。

「ISは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識してください。ここまでで質問のある人は？」

「質問！ パートナーって彼氏彼女みたいな存在ですか？」

「そ、それはその、どうでしょう……私には経験がないのでわかりません。えっと、どうですかね……」

生徒の質問に山田先生は顔を赤くして答えていた。

周りでは山ちゃん可愛いなどの声も聞こえていた。

（これって女子高での光景だよな）

一夏の方を見ると、どうやら思っていることは一緒のようだ。

（ん？）

ふと窓側を見ると、箒はずっと窓の方を見ていた。

一夏Side

昼休み、俺は箒と正樹たちと一緒にお昼でも食べようと思った。

「箒」

「……」

「篠ノ之さん」

名前で呼んでも返事がなかったので、姓で呼んでみたが、これもまたスルー。

「飯食いに行こうぜ。」

俺は周りにも声をかける。

「誰か一緒に行かねえか？」

「はい、はいはい！！！」

「行くよ、ちょっと待って！」

「お弁当持ってきてるけど、行きます」

俺の一言に三人が名乗り出てくれた。

本当に感謝だ。

「やっぱりクラスメイト同士仲良くしたいもんな。な？お前もそう

思うだろ？」

「……私は良い」

俺は最終手段とばかりに、前に正樹に教えてもらった『時には強引が一番だ』という助言を実行することにした。

「そういうな。ほら、立て立て」

俺は箒の腕をつかんで立たせようとした。

「おい！私は行きたくないと」

「なんだよ、歩きたくないのか？おんぶしてやろうか？」

俺がそう言った瞬間箒の顔が赤くなった。

「ぐあっ！」

それからはあっという間だった。
気づくと俺は地面に倒れていた。

「いてて……腕上げたな」

「ふんっ、こんなものは剣術のおまけだ」

俺はいつも通りに会話をした。

「え、えーと……」

「私たち今日は遠慮しておくね」

そしてクラスメイトの三人も逃げるように去って行ってしまった。

「あゝあ」

「な、何だ？何か言いたいことでもあるのか？」

少しばかり睨んでくる箒の目を俺は真正面から見据える

「箒」

「私を名前で呼ぶなと——」

「飯食いに行くぞ」

俺はそう言って箒の腕をつかんだ。

「お、おい。いい加減に——」

「黙ってついて来い」

「あっ……」

今度は箒は何も言わなかった。

そして俺と箒は食堂に向かうのだった。

S i d e o u t

第4話 学園生活二日目（後書き）

まずい……ISの案が中々まとまりません。
何とかまとまるようにします。

ちなみにあと1，2話で正樹のISが登場します。

第5話 特訓？（前書き）

ようやくここまでたどり着きました。

第5話 特訓？

一夏Side

「あんなにむきになることはないだろ？せっかく気を使ってやったのに」

「……そんなこと私は頼んでない」

俺考えていう事にした。

ここで間違えたら一生最悪なものになること間違いなしだ。

「もし頼まれたって普通はしないぞ、箒だからするんだぞ」

「な、何だそれ？」

「おばさんには世話になったし、同門で幼馴染なんだこれくらいのお節介は焼かせろ。それにあいっだって悲しむ」

「あ、その……ありが――」

箒が何かを言いかけると、頼んでいた日替わり定食が出来た。

「はい、日替わり二つお待ち」

「ありがと。箒、テーブルどっか開いてないか？」

俺の問いかけに、箒は不機嫌そうな様子でトレイを受け取った。

「向こうが空いている」

（俺、何かしたか？）

深くため息をつく俺であった。

Side out

IS 破門されし者 第5話「特訓？」

えっと今は放課後。

僕と一夏は道場にいた。

何でも箒がISの特訓をしてくれるとか。

その時に僕は少しでも疑えばよかったんだ。

「なぜこうなる!!」

そしてものすごい目で、僕たちを睨んでいる箒がいた。

「いや、ISの事を教えてくれるって言っただろ？だから正樹にも
思っただが」

なるほどそういう事か。

つまり箒は一夏と二人っきりで練習がしたかっただけで、そこに邪
魔者（俺）が入ってしまったんだ。

どこことなく罪悪感を感じた僕は少しばかり演技をすることにした。

「そ、そうだ!! 僕ちょっと急用を思い出した!!」

「そ、そうなのか？」

僕の叫び声が混じった言葉に一夏がそう聞き返してきた。

「そ、そうなの!! だから放棄、悪いけど一夏をお願いね!!」

「あ、ああ。用事であれば仕方がないな」

僕の言葉に筈はありがとうと言いたそうな表情だった。

「そ、それじゃあ僕はこれでッ!!!」

そして僕はそのまま壁を突き破って外に走った。

お願いだから、僕を巻き込まないでよ……

溜息しか出ない僕なのであった。

「さて、僕はどうしましうかね……」

僕は一通り考えをめぐらす。

「ダメもとで練習機でも借りてみようかな」

僕はそう思い立つと職員室に向かって走るのであった。

「それで練習機が必要なのか……」

「はい。お願いします」

織斑先生に事情を説明し終えた僕は、頭を下げた。

「頭を下げなくてもいい。とりあえずちょっとそこで待ってろ」

織斑先生はそう言うと、職員室内に入って行った。

それから数分後何やら分厚い書類を持って出てきた。

「織班弟、練習用のISには打鉄とラファール・リヴァイブの二つの機種があるがどっちにする？」

打鉄は文字通り日本製のISだ。

扱いやすく、性能も安定的で防御力も高いので有名だ。

最も信頼性のあるISだ。

変わってラファール・リヴァイブは、フランスのデュノア社製のISだ。

操縦しやすく汎用性も高い。

第二世代後期に作成されたISなので、性能も高めなのが特徴だ。どちらにするかを考えた末、僕は打鉄の方を選んだ。

ちなみに受け渡された書類を猛スピードで書く羽目になったのは言うまでもない。

『それで、今日はあんなに疲れていたわけか』

『そうなんだよ』

夜、いつものように一夏に憑依した形で寝ることになった。

そして寝るまでの数分間、少しだけ話をすることにしたのだ。

『結局書き終えた時にはアリーナの使用時間がないとのことで明日からにされたし』

『そうか。俺も箒に徹底的にしごかれたよ』

『兄貴は踏みつぶされた方がいいんじゃない？』

『それはどういう意味だ!!』

一夏はフィジカル、僕は実技訓練。
方向性は違うが着実に積み上げている。

『でも、この苦労が向かわれはず。だから頑張ろうな』
『おう！負けないように頑張ろうな!!』

お互いに士気を高めたところで、僕は眠気を感じた。

『それじゃ、眠くなったから僕はもう寝るね』
『了解。そんじゃお休み』

そして僕は深層世界にもぐりこみ眠りにつくのであった。
ちなみに次の日の朝も今朝と同じことを繰り返していたのは、関係ない話だ。

そして、とうとうオルコットとの決戦の時が訪れた。

第5話 特訓？（後書き）

ということで特訓編でした。

そしていよいよ次回、正樹のISが登場します。
案もまとまりました。

次回もお楽しみに。

感想やご意見などをお待ちしております。

第6話 白と黒（前書き）

まだまだ僕のターン！！

いよいよ正樹のISが登場します。

第6話 白と黒

決戦の日、僕と一夏に箒はアリーナのピットAにいた。
そこでISが来るのを待っているのだ。

「なあ箒」

そんな中、一夏が箒に話し掛けた。

「なんだ？」

「ISの事を教えてくれるって話だったよな？」

一夏の問いかけに、箒はあからさまに目をそらした。

「目をそらすな。一週間剣道の稽古しかなかったじゃないか」

そういえば昨日一夏ばやいてたな。

「————仕方がないだろ。お前のISはまだ届いてなかったんだから」

「ISがなくても知識はいろんなことがあるだろ？」

一夏の追究に箒はまた目をそらした。

「だから目をそらすなったら!!」

「一夏は良いじゃない、剣道が出来て少しはフィジカル面で鍛えられたんだから。僕なんて……」

「あゝ」

僕の眩きに一夏は言葉を失った。

僕はこれまでISの練習用機を使ってトレーニングをしていた。

「ISの操縦が全くできなかったんだから」

そう、ISに乗れたのは良かったが、それから先がダメだったのだ。

IS〈破門されし者〉 第6話「白と黒」

まず1日目。

打鉄に乗る。

しかしすぐに強制解除された。

2日目。

今度は思いラファールに乗った。

武装を展開しても強制解除されなかったので、ほっと胸を撫で下ろしたら強制解除された。

3日目。

二日間の反省を踏まえて、慎重に打鉄に乗った。

今度はすぐに解除されなかった。

だけど、武装展開したら強制解除された。

4日目。

次こそはとラファールに乗った。

武装展開しても強制解除されなかった。

そして的に向けてライフルを使おうとしたら解除された。

そして昨日。

打鉄に乗ったが、武装展開をしても大丈夫だった。

しかし30秒たったら強制解除された。

もう完全に心はぼろぼろだ。

「にしても、対戦がね」

一夏は徐に話題を変えた。

「そうだな。これはちよつとすごいな」

僕が言っているのは対戦する相手と順番だ。

一回戦	セシリア・オルコットVS織斑正樹
二回戦	セシリア・オルコットVS織斑一夏
三回戦	織斑正樹VS織斑一夏

まあ一番最初にあれと戦えるから、別にいいんだけど。

「織斑君、織斑君、織斑君!!」

すると山田先生が走りながらこっちに来了。

でも名前は三回も呼ばなくても大丈夫だと思うし、それに転びそう

でハラハラする。

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

一夏ナイス判断だ。

「は、はいっ。すくくはくく、すくくはくく」

「はい、そこで止めて」

「うっ」

息を吸った時に一夏が止めるように言ったら、本当に止めた
そして酸欠状態になりかけているのか、顔が見る見るうちに赤くな
っていった。

「……………」

「……ぶはあっ！ま、まだですかあ？」

一応弁明しておこう。

一夏は冗談で言っていた、そして本気で止めたから言うタイミング
を逃したのだ。

パパアン！！

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

「先生を玩具にするな」

僕と織斑先生のダブル攻撃だ。
さすがに痛そうだ。

「ひどいじゃねえか！千冬姉——」

パンツ！

「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなくば死ね」

相変わらず学習しない一夏に、織斑先生は微妙に過激な事を云った。

「え、えつとですね。織斑君たちのISが来ました！！」

そして搬入口が開かれる。

「織斑兄弟、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶっつけ本番のものにしろ」

一夏が何かを言おうとした瞬間、ピット搬入口が両方開かれた。
そこには《白》と《黒》があった。

「左が織斑一夏君のIS『白式』です。そして右側が織斑正樹君のIS『神無月』です。」

「……神無月」

神無月。

それは暦では10月を示す。

僕の好きな月だ。

「すぐに装着しろ、時間がないから初期化と最適化は実戦でやれ」
フォーマット フィッティング

僕は織斑先生の言葉に少しだけ急ぐように、ISに背中を預けるように乗った。

その瞬間、がしゅっ、がしゅっ、と空気の抜けるような音を出しながら、装甲が次々に閉じていく。

それはまるで今まで我が身同然であったかのような感覚で、違和感はない。

装着が完了すると、目の前に色々々なデータが表示される。

その数値でさえも、すべてが理解できた。

僕は神無月と繋がったのだ。

いつものように強制解除されるような感触もしない。

そして一つのウインドウが現れた。

『戦闘待機状態のISを確認。名称、ブルー・ティアーズ 中距離射撃型 特殊武装あり。操縦者、セシリア・オルコット』

（なるほど、あいつは射撃か）

それだけ知ればかなり戦局は有利だ。

「織斑兄弟、気分は悪くないか？」

ふと横を見れば、一夏もISを装着したようだった。

「おう、行けるさ」

「こちらと同じく」

「そうか」

俺達の答えに、織斑先生は一瞬だが優しく微笑んだ。

「兄貴」

「なんだ？ 正樹」

僕は少々緊張している体に喝を入れるため、一夏に話し掛けた。

「行ってくる」

「おう！頑張ってこいよな！！」

こういう時だけ、一夏が兄貴だということを実感できる。

（よし、気合十分！！）

僕はいつもの感覚で体を動かすとピット・ゲートへと進んだ。
そして僕は戦場にいる敵の元へと向かうのだった。

第6話 白と黒（後書き）

正樹のIS『神無月』に関しては、次で解説します。

次回もよろしくお願いします。

IS設定（ネタバレ注意）（前書き）

ということで、オリキャラのISの解説です。
必要に応じて追加していきます。

8／22追記…全体のほうを更新しました。

IS設定（ネタバレ注意）

【IS名称】 かなづき 神無月

【操縦者】 織斑 正樹

【戦闘タイプ】 近中遠距離型

【製作者】 ????

【世代】 第四世代

【性能】 シールドエネルギーが異常な程に高い。

さらには攻撃力も異常に高くデータ上では全世界にあるIS内ではNO. 1を誇る。

また、相手に攻撃できれば、与えたダメージの一部のエネルギーが回復する。

一度修理を行ったため、機動力や攻撃力がさらに向上した。

しかし、エネルギーの消費は激しく、一部の武器では展開するだけで大量に消費してしまう。

【単一仕様能力】 写し身の鏡…一度接触したISの武器を一つのみまねることが出来る。

但し、まねられるのは一機中一つのみで、一度でも使用すれば、その武器は二度と使えなくなる。

常時発動しており、戦局面ではうまく使えば有利に立つことが出来る。

【エネルギー量】 99999

【武装】

盾…最初から用意されていたもの。

近距離戦しか対応していない。

対エネルギー系に特化しており、エネルギー系の攻撃をすべて9割防ぐことが出来る。

また攻撃用としても使え、うまく攻撃させられれば相手に行動不能の異常を生じさせることが出来る。

この盾と同時にもう一つの武装（一部を除く）を展開することが出来る。

破滅の剣（劣）…神無月の基本武器でもある”クリエイト”の一形態。

大きな剣で、正樹は基本的にはこれを好んで使用する。

非常に高い攻撃力を誇り、一振りだけでも相手に大ダメージを与えることは必至。

大修理の後、威力を少々落とされ必殺技を使う事は出来なくなった。

ガナー…1次移行で現れた特殊武装。

指示を送るだけで、ほぼ自動的に攻撃や追尾ガードを行うことが出来る。

破滅の剣（真）…劣よりもさらに紅く光り輝く剣。

その威力は修理前のよりも格段に向上している。

但し、展開中はシールドエネルギーを大量に消費し続けるため、あまり長い時間使用することは不可能。

ライフル銃…新たに投入された武器。

名称はM82A1で、射程距離は約2キロと言われる対物の銃。

その威力は計り知れないもので、立った一発で、ISを破壊するのではと言われているが、威力を大幅に落とした状態で投入されている。

なので、威力はそれほど高くはない。

【技】

一刀両断…クラス代表戦で、セシリアに止めで使った技。

剣にエネルギーを込めて思いつき切りつける。

必殺技クラスでは、最も攻撃力の低い技。

ただし最も隙が生まれやすいため、複数を相手にする時の使用は自殺行為にもあたる。

ジョイントサークル…任意の相手の行動を、一定期間封じる効果がある。

ガナーの周辺もしくは囲い内が効果範囲である。

主に必殺技や、形成の立て直しの時に行う。

使用するたびにシールドエネルギーが消耗す

るので、あまり乱用はできない。

断罪…模擬戦で、シャルロットに使用した技。

上空に放り投げた対象者を数回に渡り剣で貫くように刺す。

その後、止めとして最強の一撃を食らわして地面に叩き付ける。

最強の一撃は剣の長さをさらに長くして切りつけるのと、エ

ネルギー球を作成してそれを爆破させる二種類がある。

必殺技クラスでは二番目に攻撃力と威力の高い技で、振り上げられれば二度とその大技から逃れることはできないとされている。

第7話 クラス代表決定戦（前書き）

まだまだ止まりません！！

ここからがチートと呼ばれる主な原因にもなるわけですが……。
なんだか賛否両論になりそうな予感が……

第7話 クラス代表決定戦

ゲートを出た僕は上空で待つセシリアの前まで移動した。

「あら、逃げずに来ましたのね」

「レディーを待たして約束をすっぱかすのは、男じゃないからな」

青色で、どことなく高貴な存在感を持たせるIS『ブルー・ティアーズ』に乗っているオルコットが余裕の笑みを浮かべて話し掛けてきた。

「最後のチャンスを上げますわ」

「チャンス？」

突然言い出した彼女の言葉に、僕は続きを促した。

「私が一方的な勝利を得るのは自明の理。ですからボロボロの惨めな姿を晒したくないのなら、今ここで私に謝れば許してあげないこともなくってよ」

―警戒 敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認―

僕はその言葉を聞いて、両手を肩の位置で広げ呆れたポーズをする。

「哀れですね……僕は今まで色々な珍獣を見てきましたが、喋るネズミと言うのはもっと珍しい」

「な、何ですって!？」

僕の挑発にオルコットが乗ってきた。

そんな彼女に指差して僕は声高らかに叫ぶ。

「まあ良い。貴様のその減らず口が二度とできないように、徹底的にひねり潰してくれる！……！」

「もう良いですわ！」

ブルー・ティアーズの武装『スターライトmark?』はあの大きなやつだろう。

―警告 敵IS射撃体制に移行―

それと同時に、こちらに向かってエネルギー弾が放たれる。

「無駄だ!!」

「なっ!?!」

僕はその攻撃をかわした。

だが……

―バリア貫通、ダメージ80 シールドエネルギー残量、9919
本体ダメージ、なし―

確実にダメージは入っていた。

ISく破門されし者く

第7話 「クラス代表戦」

ISの試合は基本、相手のシールドエネルギーを0にすれば勝ちである。

ダメージには二つの種類がある。

まず一つがシールドエネルギーで防ぐこと。

これはバリアに使われるシールドエネルギーを消費して、攻撃を受けた際には防ぐものだ。

そしてもう一つがバリアを貫通した際に発生する実体ダメージ。

これは命中した部分には、少なからず後に影響が生じる。

腕などに当たれば武装が弱くなる。

さらには、絶対防御と言うのが操縦者の命を守る。

ただしこれが発動すれば、シールドエネルギーを多く消費することになる。

これだけは避けなければならない。

「な、何ですのそのエネルギー量は!?!」

オルコットが何かをわめいている。

驚きたいのはこっちだ。

シールドエネルギーが僕のは異様に大きい。

何せ9999という馬鹿でかい容量なのだから。

これなら、頑張ればなんとかなる。

「口だけの高飛車女よ、年貢の納め時だ」

「つく!! 次から次へと私を馬鹿にして!!」

オルコットはこっちに向かってばかすかとレーザーを打ってくる。

僕はそれを冷静によけていくが、じわじわとダメージが入って行く。

（っちい！僕が神無月の速度についていけない！！）

内心で焦りが出る。

「さあ、踊りなさい。この私セシリア・オルコットとブルー・ティ
アーズの奏でるワルツで」

「ふん！演奏者の悪いワルツなんぞ！！聞くに堪えん！！！」

すでにシールドエネルギーは9000まで削られていた。

（武器……武器）

すると左側に展開可能な武器の一覧が出てきた。

だが、これは……

「無いよりはましか！！」

僕はそう叫ぶと左手に騎士が持つ大きな盾を装備した。

「遠距離射撃の私に近距離格闘武器で挑もうだなんて、笑止ですわ
！」

僕の武装を見た瞬間、オルコットがそう言って再びレーザーを放つ。

僕はもしかと思いい盾を、向かってくるレーザーに向けて構えた。

「つく！？」

少しばかり衝撃が来たが、ダメージが入っていない。

（そうか！これは相手の攻撃を防ぐものなのか！！）

これで何とか勝機は見えた。

僕は一気にセシリアの元へと近づく。

「っ！？」

「おりゃ！！」

そして思いっきり盾をオルコットに向けて横に薙ぎ払った。

「ぐう！？」

ダメージは入ったようで、シールドエネルギーが減ったのを確認した。

「なっ！？う、動けませんわ！！」

僕でも予想だになかったことが起きた。

つまりは僕が攻撃したために、相手の動きを封じたのだ。

（よくわからないが、これはチャンスだ）

「潰れろ！！」

「っぐ！！」

僕は思いっきり上空からブルー・ティアーズを盾で叩きつけるように斬りつけた。

そして僕はそのまま地面に着地した。

一夏Side

「な、何だあれ!？」

俺は正樹の戦いの様子を見て、思わず叫んでしまった。

「あの盾には、一定時間相手の動きを封じる効果がある」

千冬姉はそう言うと言の前にウインドウを出した。

「な!?!、シールドエネルギーが9999!?!?」

それを見た山田先生は驚きのあまりに叫んだ。

俺ですらも驚いた。

俺のIS白式のシールドエネルギーは800だ。

「……この戦いでオルコットは負けるだろうな」

そんな千冬姉の言葉に、俺達が否定することはできなかった。

Side out

「――二十七分、初見でこのブルー・ティアーズに耐えたのはあ

あなたが初めてですわね。褒めて差し上げますわ」

「それは光栄だ」

あの後、かなり消耗戦になっていた。

僕のシールドも残り5000となっていた。

今まででわかったことは主に二つ。

まず一つは、どうも攻撃するところらのシールドエネルギーが回復するようだ。

さっきの一撃で、こちらのシールドが50回復したからだ。

そして次が、どうも攻撃をするたびにシールドが消耗してしまうこと。

攻撃し損ねた時に、ダメージを受けていないにもかかわらずシールドが減っているのを見たから確かだ。

(むやみに攻撃するのはやめよう)

それが今の方針だ。

「でも、そろそろフィナーレと参りましょう!」

ブルー・ティアーズから小型のビットが放たれ、さらにそれからレーザーを放たれる。

「なに!?!」

一気に4か所から攻撃が来る状態に驚いた。

これでは、確実に負ける!!

「一か八か!?!」

僕は地面に降り立ち、できるだけ攻撃が来る位置を少なくする。

そしてレーザを盾で防ぐ。

僕は攻撃の合間を見て上空へと飛び立ち、ビットを一機破壊した。

「命中!!」

「無茶苦茶しますわね!!でも、無駄なあがきですわ」

続いて3つのビットから放たれるレーザを裁き、もう一機を破壊する。

時よりスターライトからも攻撃が来るので気をつけながらだ。

オルコットはビットを戻した。

僕はそんな中、ある疑問を感じていた。

（なぜビット攻撃時に加勢しない？）

普通ならば1より2、2より3といった具合に多い方がいい。

なのに攻撃に加勢してこない？

これはまさか……

僕は一つの可能性を導きだした。

オルコットは加勢しないのではなく、加勢できないのではないか？
大方あれの制御に集中するからとかそういった理由だろう。

そして、再びビットが放たれた。

（今だ!!）

制御に集中しているオルコットに、邪魔なビットをすべて破壊して急接近する。

「これで終わーかかりましたわねーしまった!？」

僕はオルコットが笑みを浮かべたのを見て、退避行動をとろうとした。

「4基だけじゃなくってよ!!」

ブルー・ティアーズから追尾性のロケットが放たれた。

盾で防いでもいいかもしれないが、レーザ系列だけでもダメージが入るのだ。

分が悪い賭けだ。

僕はロケットをまこうとするが、ロックオンされているらしく振り切ることが出来ない。

こっちの機動力がロケットよりも若干遅いため、次第に距離が縮まりついに命中した。

一夏Side

「正樹!？」

正樹に攻撃が命中するのを見て、俺は声を上げてしまった。

「……機体に救われたな……ハラハラさせやがって、馬鹿者が」
「えっ？」

しかし、千冬姉だけが冷静にそうつぶやいた。
爆煙が晴れ、そこにあったのは形はさっきまでと同じだが黒から漆

黒の色になり、周りには小さな剣が2、3個、神無月の周りを浮遊していた姿だった。

S i d e o u t

第7話 クラス代表決定戦（後書き）

すみません、長くなりそうだったので、分けました。
続きは本日中に投稿します。

それでは、これにて失礼します。

第8話 決着（前書き）

第8話完成しました。

今回はあの人が登場します。

でも、これで良かったのでしょうか？

第8話 決着

僕は夢を見ていた。

目の前の光景はただの火の海。

それは僕が忘れていた、場所の記憶。

もし、戦争が起きなければここは豊かな緑に恵まれただろう。

でも、もしも何てものは存在しない。

（ああ、そうさ。戦いにもしもなんてない）

いつまでも眠っているわけにはいかない。

僕はまだ戦える。

だから、神無月……僕に力を貸して。

あのバカに戦いを教えるために力を貸して。

その願いが届いたのか、一つのメッセージが聞こえたような気がした。

「フォーマットとフィッシングが完了しました。確認ボタンを押してください」

僕は頭の中でボタンを押す。

次の瞬間、僕の視界は一気に明るくなった。

IS「破門されし者」

第8話「決着」

「えっ!？」

僕の姿を見たオルコットが声をあげた。

「まさか、^{ファーストシフト}1次移行！？ あなた今まで初期設定だけの機体で戦っていたと言うの！？」

「……おい、セシリア・オルコット」

僕は彼女の声を無視して声をかける。

「貴様は本物の戦場を見たことがあるか？」

「な、何を言って――」

オルコットは、何を言っているのかがよくわかっていない様子だった。

「無いよな。そこはまさに地獄絵図だぜ？ あたりは火の海、漂ってくる香りは火薬のにおい、そして人の血の匂いそして腐敗した人のにおい……すべては戦場でしか味わう事の出来ないものさ」

僕はそう言いながら展開可能武器の一覧を見た。

そこには三種類の武器があった。

その中で僕は”破滅の剣”を選んだ。

「戦場にあるのは敵か味方か……生か死かのどちらかだ。初期設定？ 一次移行？ それがどうした。そんなもの負けても言い訳にすらならん全ては己が実力なのだからな」

「ごちゃごちゃうるさいですわ……！！」

再びロケットを放ってくる。

「戦場で信じられるのは、自分の腕だけなんだよ……！！」

僕はセシリアに一直線に突っ込みながら叫ぶ。

ロケットは周りに浮いているガナーに指示を送り撃墜させる。

背後で爆発したり、攻撃を数発喰らったりするがそんなの関係ない。

「こういうのを特攻と言ってな！！！」

僕は回避しようとするオルコットを追跡しながら伝える。

「よく覚えておけ。特攻にとってそんな攻撃微々たるものだ！！！」

「っ！！！」

僕はそう叫ぶや否や一気に加速して、ブルー・ティアーズを破滅の剣で一閃する。

ピー！！

『試合終了。勝者——織斑正樹』

「勝者か敗者の、どちらかだ」

斬ったままの体制で、僕はそう告げる

「敗者などに興味はない。失せるがいい」

僕はそのまま破滅の剣を格納して、オルコットの方を見ずにピットへと戻るのであった。

「……………」

ピットに戻ったのは良いが、雰囲気は最悪だった。
誰も口を開こうとしないのだから。

「……織斑兄。準備をしろ」

「……ああ」

「先生」

「なんだ？」

そんな空気に居た堪れなくなり、僕は織斑先生に声をかけた。

「ちょっと外に行ってきたでもいいですか？」

「……ああ、構わん。ただし次の試合には間に合うように戻ってこい。良いな？」

織斑先生は察してくれたのか、快く了承してくれた。

僕は心の中でお礼を言うと、そのまま後にした。

一夏Side

「……………」

俺はずっと考えていた。

（正樹、一体どうするつもりなんだ？）

俺は正樹と言う人間を忘れていた。

これは俺のせいでもあるのだ。

なぜなら、正樹の怒りの理由が半分俺も含まれているんだから。

「……………」

（俺は俺にできることをやろう！！）

最終的に俺はそう決心すると、次の代表戦を開始するため、外へと飛び出すのであった。

（誰かを守れるようにならなくちゃ）

S i d e o u t

僕はしばらく廊下を歩いていた。

パン！！

「何をやっているんだっ！僕は」

思わず廊下の壁を殴ってしまった。

それどころではない。

今僕は激しい後悔に苛まれているのだ。

もちろん理由はさっきの戦いだ。

僕は、この力で彼女を――殺そうと――した。

あの戦いのどこに戦場と見なければならぬ所があったんだ？

「ただがむしゃらに、怒りで彼女に暴力をふるった」

泣きたいのに泣けない。

それは僕がもう人並みの感情を持っていないことの証明だ。

「僕は……こんなことをするために、生きてここに来たわけじゃないのに」

そう呟きながら何度も壁を殴りつける。

「公共物を壊すのは、感心しないね」

「……………」

突然の声に慌てて顔を上げると、青色の髪をした女子学生がいた。

「で、何かあったのかな？ 少しばかりお姉さんに話してみて」

その人からは、一切の同情も、畏怖も感じられなかった。

この人なら、話しても大丈夫。

そんな風を感じた。

「実は……」

僕はゆっくりと口を開く

さっきの戦いで起こったことすべてを。

「ふーん。なるほどね」

それを聞いた女子は納得したような表情を浮かべて僕を見据えた。

「確かに、君の戦い方はまずかったかな。でも、戦いと言うのは少なからず暴力にもなってしまうものよ」

女子学生の言葉に、僕は何も言えなかった。

「だったらね、君にとっての”強さ”を見つければいいことよ」

「僕にとっての強さ……」

「そうよ。そうすれば、自然に自分の納得のいく戦い方ができるようになるわ」

女子学生の言葉が胸にしみた。

―試合終了 勝者、セシリア・オルコット―

そんな時、アリーナの方からアナウンスが聞こえた。

「さ、もう行きなさい。次はあなたの番でしょ？」

「は、はい!!」

僕は女子学生に促らされるまま駆け出した。

「あ、あの!!」

「ん? 何かな」

「アドバイスありがとうございました!!」

僕は話を聞いてくれてアドバイスをくれた女子学生に一度頭を下げてお礼を言うと、そのまま走っていくのであった。

3人称Side

「織斑正樹君……ねえ」

誰もいないどうかで、青色のショートヘアの女子学生が呟いた。

「中々興味深い人だね。それに……」

女子学生は最後の言葉を言いかけ、アリーナとは逆の方へと歩き出す。

「彼なら、きっと世界最強になれるわね」

そして女子学生は、その場から姿を消したのであった。

Side out

「戻りました」

「ああ、ちょうどいい時間だ。すぐにISを装着しろ。相手はすでに外で待っている」

「は、はい!!」

僕は織斑先生にせかされるように、ISを装着すると、ピットを出た。

さあ、始めよう。

僕にとっての強さを見つけ出す戦いを!!

第8話 決着（後書き）

ということとで次回に続きます。
次回は兄弟の勝負（？）です

第9話 強さとは（前書き）

PV24，337アクセス、ユニークが3，880人 になっていました。

さらにはお気に入り登録が29件。

本当にありがとうございます！！

こんな駄文ですが、これからも精いっぱい頑張っていこうと思うので、よろしくお願いします。

そして今回はちょっと短めです。

第9話 強さとは

「そういえば、こうやって兄弟で戦うのは、初めてだよな」
「そうだな」

僕の言葉に対峙している一夏が答える。

「それじゃ、始めるか」
「ああ」

そして僕たちは一斉に動き出した。

IS〈破門されし者〉 第9話「強さとは」

「はあ!!」

一夏が剣……雪片式型を振りかざす。

「甘い!」

それを僕は盾で防ぐ。

だが、シールドエネルギーが多少だが削られた。
そして僕たちは再び距離を取る。

―IS名称…白式 特殊武装あり 操縦者…織斑一夏 戦闘スタイル…近接特化―

一夏のＩＳの情報が表示される。

（バリア無効化攻撃か）

僕は織斑先生のＩＳを見てすでに知っていたのだが、雪片はバリアを貫いて相手にダメージを与えることに長けている。

彼女が第一回モンド・グロッソでの大会で優勝できたのは、この能力によるものが大きいらしい。

「一夏、お前は強さの意味を考えたことがあるか？」

「……どういう意味だ」

一夏からくる攻撃を盾で対処しながら言葉を交わす。

「そのままの意味だ。僕はさっきまで強さの意を履き違えて考えていた」

「でも、お前は十分に強いじゃねえか！！」

「いや、違う！！あれは強さじゃねえ！！ただの暴力だ！！！！」
「っぐ！」

僕は叫びながら一夏に一撃加えた。

「強さの答えなんてものはない！！だから僕は自分流の強さを探す！！それを否定できるものは、この世にはいない！！！！」

僕はそう叫びながら一夏に急接近する。

そして破滅の剣を振りかざそうとしたが、すんでのところで雪片式型に止められる。

剣と剣とで交わりつつも、僕はそれを貫こうとする。

「それを否定なんてしない!! だったら、俺だってお前たちを守れるようになってやる、さ!!」

「ちい!!」

一夏に思いっきり跳ね飛ばされ、体勢を崩してしまった。

「はあ!!」

「ぐう!？」

そして僕は一夏のバリア無効化攻撃をもろに受けてしまった。

ーバリア貫通 ダメージ、860 シールドエネルギー残量、4300 実体ダメージ、中ー

先ほどの攻撃で絶対防御が発動してしまい、シールドがかなり削られた。

「だったらやって見せるんだな!! ガナー!!」

僕の呼びかけに応え、中に浮かんでいた4つの剣が一夏に向けて放たれる。

だがその向きは全部がバラバラで、一夏を捕らえていない。

「全部外れている、ぜ!？」

一夏はそう言って動こうとするが、動けないようだ。

「な、何だ!？なんで動けないんだ!!」

「ふふ、引っかったな一夏。では見ると良い、これが僕の全力だ!!!!」

僕は一夏にそう言うと、必殺技を使うことにした。

「力の元にひれ伏せ！！一刀」

一夏の目の前までイグニッションブースト瞬時加速で近づき、剣を振り上げる。

「両断！！！」

そしてそれを一気に振り下げた。

『試合終了。勝者——織斑正樹』

「はぁ、負けたぜ」

「いい戦いであつたよ」

僕と一夏は互いに健闘を称えあうと、そのままピットへと戻るのであつた。

第9話 強さとは（後書き）

とまあこれにて、クラス代表選は終了です。

次回はセシリアについて多少触れていきたいと思います。

では、また次回お会いしましょう。

第10話 クラス代表決定戦終了（前書き）

えっとかなり遅くなってしまいました。

セシリアですが、こんな感じで良かったんですね？

第10話 クラス代表決定戦終了

「それで、さっきのあれは何だったんだ？」

寮への帰り道、僕は一夏からの質問対処に忙しかった。

ちなみにさっきのと言うのは、一夏の身動きが取れなくなった奴のことだ。

「あれは、ジョイントサークルだ」

「ジョイントサークル？」

一夏は 聞き返してきた。

「簡単に言えば相手の動きを一定時間止める物で、その範囲はあの3つの剣の範囲内っていう事」

「それってかなり反則じゃないか!!」

僕の説明を聞いた一夏がそう叫ぶ。

「僕に言われても困る。それにあれをやる度にシールドが減っていくから、あまり乱用はできないし」

「……………そ、それはなんとも」

「一夏」

複雑そうな表情をしている一夏に、僕は言い聞かせるように声をかける。

「何事にもプラスがあればマイナスがある。それをすべてひっくりめて生かすことが、大事なんじゃないのか？」

「そうだったな。さんきゅ正樹」

僕にお礼を言ってくるが、これはただの意見の押しつけなので、気にするなと返した。

「お、あれは箒じゃない？」

「え？ あ、本当だ？ おーい、箒！！」

一夏は大きな声で箒の名前を叫ぶ。

あ、顔真っ赤だ……あれ絶対に後から言われるぞ。

僕はそれを悟りすぐにその場から逃げた。
それから数分後。

「ぎゃあああああああ！！！！」

一夏の悲鳴が聞こえてきたのは、完全に余談だ。

IS〈破門されし者〉 第10話「クラス代表決定戦終了」

3人称Side

ザー――

寮のある部屋にシャワーの音が響く。

それはセシリア・オルコットの部屋だった。

そしてシャワールームでは、部屋の主の一人でもあるセシリアがシャワーを浴びていた。

「織斑正樹……織斑一夏」

セシリアはうわ言のように二人の名前を呟く。

（不思議ですわ。二人への想いは同じはずなのに……）

セシリアの両親……特に父親は養子だったため常に母親の顔を見て
びくびくしていた。

そんな光景を見続けてきた彼女は、いつか自分が付き合う時は強い
殿方と付き合うと決心していたのだ。

そして現れたのは織斑兄弟。

片方は絶大な力を見せられて勝ち、もう一人はあと一步の所で負け
てしまった。

まさに理想にぴったりの人物だ。

なのに……

（弟さんへのこの気持ちは殿方としての”好き”ではなく、まるで
友人に対しての好き……ですわ）

ここまでの想いの違いは何が原因なのか。

それは強者の一面を見たからだ。

それは代表決定戦の初戦が終わって、ピットで休憩している時だっ
た。

パンー！

（な、何ですの！？）

突然の音に、セシリアは驚きながら廊下の方へと足を向けた。

そこで見たのは、遠くの方で壁を殴ったのか、手について落ち込ん

でいるような正樹の姿だった。

「何をやっているんだっ！僕は」

正樹の叫び声が響く。

それを聞いてもセシリアはその場から動くこともできなかった。

「ただがむしやらに、怒りで彼女に暴力をふるった」

（あの人は……もしかして）

この時、セシリアは一瞬考えてしまった。

織斑正樹と言う人間は、強くはないのだと。

ただ単に、自分の弱さを隠すために力をふるっているのだと

「僕は……こんなことをするために、生きてここに来たわけじゃないのに」

（何だか馬鹿馬鹿しいですわ）

彼の嘆きを聞いたセシリアは自分の言動の幼稚さに笑いそうになった。

常に人の事を卑下し、さらには彼らを小ばかにした自らの行動に。

（許してくださるかしら）

セシリアはシャワーを浴びながら考える。

やがて、浴び終えたセシリアは私服に着替えると、机の方に腰かけた。

まだもう一人は帰って来ていない。

がちやり

「あ」

「あっ！」

そして今ルームメイトが帰ってきた。

Side out

(悪いことしたよな)

俺は部屋に向かいながら、ずっと考えていた。

それはオルコットのことだ。

彼女がきっかけとはいえ、女性にあそこまでやる必要はない。

とにかく今自分にできるのは、謝ることだけだ。

僕はそう覚悟を決めると、部屋のドアを開けた。

「あ」

「あっ！」

部屋の勉強机に腰かけていたオルコットの姿を見つけた俺は、一瞬固まった。

さっきまで謝ろうと思っていたのに、その覚悟は一瞬で灰になった。

「正樹さん」

「オルコット」

とりあえず僕は、気を取り直して謝ることにした。

「「ごめんなさい!!!!」」

なぜかオルコットの謝罪の声と、重なってしまった。

「「つぷ、あははははは!!!!」」

そのことに、僕達は思わず吹き出してしまった。
しばらくして落ち着いた僕たちは向かい合って座っていた。

「はい、紅茶」

「あ、ありがとうございます」

僕は淹れた紅茶が入ったカップを、オルコットに差し出した

「それで、どうしてオルコットが謝るんだ？」

「そ、それは……私はあなた方にひどいことを言ってしまったから
で……」

「そんな事ちつとも気にしてないよ。それよりも、あの勝負の時の
無礼なふるまいを許してほしい。この通りだ!!」

僕は立ち上がって頭を下げた。

「あ、頭を上げてください!! わ、私はそのことについては起こっ
ていませんわ!!」

「……」

オルコットの言葉を聞いて僕は、顔を上げた。

「そ、それですわね……その」

（なぜに顔を赤くする）

「私とお友達になってくれませんか？」

「……………」

はっきり言おう。

オルコットの言葉に、僕は驚いた。

僕の知っている彼女だったら、決してこのような言葉は出なかったはずだ。

それだけ、彼女が成長したという事なのかもしれない。

「ああもちろんだよ、オルコット」

「セシリア……私のことはセシリアとお呼びください」

オルコットもとい、セシリアが俺にそう言うてくる。

別に断る理由もないので、僕は言われた通りに呼ぶことにした。

「分かった。それじゃあ、改めてよろしくな、セシリア」

「ええ！」

僕の差し出した手をセシリアが握って握手した。

今ここに、僕には大きな意味での友達が出来た。

第10話 クラス代表決定戦終了（後書き）

正樹はセシリアにはフラグを立てていません。（ここ重要）

これにて巡回執筆は完了です。

次の更新は2，3週間後ぐらいになります。

またアンケートを行いたいと思います。

内容ですが、『ヒロインをだれにするか』です。

次の人物に該当する番号を感想ないしは、メッセージでお知らせください。

1..鳳 鈴音

2..篠之ノ 箒

3..更識 楯無

4..シャルル・デュノア

5..????

5は誰かなんて知っている人は分かりますよね？

期限は次回の更新時までです。

票がなかった場合は、現状通りにいききたいと思います。

ヒロイン決定アンケート

えー、まずは更新が滞りすみません。

本気で私生活が忙しく、執筆する余裕がありません。

そんな中、できることをと思った結果このアンケートという結果になりました。

このアンケートは、本作のヒロインを決定するものになります。

皆さんの力を貸してください。

次の候補リストから、希望する人物を選び、対応する番号を感想または、メッセージ等でお知らせください。

一人あたりに投票できる票数に規制はありません。

期限は一応一か月ということにさせていただきます。

1..篠之ノ 箒

2..セシリア・オルコット

3..凰 鈴音

4..シャルロット・デュノア

5..ラウラ・ボーデヴィツヒ

6..更識 楯無

7..篠之ノ 束

ご協力お願いします!!

ヒロイン決定アンケート（後書き）

5月25日追記…アンケートですが、27日に締め切りとさせていたいただきます。

ご迷惑をおかけしますが、ご了承ください。

第11話 クラス代表決定（前書き）

お待たせしました！！

一月も更新にかかってしまい申し訳ありませんでした。

本日より、執筆を開始いたしましたので、少しは進められそうです。
ヒロインのアンケートの結果ですが、後書きのほうをご覧ください。

第11話 クラス代表決定

翌日のSHR

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいい感じですね！」

クラス代表が一夏に決まったと山田先生によって告げられた。しかし、いい感じとはどういう意味なんだろうか？
まあ確かに言いやすいが。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

すると突然、一夏が手を上げて山田先生に声をかけた。

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか？」

「それは――」

「それは僕が説明しよう！」

山田先生の説明を遮って僕は席を立った。

「僕が辞退したからだ。もとより僕は高慢飛車女にお灸を据える事が目的であって、クラス代表に興味はなかったからね」

「お前って、昔からそうだったな……それじゃあ」

一夏は昔の僕の事をよく知っている。
学級委員とかが苦手で、立候補されても辞退していたことを。

「僕が辞退したことで、クラス代表はセシリアへと移った。でもそれを――」^{わたくし}「私が辞退したのですわ!」――取るなよ……人のセリフ」
「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然の事。何せ私セシリア・オルコットが相手だったのですから、それは仕方のないことですわ」

腰に手を当てるというもう見慣れたポーズで説明をするセシリア。しかも一夏がむっとした表情になってるし。

「それで、まあ、私も大人げなく怒ったことを反省しまして”一夏さん”にクラス代表を譲ることにしましたわ。やはりISは実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの」

今セシリア、さりげなく一夏の事を名前で呼んだ。
これってもしや……

「いやあ、セシリア分かってるね!」

「そうだよねー。せっかく世界で唯一の男子が二人もいるんだから同じクラスになった以上持ち上げないとねー」

セシリアの言葉に、周りの女子たちが一気に称賛の声をかける。
と言うよりそれって持ち上げた後に落とすという意味か?

「そ、それですわね。私のように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げれば、それはもう見る見るうちに成長を遂げ――」

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。”私が”直接頼まれたからな」

セシリアの言葉を遮って、箒が思いつき机をたたいて立ち上がりながら言った。

と言うより【私が】をものすごく強調したな。

「あら、あなたはISランクCの篠ノ之さん。Aの私に何かご用かしら？」

「ラ、ランクは関係ない！」

「座れ、馬鹿ども」

すると、それに見かねた織斑先生が軽く頭を叩いて二人を席に座らせた。

「お前たちのランクなどゴミだ。私からしたらどれも平等にひよっこだ。まだ殻も破れていない段階で、優劣を付けようとするな」

そして織斑先生は、二人にそう告げた。

いつも思うが、織斑先生は本当に過激な事を言う。

「クラス代表は織斑一夏。異存はないな？」

織斑先生の問いかけにクラス中（一夏を除いて）が返事をした。

こうして、クラス代表は正式に一夏となった。

IS（破門されし者） 第11話「クラス代表決定」

四月も下旬。

桜の花が散って、そろそろ夏に入り始めようとする時期、僕たちは今日も今日とて織斑先生の授業を受けていた。

「では、これよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑兄弟、オルコット、試しに飛んでみる」

「分かりましたわ」

「了解です」

織斑先生の指示に僕とセシリアは返事をする、最初にセシリアがISを起動させた。

セシリアは左耳にイヤークフスの形で付けられている。

一夏の場合は右腕にガントレットが僕の場合は首にかけてある知己の形をしたブレスレットの形で待機状態になっていた。

「……」

僕は集中している一夏をしり目にISを起動させた。

「ん？えっと、あれ？」

一夏はISを起動できずにいた。

「早くしろ！熟練したIS操縦者は、起動までに1秒と掛からないぞ」

「集中……」

織斑先生の激に一夏は目を閉じてガントレットに片手を乗せた。

「来い、白式！」

一夏がそう叫んだ瞬間、白式が起動した。

「よし、飛べ！」

「はい！」

織斑先生の指示にセシリアが返事をする、ものすごい勢いで飛び出した。

「……よし」

一夏はセシリアに倣って飛び出そうとするが、後方に移動して上空に飛びだった。

「うわぁ……何ちゅう怖い飛び方してるんだ。……待っていてよかった」

それを見て僕はボソツと呟いた。

一夏より先に飛んでいたら、怪我をする予感がしたから残っていたのだが、この様子を見て予感が当たったような気がした。

「織斑弟、何ぼさっとしている」

「あ、すみません!!」

僕は慌てて謝ると、上空へと飛びだった。

「つとと！」

「ま、正樹さん!？」

突然横に現れた僕に、セシリアが驚いた様子で声を上げた。

「あれ、どうしたの? 鳩が豆鉄砲を食らったような顔をして」「は、速いですわね」

どうやら早かったのを驚いているようだった。

『遅い。神無月はともかく、スペック上の出力では白式の方が上だぞ』

後ろの方を飛んでいる一夏に織斑先生の激が入った。

「そう言われても……自分の目の前に角錐を展開させるイメージだっけ？……よくわかんねえ」

『イメージは所詮イメージ。自分のやりやすい方法を模索するのが得策でしてよ？』

一夏がイメージで頭を抱えていると、セシリアがISの通信で説明をした。

「大体空を飛ぶ間隔自体があやふやなんだよ。なんで浮いてるんだ？これ」

うわゝ、そこを気にするのか？

一夏がISを操縦できるようになるまでには時間がかかりそうだと、僕は改めて実感した時だった。

「そ、その。よろしければ放課後に指導して差し上げますわよ？」

「はあ？」

セシリアの提案に一夏蓮で首を傾げていた。

「その時は二人で————」

『一夏！正樹！そんなところで何を遊んでいる！……！』

その時、通信で箒の激が聞こえた。
見れば山田先生のインカムを強引に奪っていた。
あ、織斑先生に叩かれた。

『織斑兄弟、オルコット。急降下と完全停止をやって見せろ。目標は織斑弟だけ地上から三センチ以内、それ以外の者は十センチ以内だ』

「ちょ!?!なんで僕だけ厳しいの!?!」

「頑張れ、正樹」

こいつ、他人事だと思って。

「では、お先に」

そんな僕たちの様子をしり目に、セシリアは一足先に急降下を始めた。

そして目標地点で完全停止した。

「うまいもんだなあ」

「それじゃ、兄貴。お先に」

「おう!」

僕は一夏に一言告げて、急降下を始めた。
風を切る感覚が妙に心地いい。

（よしここだ!）

僕は頃を見てブレーキをかけると、ISは地上すれすれに停止した。

「ふむ、2・5センチか。上出来だ」

「ありがとうございます」

織斑先生からお褒めの言葉をもらえた。

「良かったですよ、正樹さん」

「そっちこそ、セシリア」

そんなこんなに話していると風を切る音が聞こえた。

「うわああああああ！！！？」

突然聞こえてきた一夏の叫び声に上空を見ると、僕の真上に白式が見えた。

「正樹さん！！！」

「正樹！！！」

「織斑弟くん！！！！！」

三人の呼ぶ声が聞こえたのと同時に、僕は意識を失った。

第11話 クラス代表決定（後書き）

ヒロインですが、楯無先輩に決定いたしました。

アンケートにご協力いただいた皆様に、感謝の言葉を述べさせていただきます。

本当にありがとうございました。

箒やラウラに関しては、要望が多ければこの作品が完結後に、Ifとして書くかもしれないので、この人をヒロインにしてほしいなどの要望がありましたらどしどしとお寄せください。

皆様のご感想やアドバイス等をお待ちしております。

それでは、次回でお会いしましょう

第12話 就任パーティ（前書き）

一気に二話連続更新です。

第12話 就任パーティ

「うう……ここはどこだ？」

俺が目を覚ますと、そこは全く知らない場所……おそらく保健室にいた。

「正樹！」

突然の声に横を見ると、一夏が申し訳なさそうな様子で立っていた。

「大丈夫か？」

「ああ、体中が痛い以外は問題ない」

「悪かった。俺、間違えて正樹に」

一夏の言葉で何があったのかが理解できた。

どうやら、一夏は完全停止のやり方が分からずに、たまたま下にいた僕へと墜落したんだろう。

ISを起動させていなかったら、今頃はただじゃ済んでなかっただろう。

「まあ、わざとじゃなければ次できを付けてもらえれば十分だ」

「あ、織斑弟くん」

「気が付いたか織斑弟」

すると、保健室に織斑先生と山田先生が入ってきた。

「体の方は大丈夫か？」

「あ、はい」

俺の答えに安心したのか織斑先生はほっと一息ついた。

「それで、織斑弟のISなのだが……」

「え？ 神無月がどうかしたんですか？」

織斑先生の言葉に俺は、聞き返した。

見れば一夏がさらに申し訳なさそうな様子で手を合わせていた。

「実は織斑弟くんのISなのですが、ダメージレベルがCに達していたために修理に出すことになりました」

「……そうですか」

ダメージレベルはISが受けた実体ダメージで期待が損傷のひどさを表したものだ。

AやBならばまだ何とかなるらしいが、Cになると機動制限がかかってしまう。

これは、ISの学習能力によるもので、おかしい状態で起動させて使えば、IS自体がその状態で適応してしまう恐れがあるのだ。

「修理は先ほど始めましたが、しばらく時間がかかります」

「今後の実地授業に関しては、後程伝える」

「分かりました。わざわざありがとうございます」

僕の言葉を聞いて、先生方は保健室を後にした。

「それじゃ、一夏行くぞ」

「お、おう！」

そして僕も保健室を後にするのであった。

IS 破門されし者 第12話「就任パーティー」

「織斑君、クラス代表決定おめでとう！」

『おめでとう〜!!!』

クラッカーが周囲に鳴り響き、周りには明らかに1組のクラス以外のものがあると思われる人数の女子がいた。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がりねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

これは分かっているとは思うが、一夏がクラス代表に決定したことを祝うパーティーだ。

その証拠に、僕の座る後ろの席には『織斑一夏 クラス代表就任パーティー!!!』と言う張り紙がある。

そして一夏の隣がセシリアと箒でその横に僕と言う順で座っていた。

ちなみに僕の隣はのほほんさんだ。

「一夏さん、はいどうぞ」

「あ、ありがとう」

「……人気者だな、一夏」

一夏に飲み物を注ぐセシリアに、機嫌の悪い箒。

「そう思うか？」

「ふん！！」

一夏の問いかけに箒は思いつきりそっぽを向いた。

「なんでそんなに機嫌が悪いんだよ？」

「お前のせいだろ」

僕が頭を抱えて呟いた時だった。

パシン！！

「ん？」

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏君と織斑正樹君に特別インタビューをしに来ました」

栗色の短めの神にメガネをかけた女子生徒の言葉に、場がものすごい勢いで盛り上がった。

「あ、私は二年の黛まゆずみ薫子かおるこ、よろしくね。新聞部副部長をやっています。はい、これ名刺」

そう言って僕たちに名刺を渡してきた。
何気に難しい漢字だ。

「ではではズバリ、織斑一夏君！クラス代表になった感想をどうぞ！」

そう言って黛さんはぐぐぐと、一夏にボイスレコーダーを近づけた。

「えーと……まあ、何と言うか……頑張ります」

「一夏、それはないだろ」

僕は一夏に待ったをかけた。

「せっかく新聞部の人インタビューに来てくれるのに、頑張りますとかはひどすぎだろ」

「あ、正樹君は分かっているなあ、そうだね、確かにこれだけ言うのは物足りないよね」

僕の苦言に黛さんが乗ってきた。

「どうせ言うんなら……」

僕はそう言いながら立ち上がった。

『??.?』

全員が理解できない様な表情をする中、僕は一回転その場で回る。

「俺に触れると……やけどするぜ……とかギザったい物でも言ってみろ」

『……………』

なぜか周りが固まっていた。

一夏に関しては茫然としていたほどだ。

「キャアアアアアアー……！！！！！！」

「やけどしてもいいから触らせてください！！」

「そんなあなたに胸がときめく……！！！！！！」

「へ？へ！？」

突然の歓声に僕は驚いた。

「何をやってるんだ？正樹」

一夏の呆れたような言葉が、僕の胸を突き刺した。

「と、とりあえず織斑一夏君については適当にねつ造するとして、次は正樹君ね」

「あ、はい」

「これからの意気込みのようなものをどうぞ！」

一夏の時と同じようにボイスレコーダーを近づけてきた。

「クラス代表になったからには一夏にはさらに活躍してもらわなければいけません。一夏が輝けるように、僕も精一杯バックアップをするつもりです」

「うんうん、こういうのがいいよね。ああ、セシリアちゃんもコメント頂戴」

「私、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ありませんわね」

セシリアは姿勢をただした。

「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表、副代表を辞退したかというと、それはつまり……」

「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい」
「さ、最後まで聞きなさい！」

黛先輩は長くなりそうだったセシリアのコメントを遮った。

「いいよ、適当にねつ造しておくから。よし、織斑君に惚れたから
ってことにしよう」

「なっ、な、ななっ………!?!」

黛先輩はニヤニヤしながらそう言うと、セシリアは一気に赤面した。

「何を馬鹿なことを」

「え、そうかなー？」

「そ、そうですわ！何をもって馬鹿としているのかしら!?!」

一夏なりに助け舟を出したつもりだろうが、まったくもって真逆だ。

「はいはい、とりあえず三人とも並んでね。写真撮るから」

「へ?」

「注目の専用機持ちだからねー、はいはい並んで並んでー」

黛先輩は、一夏とセシリアの背を押してやや強引に並ばせた。
そして僕は一夏の横に立った。

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は?」

「え? えっと………2?」

なぜか複雑な計算式を出題した黛先輩に、一夏が答えるが、それは間違いだ。

「74・375だ」

「ピンポーン、大正解」

そこで僕はあることを考えた。

横にいる若干むすっとした筭の腕を引っ張って一夏の隣に立たせたのだ。

パシャン！

その瞬間シャッターが押され、なぜか全員が写りこんでいた。

そのことでセシリアが文句を言っていた。

ちなみに筭はやや嬉しそうな様子だった。

こうして、就任パーティーはお開きとなった。

第12話 就任パーティ（後書き）

次回はあの人が登場します。

第13話 密かな再会（前書き）

今回はあの人が登場します。

第13話 密かな再会

3人称Side

周囲が漆黒の闇に包まれた夜。

「ふうん、ここがそうなんだ……」

IS学園の正面ゲート前に、一人の若干怪しいさ満点の少女が立っていた。

その肩にかけられたポストンバックから、この学園の転入生である事が伺える。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ」

そう呟きながら少女は、上着のポケットから取り出されたぐしゃぐしゃの紙からは、彼女の大雑把な性格がよく出ていた。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからそれどこにあんのよ」

むなしくも少女は一人でツツコンでいた。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ」

そういいつつも、少女は歩くのをやめない。

それはよく言えば『実践主義』、悪く言えば『よく考えない』である。

（あーもー、面倒くさいな。空飛んで探そうかな……）

少女はそう考えたが、電話帳三冊分にも及ぶ学園の重要規約書を思い出してそれをやめた。

「だから……でだな……」

（ラッキー、道を教えてもらおう！）

少女はふと聞こえてきた声の元へと走って行った。

「だから、そのイメージが分かんないんだよ」

その声を聴いた瞬間、かけていた少女の足が止まった。

その声は少女が最も気にしていた人物の声だった。

（——あたしってわかるかな。わかるよね。一年ちょっと会わなかっただけだし）

少女は自分にそう言い聞かせるが、不安も募り、少女の考えを揺さぶる。

（——大丈夫、大丈夫！それにわからなかったら、あたしが美人になったからだし）

ナルシストもびっくりのポジティブに考えた。

「いち——」

と、その声の人物に声をかけようとした瞬間

「一夏、いつになったらイメージがつかめるのだ。先週からずっと同じところで詰まっているぞ」

と、見知らぬ少女が目の中の人物……一夏と楽しげに（あくまで少女視点）話している姿を見た。

（誰？、あの女の子。なんで親しそうなの？って言うか何で名前で呼んでんの？）

さっきまでの胸の高鳴りはうそのように消え、冷たい感情が覆い尽くした。

「おい、僕たちは見世物じゃないぞ」
「ッ?!」

そんな時、少女の背後から声を掛ける者がいた。

S i d e o u t

I S 破門されし者 第13話 「密かな再会」

「だからそこはくいて感じてだな」
「だからそのイメージが分からないんだよ」

パーティーの後、寮に戻りながら箒によるI Sの説明を聞いていたのだが、成果は今の通りだ。
まあ一夏のいう事も一理ある。
くいて感じと言うイメージは僕にでもわからない。

そもそも一夏は最初から間違えている。

セシリアの言葉を借りるのであれば、イメージは所詮イメージだ。自分の分かりやすいイメージでやった方が最適なのだ。

つまり他人のイメージを聞いたところでわかるわけがないのだ。

（まあ、そのことを未だに理解していない二人も二人だけど）

僕はそのことを言おうかなと思ったが、箒の事を考えるとそれには迷った。

箒だって嫌でやってるわけじゃない。

箒の気持ちを知っているからこそ、僕も黙っていようと思ったのだ。

その時

「いち―――――」

（っ！？）

突然、どこかで聞いたことのある人物の声が聞こえた。

それと同時に、冷たい殺気もだ。

僕はすぐにその人物の後ろの方に俊足で移動した。

「おい、僕たちは見世物じゃないぞ」

「ッ?!」

僕の若干呆れが入った声にその人物は驚いたように振り向いた。

「久しぶりだな。鈴」

「あ、あんた……正樹!？」

鈴と呼んだ目の前の少女の本名は凰　鈴音^{ふあんりん}だ。

昔僕たちと同じクラスで、一夏と僕の二人目の幼馴染だ。

「約2，3年ぶりと言った所か？元気にしてたか？」

「……………」

僕の問いかけに地面の方を見てなかなか答えない鈴。

「鈴、もっとシャキツとしたらどうだ？いつまでもうじうじされてたら振られた方も悲しくなるよ？」

「あ……………」

僕の言葉に、鈴はようやく顔を上げた。

彼女は僕のはじめて好きになった人だ。

実は別れ際に告白をしたのだが、見事に振られたのだ。

「振ったことで罪悪感を感じているのであれば、前も言ったと思うけど僕と今までと変わらずに友達でいるのと、うじうじしないで」

「……………そうね。あんたの言うとおりでわ。……………久しぶりね正樹」

ようやく本調子に戻った鈴に、僕はほっと一安心した。

「ところで、一夏といったあの女の子誰？」

「ん？ああ箒か。あいつは篠ノ之箒と言って鈴が転校する前にいた僕と一夏の幼馴染だ」

僕は説明しながらさっきの殺気の意味が分かった。
あれは単純に嫉妬だ。

「まあ、あれの事は後で会うとしてこの場所分かる？」

僕は鈴が差し出したぐしゃぐしゃの紙を見た。

「ん？ ああ、ここから近くだね。案内するよ」

「ありがとう」

僕はその後、鈴を本校舎前まで案内すると『あたしと会った事は一夏には内緒にしておいて！』とお願いされた。

そして本校舎に入って行った鈴を見届けて僕も寮へと戻るのであった。

第13話 密かな再会（後書き）

すみません、鈴と正樹の関係を勝手に作ってしまいました。

それでは、次回でお会いしましょう

第14話 転校生は、セカンド幼馴染（前書き）

本日2，3話目。

とりあえず本日はこれでおしまいです。

第14話 転校生は、セカンド幼馴染

それはかなり前の話。

鈴が中国に戻るため、一夏と一緒に僕たちは空港まで見送り行った時、僕は一夏にジュースを買ってくるように頼んだのだ。

「鈴、話があるんだ」

「話って何よ？」

僕の切り出した言葉に、いつも通りに聞いてくる鈴。

そんな鈴の様子に心の中で苦笑いしながら、自分の気持ちを言うことにした。

「僕、実は……」

一瞬逃げそうになった弱い自分に活を入れてやけくそ気味に言い切った。

「鈴の事が好きなんだ！」

「……………え？」

僕の勇気を振り絞った告白に、素で返された。

「だから、僕は鈴の事が好きなんだ」

「……………」

あまりのことに驚いてか、鈴が固まってしまった。

「あ、あのー、できれば返事が聞きたいんだけど」

「え、あ……うん」

悪いとは思いつながら僕は鈴に返事を催促した。
当然だが、鈴は顔を赤くしていた。

「その……ごめんなさい!!」

帰ってきた答えはNOだった。

「そっか……もしかして好きな他に好きな人がいたりするのかな？」

「……………（コクッ）」

僕の問いかけに鈴は無言で顔を赤くしながら、頷いた。
その人が誰の事なのかを、僕は直感で悟っていた。
おそらくは一夏だと。

「だったら、今度はその人が鈴を好きになるように協力するよ」
「え?!」

なんでそんな事を言ったのかは、今でも理解できなかった。

「だから、もし鈴が良ければだけどこれからも友達でいよう」

僕はそう言って鈴に手を差し出した。

「……ごめんね」

「謝る必要なんてないよ。逆にそんな風に悲しい顔をされたらこっちまで悲しくなるよ」

僕は手を差し出しながら謝ってきた鈴に言った。

「……………うん」

鈴はようやく僕の手を取ってくれた。
とそこへ

「おい！ジュース勝ってきたぞー！！！」

三本の缶ジュースを片手に一夏が戻ってきた。

「遅いぞ！一夏！！」

僕は一夏にそう言ってやった。
今思えば、これが僕の初恋だった。

IS〈破門されし者〉 第14話「転校生は、セカンド幼馴染」

「ッ！！？」

僕はがばっと起き上った。

そこはいつもの寮。

しかし隣にはルームメイトのセシリアの寝息がかすかに聞こえた。
そう、今日は単独で睡眠なのだ。

いつもは一夏の体内に戻らなければいけないのだが、大体はこうやって寝ていても問題はない。

ただしあまり単独で動く和一夏に負担がかかるため、たまには一夏

の中で寝たり1日過ごしたりしなければいけないのだ。
これが僕への制約だった。

閑話休題

「夢……か」

（なんで、あんな夢を）

僕はさっきまで見ていた懐かしい夢について考えていた。
理由はおそらく、鈴と再会したことだろう。

（何だか傷口を抉られたような気分だ）

誰も振られて嬉しいわけではない。

あの後誰もいない場所で、静かに涙を流した。

「はぁ……寝直そ」

僕は嫌な気分を吹き飛ばすように呟くと、もう一度眠りについた。

「織斑君に正樹君、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

翌日、席に着くなり女子生徒が話しかけてきた。
ちなみに、俺はクラスからは正樹君と呼ばれている。
どうでもいいことだけど

「転校生？今の時期に？」

「転校生……」

一夏は転入生のことに疑問を持ったのだが、僕は昨日すぐに鈴の事だと分かったので目線をそらせた。

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

と、僕達の会話を聞いていたのかセシリアが、腰に手を当てたいつものポーズを決めながら、話しに入ってきた。

「あははは！それは絶対じゃない」

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐほどのことでもあるまい」

なぜか窓側に座っていたはずの箒が近くに立っていた。

「どんなやつなんだろうな」

「む……気になるのか？」

一夏の呟きに箒が食らいついた。

「ん？ああ、少しは」

「ふん……今のお前に女子を気にしている余裕はあるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「そう！そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこの私、セシリア・オルコットが務めさせていただきますわ。なにせ、専用機を持っているのはまだクラスで私と一夏さん、正樹さんだけなのですから」

今明らかに”だけ”を強調したな。

「僕のISは修理中なんだけど」

「あー……」

セシリアは思い出したようにつぶやいた。

僕のISはどこぞの隕石野郎によって現在修理中だ。

「ま、まあ…やれるだけやってみるか」

と、一夏が言ったのだが周りの反応はかなり違った。

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきませんか！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

「織斑君が勝つとクラスみんなが幸せだよー」

「織斑君、がんばってねー」

「フリーパスのためにもね！」

セシリアと箒は一夏の弱気な発言に喝を入れ、クラスメイト達は一夏を応援すると言う複雑な図式が成り立っていた。

これはどうでもいいのだが、優勝者にはデザートのフリーパスが与えられるらしい。

「今のところ専用機を持っているクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

一夏は珍しく周りの空気を読んで『おう』と返事をした。

「————その情報、古いよ」

と、その時教室の入り口から鈴の声がした。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

腰に手を当てるといふセシリアのようなポーズをとっていた。

「鈴………？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、凰 鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

一夏に向けて思いっきり指を指した。
それと同時に周りがざわめきだった。

「何格好付けてるんだ？すげえ似合わないぞ」

「んなっ……！？なんてこと言うのよ、アンタは！」

本人は格好付けていたつもりだろうが、まったく格好ついてない。
そもそも似合わない。

そんな時だった。

「おい」

鈴に声をかける鬼教官がいた。

「なによ!？」

パシン!!

怒り任せに返事をするが、その鬼教官改め織斑先生の出席簿が火を噴いた。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません……」

鈴は織斑先生に怯えながらドアからどく。

そういえば鈴は昔から織斑先生が苦手だったっけ。
なぜかは知らないけど

「またあとで来るからね!逃げないでよ、一夏!」

「さっさと戻れ」

「は、はいっ!」

まるで悪役のようなセリフに、織斑先生の睨み十一言で逃げるように二組の教室に戻っていった。

「っていうかアイツ、IS操縦者だったのか。初めて知った」

一夏がそう呟くとクラスメイト達が一夏の席に集まった。

「…………一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったな？」

「い、一夏さん！？あの子とはどういう関係で——」

こうして一夏はクラスメイト達の質問攻めにあうのだが、果たして彼女達はこの教室に鬼教官がいるのを分かっているのだろうか？

バシン！バシン！バシン！バシン！

案の定立っていた女子たちは全員、織斑先生の出席簿攻撃の餌食となっていた。

「席に着け、馬鹿ども」

『は、はいっ！！』

「全員着いたな……よし、それでは始めるぞ」

ちなみに、この後の授業でセシリアと箒は織斑先生の出席簿攻撃を、何回も受ける羽目になった。

第14話 転校生は、セカンド幼馴染（後書き）

次回は一夏がIS学園に入るきっかけになった話が中心です。

第15話 始まり（前書き）

本日の投稿です。

主な話は受験時の回想です。

第15話 始まり

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

「なんでだよ……」

昼休みになるや否や二人が文句を言ってきた。

この二人、午前中だけで山田先生に注意を五回、織斑先生には三回も叩かれていた。

まあ、理由は分かってはいるが……

「まあ、話なら飯食いながら聞くからとりあえず学食行こうぜ」

「む……。ま、まあお前がそう言うのなら、良いだろう」

「そ、そうですわね。行って差し上げないこともなくってよ」

「はいはい」

こうして僕たちは学食へと向かった。

IS 破門されし者

第15話 「始まり」

券売機で食券を買うと、それを注文すべくカウンターの方へと向かった。

「待ってたわよ一夏、正樹！」

突然一夏たちの前に立ちふさがったのは、鈴だった。
ツインテールの髪形と性格は昔から変わってないな。

と言うより……

「そこに立っていると通行の邪魔だ」

僕は一言注意した。

「わ、分かってるわよ！」

鈴はそう言い返すと、トレイを持って並んだ。
ちなみに僕は一夏の後ろだ。

「びっくりしたぜ、お前が二組の転校生だとはな。連絡くれればいいのに」

「そんなことしたら劇的な再会が台無しになっちゃうでしょ？」

「なあ、お前まだ千冬姉の事が苦手なのか？」

「そのちよつと……得意じゃないだけよ」

二人は一年ぶりの再会と相まって、楽しげに話していた。

「はいお待ちどう」

「相変わらずラーメン好きだよな。丸一年になるのか……元気になってたか？」

「元気にしてたわよ。あんたこそ怪我病気しなさいよ！」

一体何の要望だよ。

二人はトレイを持って行ったが。
今の僕にはどうでもいいことだ。
なぜなら……

「何なのだ、あいつは。一夏とどういう関係だ」

「何なんですの、あの方は！一夏さんと楽しそうにお話して」

と言う感じにぶつぶつと恨み言を呟いていた。

しかも人の背後で。

僕としては怖くて、後ろを見たくない。

そんなこんなで、料理を受け取ると、そそくさと逃げるように一夏の所へと向かったのであった。

「で、いつ代表候補生になったんだよ？」

鈴がラーメンを食べ終えたところを見計らって一夏が切り出した。

ちなみに一夏は日替わり定食、僕はチャーハンを食べていた。

これもまた関係ないが、未だに殺気のような嫉妬のような視線を感じていた。

（お願いだから、一夏の女難をこっちにまで持ってくるなよ）

僕は心の中でそう思うしかなかった。

「あんたこそ、ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

「俺だって、まさかこんな所に入るとは思わなかったからな」

一夏が感慨深そうに言うが、僕だってまさかこうなるとは思ってもしなかった。

「入試の時にISを動かしちゃったんだっけ？なんでそんなことに

なっちゃったのよ？」

「それはな鈴、涙なくして語れない理由があるんだよ」

そして僕はあの日の事を思い返した。

それは今から二か月前

「えっと、ここで合ってるな」

『確認したらとっとと中に入れ。ただでさえ時間がないんだから』

「はいはい」

僕は一夏に先へ行くように急かした。

こうして僕たちは試験場へと入って言ったのであった。

それから数分後

「どこだ？」

『僕に聞かれてもわからない』

ものの見事に迷子になっていた。

というより、ここは何でこうも複雑な構造をしているんだ？

「一夏、本当にここが藍越学園あいえつの試験場なんだよな？」

「うわ！？いきなり出てくるなよ！人に見られたらどうする気だ？！」

僕はじれったくなり、具現化して一夏の横に立った。

当時僕は、いつもは一夏と肉体共有をしていたのだ。

現在のように常に具現化することはまずなかった。

「そこは心配するな、そんなへまはしない。で、どうなんだ？」

「だから、そうなんだって。この案内状にそう書いて……………」

一夏に答えを迫ると、一夏は案内状のようなものを広げて目を通した瞬間に、固まった。

「一夏？」

「ここI S学園の試験場だったみたいだ」

一夏の口からとんでもない事実が告げられた。

そして手渡された案内状を見る。

『注意…第2多目的ホールはI S学園の試験場です。名称が一緒なのでお間違えにならないようご注意ください』

最後の方にそう注意書きが記されていた。

そういえばここは第2多目的ホールだったはず、つまり本当の場所

は第1と言う事か。

「あ、あはは」

「あははは！これは傑作だね」

僕達はただ笑う事しかできなかった。

「って、ちゃんと場所は確かめんか！馬鹿者！！」

パシン！

「いっつう！！」

僕は片手にある案内状（ただの紙）で一夏を叩いた。

「早くここを出るぞ！」

「なんで紙なのにこんなに痛いんだよ！！」

一夏の問いかけを無視して、僕はスタスタと出口に向かって歩く。

「早く歩く！試験開始まで時間がないぞ！！」

「だから、待って！！」

慌てて駆け寄ってくる一夏をしり目に、僕たちは出口へと向かう。

「出口はどこだ！！」

「……………」

そして案の定僕たちは迷いました。

「ここは兄としてびしっとしないとな！」

「おう！？」

僕は一夏の気合の入れように思わず期待した。
やっぱり一夏は兄貴だ。

「適当にドアでも開けてればあたりがあるだろ」
「……………」

思わず期待した僕を殴り飛ばしたくなった。
しかしそれ以外にこの構造を知らない僕には策がないため、その
案で行くしかなかった。
適当にドアを開けること数十分。

「これって……」
「IS？」

僕達の前にあったのはISだった。
まるで鎧が忠誠を誓うように膝間ずいているようだった。
すると、一夏がISに向かって歩いていく。

「一夏、触ったらダメだって」
「大丈夫だって、どうせ男には動かせないんだし」

確かにそうだ。

ISは女性にしか動かせない。

それが世界の常識だった。

僕はどうせ動かないからと思い、一夏の行動を黙認することにした。

そして一夏の手がISに触れた時だった。

キーン！

「「え？」」

なんとISが一夏が触れたことにより反応したのだ。

「動く……」

ガタン！

「き、君！こんなところに入っちゃだめよ！」

そんな時、関係者と思われる女性が入って来て注意をするが、目の前に起きている状況に戸惑いの表情を浮かべた。

「え？」

「まさか反応してる？」

「そんな馬鹿な。ISを男が動かせるだなんて」

女性たちが何やら慌てている。

その後女性職員と協力して、一夏をISから離した。

そして事情を説明して僕が一夏の弟だと分かると、

「ま、まさか君も動かせるなんてことはないわよね？」

「ま、まさかー」

と言ってきたので僕は笑い飛ばした。

一夏の弟だからって、そう簡単に動かせてたまるか。

「それじゃ、手を置いてくれる？」

「……はい」

そして女性職員に触るように言われた。

僕は一夏と同じようにISに手を添えた。

「ッ!!」

その瞬間、頭の中に色々な情報が流れ込んできた。

ISの名前や特徴、武装などのデータが頭の中に流れ込み、それがすべて理解できる。

どうやら僕もISを動かせるようだ。

これが、僕たちのIS学園に入るきっかけだった。

第15話 始まり（後書き）

まだまだ続きます。

第16話 昼食時の受難（前書き）

17..30現在で、『PV65，917アクセス、ユニーク9，431人』になっていました。

このような駄作を見てくださり本当にありがとうございます。いろいろな問題だらけですが、これからもよろしく願います。

では、第16話をどうぞ

第16話 昼食時の受難

「で、その後色々あってこの学園に入れられたってことだ」

「そう、僕の受難の日々の始まりさ」

なぜ受難かと言うと、世界で初、男がISを操縦できると言うニュースが報じられた次の日に一気に新聞記者やら研究施設の奴らやらが押しかけてきたからだ。

取材の方は良いとして、研究者らの『調べさせてくれ』という申し出に僕は塩を振って追い払った。

冗談じゃない、モルモットになってたまるか。

「ふーん、変な話ね」

話し終わると、話を聞いた鈴が感想を口にした。

その時、後ろで聞き耳を立てていた二人が動き出した。

IS〈破門されし者〉

第16話 「昼食時の受難」

ダン!!

二人がテーブルを両手でたたいた。

「一夏、正樹。そろそろ説明してほしいのだが」

「そうですわ! 一夏さん、まさかこの方と、つつつ付き合っているの!？」

箒とセシリアがものすごい剣幕で聞いてくる。

「べ、べべ別に私は……」

「そうだぞ。ただの幼馴染だ」

「むう……」

（はぁ）

一夏の言葉に鈴がむすつとした表情で睨みつけた。

「ん？どうかしたか？」

「何でもないわよ！」

こいつは完全に朴念仁だ。

「幼馴染……？」

「そうか。ちょうどお前と入れ違いで転校してきたもんな。篠ノ之箒、前に話したろ？箒はファースト幼馴染で、お前がセカンド幼馴染ってとこだ」

「ファースト……」

箒は一夏の”ファースト”幼馴染と言う言葉に嬉しそうな表情を浮かべるが、普通はファーストだのセカンドだの言わない。水を差すようになるから指摘はしないけど。

「……初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

鈴と箒は笑顔で言うが、なんでだろう？

僕には今にでも戦いが始まりそうな、不穏な雰囲気を感じるんだけ

ど。

「んんッ！わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。私はセシリア・オルコット。一夏さんとは先日クラス代表の座をかけて――」

「あんた、一組の代表になったんだって？」

セシリアの話を無視して鈴が一夏と話していた。
ある意味こいつが一番大物かもしれない。

「ああ、成り行きでな」

「よかったら、あたしが練習見てあげようか？ISの操縦を」

「ああ。そりゃ助かる」

ダン！！

「って、ちょっと、聞いていらっしゃるの！」

ようやく自分が無視されていることに気付いたセシリアが両手をテーブルに叩き付けた。

「ごめん、あたし興味ないから」

そしてバツサリとセシリアの言葉を切り捨てた。

「言ってくれますわね？」

「一夏に教えるのは私の役目だ」

テーブルをたたいて箒が反論する。

「あなたは二組でしょ？敵の施しは受けませんわ」
「あたしは一夏と話してんの。関係ない人は引っ込んでよ」
「……………」

鈴の一言で周囲の温度がさらに下がった。
これ以上放置していたらこっちにもとばかりが来そうだ。

「はいはい、三人ともそこまで」

「で、ですが正樹さん！」

「正樹から何か言ってやってくれ！」

僕の介入にセシリアと箒が詰め寄ってきた。

「い、いやその…な、ここは公平に当番制に―却下!!―あう……………」

思いつきり僕の明暗は取り下げられた。

一夏の女難に巻き込まれた形になってしまった。

「と、ところで親父さん、元気にしてるか？」

「え、あ、うん。元気だと……………思う」

一夏の言葉に鈴が答えたことで、僕への追及は終わった。

（あれ？これって僕が何かしなくても解決していた？）

結局巻き込まれたのではなく、自滅しただけだった。

しかし、鈴の表情が曇ったのがとても気になった。

そんな時、予鈴が鳴った。

「じゃ、一夏放課後に。そっちの練習が終わった頃に顔を出すから開けておいてよね」

「ああ」

鈴はトレイを持ってそのまま僕たちの前から去って行った。

ちなみにこの後に、恐怖の特訓が待っていることを一夏は知らなかった。

第16話 昼食時の受難（後書き）

もしかしたらもう1話投稿できるかもしれません。
ただ未定ですので、本日中に投稿できていない場合は執筆が終了していると思われますので、ご了承ください。

第17話 恐怖の特訓（前書き）

本日三話目です。

今回は鈴がメインです。

第17話 恐怖の特訓

第三アリーナ。

「篠ノ之さん、どういう事ですか？これは」

夕暮れでオレンジ色に染まりゆくそこにセシリアの声が響いた。
なぜかと言えば……

「訓練機の使用許可が下りたのだ。今日からはこれで特訓に付き合う」

箒はそう言いながらアームを広げたり閉じたりして感触を確かめていた。

「打鉄……日本の量産型ですわね。まさかこんなにあっさりと使用許可が下りるなんて」

やがて打鉄の基本武装でもある刀型近接ブレードを装備すると一夏に向けて構えた。

「では一夏。始めるとしよう」

「お、おう」

一夏も箒にならって雪片式型を構える。

「ちょっとお待ちなさい！一夏さんの訓練に付き合うのは、この私ですてよ！！」

セシリアは待ったをかけながらISを起動させる。

「さあ一夏。練習開始だ」

「お相手しますわ。一夏さん」

二人ともかなりやる気だ。
しかも同時に。

「ま、正樹、助けてくれ」

一夏がこっちに助けを求めてくるが、今割り込んだら絶対に痛い目を見るのは確実だ。
なので僕は……。

「箒くセシリアく、ファイトく」

「うむ（もちろんですわ）！」

二人にエールを送ることにした。

「この裏切り者く!!!」

周囲に一夏の悲鳴が響き渡った。

（さて、こっちの練習も始めますか）

僕は隣で繰り広げられる練習を見ながら、素手でIS用の刀型近接ブレードを持った。

やり方は簡単だ。

これをISなしで振るだけだ。

「ふっ……ええ！」

IS用の武器のため当然だがとても重い。
しかし、こういった練習の積み重ねがのちに役立つのだ。
そう考えて、僕はただひたすらに刀を振った。

IS（破門されし者）
第17話「恐怖の特訓」

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……はあ」

あたりが暗くなって横を見ると、そこにはISを解除したセシリアたちと地面に寝そべっている一夏の姿があった。

「今日はこのあたりで終わるとしましょう」

「お、おう」

「ふん、鍛えてないからそうなるのだ」

いや、二対一はさすがに厳しいから。

「二対一だったらこうなるって」

「二夏さん、正樹さん。また後程」

「じゃあね」

セシリアは去って行った。

「二夏、何をしている？我々も部屋に戻るぞ」

「先に帰っててくれ。俺はまだ動けない」

「しょうがない奴だな。シャワーは先に使わせてもらおうぞ」

「ああ」

そして箒もアリーナを後にした。

「僕は付き合どうぞ。原因の一人だし」

「サンキュ」

僕は一夏の横で夜空を見ながら一夏が動けるようになるまで待つことにした。

箒Side

私はシャワーを浴びながら今日の事を振り返った。

（今日は一夏と特訓が出来た。これで二人つきりだったらよかったのだが）

「っ！いかんいかん！！」

私はネガティブな思考を振り払うように頭を横に振った。

（次はセシリアを何とかして二人つきりで練習をしよう！）

私は心の中でそう決意するとシャワールームから出た。

「一夏はまだ戻らんか。一体どこで道草を食っているのだ？」

S i d e o u t

「これからクラス対抗戦までずっとこんな調子かよ?」

更衣室で一息つくと、一夏はぼやく様につぶやいた。

「お疲れ一夏、正樹」

と、そんな時一夏と僕に鈴が声をかけてきた。

「飲み物はスポーツドリンクでいいよね? はい」

そういうと一夏にタオルを手渡した。

「何だお前、ずっと待っていてくれたのか?」

「えへへ……まあね」

鈴は嬉しそうに笑うと、一夏の横に腰かけた。

「……………それじゃ、僕は先に失礼するよ」

「おう、お疲れ正樹!」

「そっちも」

僕は二人に気を使ってその場を離れた。

（うまくやれよ、鈴）

ついでに心の中でエールも送った。

鈴音Side

「……………」

あたしは正樹が去って行った方を見た。

（あれってあたしに気を使ってくれたのよね？）

あたしは心の中で正樹にお礼を言った。

「やっと二人つきりだね」

「え？あ、そうだな」

勇気を振り絞ったあたしの言葉に一夏は普通に返した。

「……………」

（何やってんのよあたし！ここが頑張り時よ！！）

「一夏さ……やっぱあたしがいなくて寂しかった？」

あたしは気合を入れ直して一夏に聞いた。

「まあ、遊び相手が減るのは大なり小なり寂しいだろ」

「そうじゃなくってさ……久しぶりに会った幼馴染なんだから他にいう事があるでしょ？」

あたしは心の中でため息をつきながら一夏に言った。

「そうだ、大事なことを忘れてた！」

「ッ！！」

あたしは一夏の言葉に胸が高鳴った。

ようやくあたしの言いたいことが通じたようね。

「中学の時の友達に連絡したか？きつとみんな大喜びするぞ」

「じゃなくて！例えばさ——」

一夏に期待したあたしが馬鹿だった。

「あ、悪い。そろそろ体冷えてきたから部屋戻るわ。箒もシャワー使い終わった頃だし」

「シャワー？」

今あたしは聞き捨てならない言葉を聞いたような気がした。

「箒って、さっきの子よね？一体一夏とどういう関係なの？」

あたしは思わず身を乗り出して一夏に来た。

「どう？って幼馴染だよ、ファースト幼馴染。で、お前がセカンド幼馴染」

「幼馴染とシャワーとどういう関係があるのよ!!」

あたしの頭はさらに混乱して叫んでしまった。

「俺、今箒と同じ部屋なんだよ」

「はぁ!？」

一夏の言葉に思わず呆然としてしまった。

「部屋を用意できなかったんだとよ、だから——」

「そ、それってあの子と寝食を共にしているということ?」

やっと理解できた。

あの箒って子がどうしてああも余裕そうな表情だったのか。

一夏と寝食を共にするというパーセンテージを持っていたからなんだ!

「まあな。でも箒で助かったよ。これがもし知らない人だったら緊張して寝不足になってたよ」

「……………」

(これはまずいわ。手を打たなければこのまま差を付けられる。でもどうすれば…………)

打開策を考えていたあたしは、あることを思いついた。

「ん? どうした?」

「……幼馴染だったらいわけね」

「え?」

「だから、幼馴染だったらいわけね!」

あたしはすぐに一夏に背を向けて、寮に戻った。
そして自分の荷物の入ったボストンバックを持って、一夏と箒って
この部屋『1025』へと向かった。

「——と言うわけだから、部屋変わって」

あたしが思いついたのは、箒って子に部屋を入れ替わってもらった
だった。

「ふざけるな！なぜ私が」

「いや、篠ノ之さんも男と同室っていやでしょ？」

反論する篠ノ之さんにあたしは笑顔で言った。

「べ、別に嫌だとは言っていない。それにこれは私と一夏の問題だ」

「大丈夫、私も幼馴染だから。ね？」

「俺に振るなよ」

あたしが一夏に答えを求めると、困った風に返した。

「とにかく部屋は変わらない。自分の部屋に戻れ！」

「ところでさ一夏。約束覚えてる？」

あたしは篠ノ之さんから視線を外して一夏に聞いた。

「約束？」

「そう、小学校の時に――」

「無視するな！こうなったら……」

篠ノ之さんが突然横にある竹刀を手にした。

「あ、馬鹿！」

「はあ！！」

あたしは危険を察して右腕にISを部分展開して、竹刀を受け止めた。

「部分展開……早い」

「今の生身の人間なら本気で危ないよ」

「あ……」

篠ノ之さんが竹刀を下したので、あたしもISを解除する。

「ま、いいけどね」

「……そ、そうだ。約束がどうか言ってたな。何の話だ？」

雰囲気を感じて一夏が突然話し始めた。

「あ、うん。あのさ、えっと……覚えてる……よね？」

「えっと……あれか？鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を……」

「そ、そう、それ！」

あたしは一夏が約束を覚えていてくれたと思って嬉しさがこみ上げてきた。

「おごってくれるってやつか？」

「はい？」

あたしは一夏の言葉に、思わず聞き返した。

「だから、俺に毎日飯をご馳走してくれるって約束だろ？ いやーま
s 回との二人暮らしのみとしてはありがたーだぁ！？」

あたしは一夏の頬をひっぱたいた。

「……………」

あたしは情けなかった。

誰に？

一夏に？

それともあたし自身？

おそらく両方だと思う。

何度も何度も期待して一人で舞い上がって勝手にがっかりして。

（これじゃ、正樹に悪いじゃない）

せっかく正樹が気を使って話をするチャンスくれたのに。

それがあたしをさらに情けなくさせていた。

でも、女の子との約束を普通忘れる？

「最っっっ低！ 女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の
風上にも置けない奴！ 犬に噛まれて死ね！」

あたしは最後にそう啖呵を切って部屋を飛び出した。

（一夏の馬鹿！一夏の馬鹿！一夏の馬鹿！！）

あたしはただがむしゃらに走った。

ドン！！

「きゃ！？」

「うわ！？」

曲がり角で誰かにぶつかった。

あたしはすぐに謝ろうと顔を上げると、その人物は今二番目に顔を合わせたくない人物だった。

「つて、鈴！？どうしたんだよ？！涙なんか流して！」

「な、何でもない！！！！」

あたしは正樹をはねのけて走った。

でも————

「お、おい……ああ、もう！！石化の壁よ、動きを封じたまえ。石化の槍！！」

「きゃ！？」

あたしはまるで誰かが足を抑えているように足が動かなくなった。

（ああ、そういうばあいつそういう力を使えたんだっけ）

あたしはゆっくりとこっちに向かって来る正樹を見ながら、そんな事を思い出していた。

S
i
d
e

o
u
t

第18話 男として（前書き）

今回はちょっと短めで賛否両論の内容になりそうです。

第18話 男として

今僕は、一夏たちの部屋に向かっている。

「♪♪」

僕は今とても機嫌が良かった。

理由は右手にあるケーキが入った箱だ。

さっき偶然にも織斑先生にあったら、多く買い過ぎたということでおすそ分けしてもらったのだ。

甘いものがとても好きで、特にチーズケーキは好物だ。

ちようど3つあったので一夏と箒と一緒に話でもしながら食べようと思ったのだ。

そして曲がり角を曲がった時だった。

ドン！！

「きゃ！？」

「うわ！？」

曲がり角で誰かにぶつかった。

僕はすぐに相手の人に謝ろうとぶつかった相手は鈴だった。

「って、鈴！？どうしたんだよ?! 涙なんか流して！」

「な、何でもない!!!!」

鈴はそう叫ぶと僕を押しつけて逃げて行った。

（なんで泣いてんだよ!?!）

「お、おい……ああ、もう！！石化の壁よ、動きを封じたまえ。石化の槍！！」

僕は何が何だか分からなくなり、鈴に向けて能力を使うことにした。

「きゃ！？」

僕の力が効いたのか、動けなくなったリンにゆっくりと近づいた。

「逃げなくてもいいだろ？」

「……………分かったわよ。逃げないから、解いて」

僕は鈴の言葉を聞いて、先ほどかけた力を解除する。

「で、なんで泣いてんだ？」

「……………う……………」

僕の言葉に、鈴はさらに涙ぐんだ。

「うわああああああ！！！！」

そして場所も忘れて僕に引っ付いて泣き始めた。

「……………よし、よし」

僕は何が何だかわからないが、僕は鈴が落ち着くのを待った。

「落ち着いたか？」

「……うん」

数分後、ようやく鈴が落ち着いたので、僕は何かあったのかを聞くことにした。

「それで何があったんだ？」

「うん……実は——」

そして鈴は泣いていた理由を話してくれた。

「なるほど、一夏のやろうが」

どうも小学生の時にした約束を覚えていなかったらしいのだ。

「約束って確か、『料理がうまくなったら毎日、鈴の酢豚を食べさせてくれる』みたいなものだったよな？」

「うん、微妙に違うけどそんな感じ。って、なんであんたが知ってるのよ!!」

そこを聞くの!?

「いや家に帰ってきたら一夏が『鈴が料理がうまくなったら酢豚をご馳走してくれる』って言ってたからさ」

「はあ……」

ため息をつく鈴がとても可愛そうだった。

「さて、あのバカをどうしてくれようか」
「……………ねえ」

一夏をどうしてやろうかと考えていると鈴が突然声をかけた。

「何だ？」

「なんでそこまであたしと一夏が付き合えるように応援をするの？
あたしはあんたを振ったのよ？」

「……………」

鈴の疑問も尤もだ。

振られた人をここまで応援するのは珍しい。

それは僕も自覚している。

「だからこそだよ。だからこそ、鈴には幸せになってもらいたい。
そのためであればある程度の事は手助けくらいするさ」

「……………」

これ前にも言ったような気がするんだが…………

「さ、これ持って部屋に戻りなさいな」

「え？でも…………」

「いいからいいから！」

僕は手に持っていたケーキの箱を鈴に押し付けるように渡した。

鈴は渋々と言った感じで歩き出す。

ふと、足を止めるところに振り向いた。

「ありがとね、正樹」

そういうと今度こそ鈴は去って行った。

「……………さ、行くか」

そして僕は一夏の部屋へと向かった。

ドカン！！

「な、何だぁ！？」

「一夏はいるか！！！！」

僕は、部屋のドアをけり破った。

すると驚きながら一夏が椅子から立ち上がった。

「ふっ！！」

「グハ！？」

「一夏！？」

僕は何も言わずに一夏の顔を殴り飛ばした。

「女子との約束を忘れるとは、男の風上にも置けないな！」

僕はそれだけ言うのと部屋を後にした。

その日は寝ることが出来なかった。

第18話 男として（後書き）

一応ヒロインは楯無先輩です。

今はなんだか鈴がヒロインになっていますが後々挽回します（たぶん）

これで連続更新は終了です。

次の更新まで気長に待つて頂ければ幸いです。

第19話 災難（前書き）

お待たせしました。

最新話になります。

本日は、とりあえずこれだけを。

第19話 災難

一夏Side

困った。

五月に入り五月病が出る時期だと言うが、俺のこの悩みは五月病ではないと信じたい。

何が困ったかと言えば、最初は俺のセカンド幼馴染の鈴だ。

あの日の次の日に発表された『クラス対抗戦』の日程表には、俺の名前の横に、対戦者である鈴の名前が書かれていた。

それもあるが、その日から鈴は明らかに『怒ってます』オーラを全開にしていた。

そして俺の弟君と言えば……………。

「……………」

「……………」

未だに口もきいていなかった。

いや、俺も悪いとは思っているのだがなぜか理不尽に思えたのだ。

「お二人とも、喧嘩でもされましたの？」

「いくら俺達でもけんかぐらいはするさ」

「喧嘩したらいけないわけ？」

セシリアの驚くような声に、俺は苦笑いを浮かべながら、正樹は若干威圧しながら答えた。

本当に、どうすんだよ

「兄貴、ちょっと話がある」

「お、おう」

昼休み、僕は一夏にそう告げると、一夏を連れて廊下に出た。

「……………この前は悪かった」

「へ?!」

僕の歩きながらでの唐突な謝罪に、一夏はすっとんきよな声を上げた。

「だからこの間殴ったことだよ。いくらなんでも殴るのはやりすぎたなと反省してる。本当に悪かった」

「あ、いや……俺も悪かったと思ってるよ。理由は分からないけど、すまない」

一夏の言葉に、俺は思わずため息をついた。

こいつは本当に鈍感だ。

「ところで、俺をどこに連れて行くつもりだ？」

「行けばわかる」

一夏の問いかけに、僕はそう答えさらに足を進める。

一夏を連れて屋上に出ると、そこには仁王立ちの鈴がいた。

「待ってたわよ、一夏！」

「って、鈴!？」

一夏が驚いた様子でこっちを見る。

「僕が呼んだんだ。このままではいけないと思っているのは、僕も同じだったからね」

「と言うことで、一夏反省した？」

僕の言葉をうまく繋げた鈴が一步前に出た。

「へ?なにが？」

「だ、か、ら! あたしを怒らせて申し訳なかったなーとか、仲直りしたいなーとかあるでしょうが!!」

鈴の問いかけにごく平然と答えた一夏に鈴が若干声を大きくした。

「いや、そう言われても……鈴が避けてたんじゃねえか」

「あんたねえ……じゃあ何?女の子が放っておいてって言ったら

放っておくわけ!？」

一夏の受け答えに、呆れた様子の鈴が一夏に問いかけた。
まさかとは思うが、頷くわけが——

「おう」

本当に頷いたよ。

鈴も盛大なため息をついているし。

「何か変か？」

「変かって……ああ、もう! 謝りなさいよ!」

とうとう限界に到達した鈴が一夏に向かって叫ぶ。

「だからなんでだよ! 約束覚えてただろうが!!」

「約束の意味が違うのよ!! 意味が!!」

もうこうなってしまうばただの水掛け論だ。

(お願いだから、僕を巻き込まないでくれよ)

これは経験論だが、一夏の女難は必ず僕にも降りかかる。
だからこそ心の中でそう節に祈っていた。

「じゃあこうしましょう! 来週のクラス対抗戦^{リーグマッチ}、そこで勝った方は負けた方に何でも一ついう事を聞かせられるってことで、いいわね!？」

「おう、いいぜ! 俺が勝ったら説明してもらおうからな!」

どうやら話はまとまったようで、来週の対抗戦の勝敗によって決着をつけるみたいだ。

「せ、説明は、その……」

「何だ？ やめるなら、やめてもいいぞ？」

鈴が言い渋っているのを、見た一夏が鈴を挑発した。

「誰が止めるのよ！ あんたこそ、あたしに謝る練習でもしておきなさいよ！！」

「なんでだよ、馬鹿！」

何だか、どんどんと雲行きが怪しくなって言ってるような気が……。

「馬鹿とは何よ！ バカとは！！ この朴念仁！ 間抜け！ アホ

！ 馬鹿はあんたよ！！」

「うるさい、貧乳！！」

（げっ！？）

僕は一夏の大暴言に、何が起こるかを予想して駆け出した。

「離して正樹！！ あの馬鹿に痛い目を見せてやる！！！！」

「だあ！？ 落ち着いて！！ いくら一夏でもアーマーで殴ったら死んじゃうよ！？」

どうやら正解だったらしく、怒りでアーマーを展開して殴りに行くこととする鈴の両手を掴んで引きとめた。

「お、おい!! 謝れ! 今すぐ謝れ!! そろそろ限界だ」
「わ、悪い! 今のは俺が悪かった」

僕の叫びに一夏が慌てて鈴に謝る。

「今の『は』? 今の『も』よ!! いつだってあんたが悪いのよ!!」

「そうだ!! 女性に対して貧乳とか、まな板とか、ぺちゃぱいとか小さいと言ったらダメだろ!! たとえそれが真実だとしても、それを言わないでいてあげるのが男と言う物だろ!!」

今僕はいいいことを言ったと自画自賛したい。

その証拠に、周りは静かになって僕の言葉に感心して

「ほう? 正樹も、どうやら死にたいようね?」

「え? あ、あのお。なんでそんなににっこりと笑っていらっしゃるのですか!? と言うよりも怖いですよ!!?」

僕は自分に迫る殺気に背後へと後ずさる。一夏に助けを求めようとしたが、首を横に振って端の方に避難していた

「天誅!!!!!!」

「ノオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

その後は……あまり思い出したくない。

「なあ、正樹。あれはよくないぜ」

「い、一夏に、言われ、ると……は」

一夏の注意を聞きながら、俺は気を失った。

本日の教訓。

女性のコンプレックスには触れるべからず（忠告でも）

第19話 災難（後書き）

久しぶりに投稿したのが、不完全なコメディと言うのもなんですが
……

第20話 クラス対抗戦（前書き）

いよいよやってきましたクラス対抗戦です。

第20話 クラス対抗戦

とうとうやってきたクラス対抗戦。

僕達は、ピットの中にいた。

『あちらのISは【甲龍^{シェンロン}】、織斑君と同じ近接格闘型です』

一夏の前に、鈴のISの情報が表示される。

「私の時とは勝手が違いますわよ」

「堅くなるな。練習の時と同じようにすれば勝てる」

セシリアと箒の言葉に、一夏は前方……鈴のISを見る。

鈴のISで特筆すべきは肩の部分についている装甲だ。

それがあのISが攻撃的であることを示していた。

「あれで殴られたら、すげえ痛そうだな」

「まあ、せいぜい抗ってみるんだな」

「おう！」

俺の言葉に、一夏は元氣よく答える。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

すると、アナウンスが聞こえ一夏はピットから出て行った。

『今謝るなら痛めつけるレベルを少し下げてもいいわよ』

『いらねえよ。全力で来い』

鈴の提案に、一夏が男らしく答えた。

『一応言っておくけど、絶対防御も完ぺきではないのよ。それを突破する攻撃力があれば殺さない程度にいたぶることも可能なの』
『分かってる』

何事にも”絶対”はない。

それが”あの人”から教えてもらった言葉だった。

『それでは両者、試合を開始してください』

ピットで僕達は試合開始のアナウンスを聞いていた。

IS〈破門されし者〉 第20話「クラス対抗戦」

鈴の武装”青龍刀”と雪片式型とがぶつかり合う。

しかし、明らかに鈴の方が有利だ。

一夏にはバリア無効化攻撃と言う諸刃の剣の攻撃はあるが、鈴の攻撃手法はいまだ未知数だ。

相手の情報がないことの恐ろしさは、尋常なものではない。
だからこそ、情報と言うのはかなり重要なのだ。

「ふうん、初撃を防ぐなんてやるじゃない。でも！」

鈴はそう余裕な様子で告げると、その手にもう一本の刀を出した。

完全な二刀流だ。

一本の剣を持つ一夏にはかなり厳しいものだ。

「……一夏」

「ああもう、何をやってらっしゃいますの！？ 私の教えて差し上げたクロスグリッドターンをお使いなさい！！」

心配そうにモニターを見る箒とは打って変わって、セシリアはモニターに向かって叫んでいた。

山田先生も若干引いていた。

一夏Side

（このままじゃ、消耗戦になるだけだ。一度距離を取って）

俺は鈴から繰り出される攻撃を紙一重で交わしながら、そう考え、距離を取ろうとした。

「甘い！」

「ッ！！？」

肩のアーマーの中心から光出したと思った瞬間、俺は何かに殴り飛ばされたような感覚が襲った。

「ふふ……今のはジャブだからね」

鈴がそう告げた瞬間、再び方のアーマーの中心部分が光はじめ、気づいた時には、俺は弾き飛ばされていた。

S i d e o u t

「何だ！？今の攻撃は！」

箒が声を荒げる。

鈴の方のアーマーから”弾丸のような光”が一夏に命中した瞬間、一夏が吹っ飛ばされた。

「衝撃砲ですね。空間自体に圧力をかけて砲弾を放つ武器です」

「私のブルーティアーズと同じ、第3世代の武器ですわね」

山田先生の説明に、セシリアが呟いた。

「あの衝撃砲は、砲身や砲弾も見えないのが特徴のようです。しかもあの衝撃砲は砲身の射隔がほぼ制限なしで撃てるようです」

(と言うことはあれが見えるのは、僕だけか)

あの時、僕には砲身や弾丸も見えていた。

その理由は、おそらく……

「織斑弟、大丈夫か？」

僕が思考に耽っていると、織斑先生が僕に声をかけてきた。

その表情にはどこか家族を心配しているような、表情が含まれていた。

「あ、えっと……ちよつと響きましたけど、大丈夫です」

「そうか」

織斑先生が、安心した様子で言った。

僕と一夏は、体力が無くなった際に自動的に補給するためのパイプが形成されている。

そのため、一夏にダメージが入るとこっちにまで入ってくるのだ。

いつも受けるダメージは、一夏が対処できる許容量内なので、大丈夫だが今のような突発的大ダメージは、対処しきれなくなりそのダメージがこっちにも来るのだ。

しかも、そのダメージも痛みではなく体の中から……言うなれば魂を揺さぶられるような感触だ。

あまりそれをやられるとどうなってしまうのかを、知っている織斑先生だからこそその問いかけだったのだろう。

ちなみに、これは一夏にもあたり逆の場合は一夏の方には純粋な痛みだけだ。

『鈴』

『何よ?』

そんな事を考えていると、どうやら戦況が変わったようだ。

『本気で行くからな』

『何よ! あたりまえじゃない!! 格の違いっていうのを見せつけてあげるわ!!!』

一夏の言葉に、鈴は手にある両青龍刀を構えて一閃する。
それを一夏は躲す。

「織斑君、何か狙っているみたいですね」

イグニッション・ブースト

「瞬時加速だろう。私が教えた」

「瞬時加速?」

山田先生に答える形でつぶやいた織斑先生の単語にわからないのか、セシリアが首を傾げた。

「一瞬でトップスピードを出し、敵に接近する奇襲攻撃だ。出しどころさえ間違えなければ、あいつも代表候補生と渡り合える。ただし……通用するのは一回だけだ」

織斑先生の説明に納得しつつ頭の中で、あとで教えてもらおうと考えながらモニターを見た。

一夏が鈴の後ろに回り込み背後を取ることに成功した。
そして一夏が鈴に接近しようとした時だった。

突然、空から砲撃が二人の間を貫いた。

第20話 クラス対抗戦（後書き）

ほぼ原作通りでしたが、次回はややオリジナル要素を入れております。

第21話 イレギュラー（前書き）

アンノウン戦です。

第21話 イレギュラー

異常を知らせるアラートが、ピット内に響き渡る。

「何？何がありましたの！？」

「システム破損！何かアリーナの遮断シールドを貫通して入ってきたようです！！」

戸惑うセシリアに、山田先生が異常を知らせた。

「試合中止！ 織斑、凰すぐに退避しろ！！」

すぐさま織斑先生が二人に指示を飛ばす。

その瞬間何かが閉まるような音が聞こえたような気がしたが、アラートの音で周りの人には聞こえていないようだった。

モニターには黙々と上がる煙。

すると次の瞬間、二人の方向に砲撃が放たれた。

（あれはビーム兵器だな）

僕は突然やってきたISの武装を考えていた。

どちらにしても、かなり危険な状態だ

「織斑君、凰さん。すぐにアリーナから脱出してください。すぐに先生たちが制圧に行きます！」

『いや、みんなが逃げられるまで食い止めないと』

一夏の言葉に僕は観客席の様子を移したモニターを見た。

(…………まさか)

僕は嫌な予感がした。

もし僕の考えが正しいのだとすれば……。

「一夏！ 鈴！ 聞こえるか！！」

『正樹！！』

僕の呼びかけに、二人が答えた。

「一度しか言わないからよく聞け。二人はこのままそこに残ってくれ」

「織斑弟君！！あなたは一体なにを言ってるんですか！！」

僕の言葉に、山田先生が大きな声で注意してきた。

「今僕は一夏たちと話してんだ。関係ないやつはすっこんでろ！！」

「ッ！！？」

僕はとりあえず山田先生に殺気を飛ばしながら言うと、再び一夏たち呼びかけた。

「10分待ってもらえれば、そっちに行けると思うから、それまで耐えて」

『分かった』

『分かったわ』

二人の返事を聞いた僕は、モニターから離れた。

「正樹さん！　なんであんなことを」

「そうだぞ！　一夏に何かあったらどうする気だ！！」

二人が僕に詰め寄ってくる。

「落ち着け、コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラする」

織斑先生は、そう言いながらコーヒーに”塩”を入れた。

「あの先生。それ塩ですけど」

「なッ！！」

山田先生の指摘に、織斑先生の顔が赤くなった。

「やっぱりなんだかんだ言って弟さんの事が心配――――」

「飲め」

山田先生の言葉を遮って、山田先生に塩入りのコーヒーを差し出した。

しかも拒否をさせる気はないと言うオーラを全開で。

「はい、飲みます」

「私は身内の事でいじられるのが嫌いだ」

僕は、苦笑いを浮かべるしかなかった。

「先生、私にISの使用許可を！！」

「そうしたいのは山々だが、これを見ろ」

セシリアの要求を聞いた織斑先生は、そう言ってモニターを出した。
そこに明記されていたのは……。

「遮断シールドがレベル4に設定」

「しかも扉がすべてロックされて……もしかして、あのISの仕業」

そう、僕が一夏をその場に残らせたのはそれが主な理由だった。

「もし、あの二人を撤退させたりしたら、あのISは閉じ込められている生徒たちに危害を加えないとは言えない」

「まさか……」

僕の言葉に、セシリアは僕が何を言いたいのかを理解したのか、信じられないと言った様子で聞いてきた。

「僕達は、あのISの人質だ」

「そんな……」

筭が信じられない様子でつぶやいた。

「でしたら、緊急事態として政府に救援を!!」

「やっている。現在、三年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドさえ解除出来ればすぐに突入させる」

「はあ……結局待っていることしかできないのですね」

織斑先生の言葉置きいて、セシリア肩を下げた。

「何、どちらにしろ、お前は突入部隊には入れんから安心しろ」

「なっ……なんですって!?!?」

織斑先生の言葉に、セシリアがかみついた。

「お前のブルー・ティアーズの装備は1対複数向きだ。お前が複数の側に入れば、むしろ邪魔になる」

「そんな事はありませんわ!! この私が邪魔などと——」

「では、連携訓練はしたか? その時のお前の役割は? 味方の構成は? 味方の構成は? 敵はどのレベルを想定してある? 連続稼働時間は?」

織斑先生はセシリアの言葉を遮って、次々と質問を浴びせる。

「分かりました!! もう結構です! ……はうう」

セシリアは完膚なきままにやられていた。

『一夏……』

僕はそれを見ながら、一夏にある作戦をプライベート・チャンネル個人回線で伝えた。

「それに、ここを出るのも不可能っぽいしな」
「何!?!?」

僕の言葉に、織斑先生は驚きの声を上げると、出入り口に向かって歩くが扉が開かない。

「ここもロックされているようだな」
「つまり、私たちも閉じ込められている……と」

セシリアの仮定に、織斑先生が無言で頷いた。

「織斑先生、緊急事態の為にこの扉を破壊してもいいですか？」

「織斑弟君！？そんなことは無理です！！」

「……………いいだろう」

山田先生が拒む中、織斑先生が許可を出した。

「ただし、後で色々お手伝ってもらおう。それが条件だ」

「ありがとうございます」

僕は織斑先生に頭を下げて感謝の意を示した。

そしてゆつくりと扉の前に歩いて行き目の前で止まった。

「どりゃあああ！！！」

そして僕は扉に向かって、思いっきりとび蹴りをかました。

ズガァァン！！

その一撃で扉が吹き飛んだ。

「……………な、何と言う威力なのかしら」

「生身で出せる威力なんでしょうか？あれ」

呆然としている全員。

「セシリア、付いて来て」

「は、はい！」

僕はセシリアを引き連れてピットを出た。

「織斑先生、私が抜けだしたことに————」

「気づいてるだろうな」

目的地に向かいながら、僕はセシリアの問いかけに答えた。

「と言うことは……」

「後で反省文の一枚でも書かされるな」

僕の言葉にセシリアの顔が青ざめたのを苦笑いを浮かべながら見て、目的地に向かって走り続けるのであった。

IS〈破門されし者〉

第21話「イレギュラー」

「なあ、鈴。あいつの動きって、どこか機械じみてないか？」

「何言ってるの。ISは機械じゃない」

目的地でもあるアリーナに到着すると、一夏と鈴が話し合っていた。

「そう言うじゃなくてな……あれって、本当に人が乗ってるのか？」

「はあ？ 人が乗ってなければISは動かな————」

鈴はそこまで言って何かに気付いたのか、一夏の横まで移動した。

「そう言えばあれ、さっきから会話している時はあんまり攻撃してこないわね。まるで興味があるように聞いているような」

「だろ？」

「ううん、そんなのありえない。ISは人が乗ってなきゃ絶対に動かない……そう言うものなもの」

鈴は信じたくないと言った様子で言い返す。

「一夏の考えが正しいと思うぞ」

「「えッ!？」」

突然の僕の声に、二人が驚いた様子で辺りを見回す。
ちなみに今のは開放回線オープン・チャンネルではなく、直だ。

「よっと!」

そして僕はピットから飛び降りると、二人の間の地面に着地した。

「あんた! 一体どこから……」

「おい、正樹。さっきのはどういうことだ?」

二人から別々の質問が浴びせられる。

「ピットから飛び降りたんだ。それとあのISだが、映像で見た限りでは二人の攻撃を感知してからの行動までのタイムラグは、わずか0・001秒……人には出せない物だ」

「確かに」

僕の言葉に、鈴が頷いてくる。

「普通の人で、反射神経が鋭い人でもタイムラグは0.5秒から1秒はある」

「だと言うことはあれはやっぱり無人機だと言う事か」

僕の言葉を要約して、納得した。

「無人機だと勝てると言うの？」

「ああ。人が乗ってないなら、容赦なく全力で攻撃しても大丈夫だしな」

一夏の言葉を聞いた鈴の言葉に、一夏は自信たっぷりにもう告げた。

「全力でって……」

「『零落白夜』……雪片式型の全力攻撃だ。雪片式型の威力はおそらく高すぎるんだ。練習や学内対戦で全力を使うわけにはいかない。でも相手が無人機なら全力で攻撃できる」

「零落白夜だか何だか知らないけど、その攻撃自体が当たらないじゃない」

一夏の説明に、鈴はそう切り返した。

確かに、いくら強くても当らなければ意味がない。

それに、一夏のシールドエネルギーも残り少ない状態だ。

バリア無効化攻撃はまだしも、零落白夜を使う余裕はあるのか？

「次は当てる」

一夏のその言葉に、僕は不安要素を口にするのをやめた。

「ふう〜！言い切ったわね？　じゃあそんな事あり合えないけど、あれが無人機だと仮定して攻めましようか」

「よし。じゃ、合図したらあいつに向けて衝撃砲を撃ってくれ。最大威力で」

鈴の言葉を聞いて、一夏がそう指示を出した。

「良いけど当たらないわよ？」

「良いんだよ、当たらなくても。それじゃあ、さっそく――――」

一夏が行動を始めようとした時だった。

「一夏！！！！」

「っ！！！？」

突然アリーナ内に響き渡る箒の声。

見ると、ピットの出口に立っている箒の姿があった。

「あの馬鹿！！」

「男なら……男ならそのくらいの敵に勝てなくてなんとする！！」

僕は慌てて箒のいる場所へ向かう。

「何をやってるんだ！！」

僕が辿り着いたのと同時だった。

無人機が箒の声に反応してこっちの方を見遣った。かなりまずい状況だ。

「まずい……箒、逃げろ!!」

すると無人機がこっちに向けて射出口を向けてエネルギーをチャージした。

僕はとっさにカバンの中にあるものを手にして、いつでもいいように構えた。

「鈴! やれ!!」

「分かった!」

一夏の合図で鈴が肩のアーマー部分に光をとます。
どうやらチャージをしているようだ

「ちょ、ちよつと馬鹿! 何してんのよ!? 退きなさいよ!!」

突然の一夏の行動に鈴が叫ぶ。

まさかとは思うが、あれをやる気じゃないよな?

「良いから撃て!」

「ッ……ああもう! どうなっても知らないわよ!!」

鈴はやけを起こして、一夏に向けて衝撃砲を撃った。

「ううううううおおおおお!!!!」

それを背中を受け止めた一夏は、そのエネルギーを利用して零落白夜を発動させた。

その瞬間、ISが光り輝き雪片式型の刀身が長くなった。

「うおおおおお!!!!」

そして一夏はそのまま無人機に向けて飛んでいくと、雪片式型を無人機に向けて一閃した。

それによって、無人機の右腕が切り落とされたが、左腕によって殴り飛ばされた。

『一夏！』

「一夏！」

それを見た鈴と箒が声を上げる。

だが、僕は二人とは少し離れた見通しのいい高い場所で、ある準備をしていた。

無人機は、ゆっくりと歩み寄って行きそして一夏に向けて射出口を向け、チャージを始めた。

『一夏！！』

鈴が叫ぶ中、一夏の表情には余裕があった。
なぜなら……

『狙いは？』

「「完璧だ（ですわ）」」

一夏の問いかけに僕とセシリアが答えた。
なぜなら、すべては計算づく立ったのだから。

その次の瞬間、ビットのレーザ攻撃によって無人機は後ろに下がる。

「セシリア、正樹！」

『あんた達、いつの間に』

二人の驚いた声が聞こえた。

「食らいつけ、毒矢!!」

僕はその声に答えることなく、手にした弓で無人機に向けて矢を射た。

それは寸分の狂いもなく命中した。

毒矢は、対人用ではない。

だが、無人機の為にこれを使った。

威力はそこまでないが、混乱と麻痺を引き起こさせる。

『セシリア、決める!!』

「了解ですわ!!」

一夏の指示に答えたセシリアは『スターライトMark. ?』からレーザーを放ち、無人機を貫通させた。

「ぎりぎりのタイミングですわ」

『セシリアならやれると思っていたさ』

セシリアの言葉に、一夏は女殺しの言葉をかける。

『正樹もサンキューな』

お礼を言ってきた一夏に、僕は弓を少しだけ掲げて答えた。

「そ、そうですか? と、当然ですわね」

『ふう……何にしてもこれでおわ—————』

横で顔を赤くする姓シリアに、一夏が答えかけた瞬間だった。

「一夏！！ まだあいつ動いてる！！」

鈴の口からとんでもないことが告げられた。

見ればあの無人機は右腕を……射出口を一夏に向けてチャージを始めていた。

「うおおおおおおお！！！！！！」

僕が地上に降りるよりも早く、一夏は光に飲み込まれた。

第22話 無人機VS呪歌使い（前書き）

完全にオリジナル要素満点です。

このジャンルにしては異色なものになります。

第22話 無人機VS呪歌使い

「ッ!!?」

体の中から揺さぶられる感じがした。

それは、一夏自身が耐え切れないダメージを受けたことになる。

「一夏!!」

「一夏!!」

「一夏さん!!」

三人が一夏の元に駆けよって行く。

ちょうどよかった。

そのおかげで、こっちの方は見られることはない。

「すう……はあ」

俺は一回深呼吸して落ち着かせた。

「三人とも一夏を連れて早く中に」

「分かったけど、そんなに慌ててどうしたのよ？」

僕の指示に頷きつつも、聞いてきた。

「説明している暇はない。早くしないと——」

僕の言葉を遮って、再び何かが貫く音がする。

「な？」

そう言って視線を前に移動させると、そこにいたのはさっきの同じ形の無人機だった。
しかも7機。

「ま、また……」

あれほど苦勞して倒したのと同じのが大量に襲撃してきたことに、目を白黒させる鈴たち。

「さ、早く中に避難して。こいつは僕がやる」

「な、何を言ってるんですの！？ 正樹さんにはISがないじゃないですか！！」

僕の指示に、セシリアが叫んで反論してきた。

確かに、僕には現在ISはない。

しかし、戦う手段がないわけではない。

「安心しろ。僕には”これ”がある」

僕はそう言っているものを取り出した。

「その横笛……まさか！？」

僕の右手にある、どこにでもある木製の横笛を見て箒の顔が驚きに染まった。

「そういう事だ。僕も丸腰で来るほど馬鹿ではない。一夏をこんな風にしてただで済ますほど優しくもないしな」

「……………なるほどね。セシリア、退避するわよ」

僕のやろうとしたことが、理解できたのか鈴がセシリアに指示を出した。

「な、何を言ってる……」

「良いから早く!!」

さらに食い下がるセシリアの腕をつかんで、引きずるように連れて行った。

(サンキュ、鈴)

僕は心の中でお礼を言うと、無人機の方に向かい合った。

「一夏を傷つけた罪、その身に篤と刻み込んでくれる!!」

そして、無人機にそう宣戦布告した。

IS〈破門されし者〉 第22話「無人機VS呪歌使い」

突然だが、みんなは歌が持つ力を知っているであろうか？

落ち着きたいときやリラックスするときには、穏やかな曲を、興奮させたいときにはテンポの速めの曲を流したりする。

簡単に言えば人は曲に感化されやすく、曲（歌）にはそれ相応の力が秘められているのだ。

そして、その歌の力をマイナス方面に強化させたのが、俺の使う“呪歌”だ。

これを使えば、人を惑わせることはもちろん火を出したり水を出し

たりなど自由自在出来る。

人はこれを”魔法”と呼んでいる。

だが、そんなことはどうでもいいことだ。

「さあ、始めるか」

僕はそう告げて横笛を構えた。

♪~~~~♪

ゆつくりと奏でる。

僕がやるのは横笛を吹き、そこから発生したエネルギーで術を行使することだ。

これが呪歌使いの力の使い方だ。

「行くぞ!!」

それと同時に無人機7機が一斉に砲撃を撃ってくるが、それを壁伝いで横に避ける。

壁を背にしている限り、背後からの攻撃は来ない。

「炎の中でもがき苦しめ! 灼熱の炎!!」

僕の言葉と同時に炎が一気に噴出した。

それによって7機中4機が、黒焦げになり地面に落ちた。

あの炎の火力は、一度喰らえば真っ黒焦げにすることなど朝飯前だ。

前にこれを見た一夏は、ガス代節約云々で使おうとしていた。

ちなみにその顛末は………想像にお任せしよう。

「よっつつは!!」

僕は残った三機の攻撃をバク天したり、しゃがんだりと様々な技を使って避けていく。

だが、連射されているので少しきついことはきつい。

（出来るとしたら大規模なやつが一回分か。体力面を考えてもこれ以上のチャージは難しいか）

僕は回避行動をとりながら頭の中で考えていた。

不足した体力は一夏の方から補給をされることになる。

今一夏は怪我をして、そのけがの治療に体力を割り当てなければいけない。

そんな状況で一夏から体力を補給でもしたら、最悪一夏の命にもかわりかねない。

なので僕は、残った三機を一気に片づける方向で決めた。

（まだだ……まだ）

僕は三機の無人機が一か所に固まるのを待った。

そしてその時が来た。

三機が偶然範囲内に固まったのだ。

「哀れな穢れと共に、凍てつけ！ 氷点の結晶!!」

一気に氷像が出来上がって、それが碎け散るのと同時に残った三機も地面にばらばらになって落ちた。

「ふん、ガラクタごときが」

僕は、無人機の残骸を見ながらそう呟き、ピットに戻ろうとした時だった。

ドカン！！

「ッ！！？」

突然何かが落ちるような音がしたので、慌てて振り返った。そこには、先ほどの無人機が一機あった。

（またかよ！！）

心の中で叫ぶ。

しかし、どうしたものか……

もうチャージするしか手はない。

しかしチャージをしたら、確実に体力切れを起こす。

「こうなったら、威力は落ちるけど……兄貴のためだ、仕方ない」

僕は手中のために目を閉じて横笛を構え再び吹く。

♪♪♪♪

今度はエネルギーをためるのではなく、直接演奏して術を行使する方法に切り替えたのだ。

こっちの方が体力の消費量も少ない。

ちなみに今やっているのは、高電圧の雷を落とすものだ。

あと2フレーズでそれも完成する。

そんな時だった。

プシュー！！

「は？」

突然の音に、演奏を中止して目を開けると、固まっている無人機の姿があった。

「何だ？これ」

警戒しながら近づき、様子を見ると、どうも機能自体も停止しているようだ。

「……………」

あまりの事に声も出なかった。

結局この後駆けつけた先生たちによって、この無人機は回収された。

ちなみにこの後、織斑先生にげんこつで殴られたのは言うまでもないだろう。

第Side

私達は一夏の目が覚めるのを待っていた。

それは『一夏が目を覚ますまで、抜け駆けはしない』と言う決まり

からであつた。

「おい、その熱血馬鹿」

「正樹か」

「正樹さん！」

声をかけられると、そこにいたのは正樹だった。
頭をしきりにさすっているのはなぜだ？

「箒、気持ちは分かるがあんまし危ないことはするな。一夏の奴も心配する」

「その、すまなかった」

正樹の真剣な面持ちに、私は思わず誤ってしまった。
だが、私はあの時、いてもたってもいられなかった。
だから私は行動に移したのだ。

「私のしたことは、余計な事だったのだろうか？」

「そんなことはない！」

私の言葉に、正樹は間髪をいれずに否定した。

「確かにお前のやったことは無謀でとんでもないことではあったが、その行動自体を否定する権利は僕にもない。ただ無謀すぎると思うだけ」

「そ、そうか」

やはり正樹は正樹だ。

なんだかんだ言ってもちゃんと理解はしてくれようとしている。
もしかしたら私が一夏の事をその……す、好きなのも知っているの

ではないだろうか？

「正樹さん、ちょっとよろしいですか？」

「別にかまわないけど」

セシリアの言葉に、正樹は首を傾げる。

「その……あのISは————」

「あれなら、潰した」

「ええ！？」

正樹の言葉に、セシリアが声を上げて驚く。

私は、どうやって倒したのか、そのからくりを知っているので驚きはしないが。

「一体どうやってあれを倒されたのですか？」

「それは……その」

セシリアの追究に、正樹は困ったような表情を浮かべた。
その理由は、やはり正樹の持つ特別な力であるのだろう。

「このことは他言無用……それが守られるのであれば言えるけど」
「分かりましたわ」

セシリアの答えに、正樹は一息つく。

「まず、倒したのは歌の力を使ってだ」
「歌……ですか？」

やはりセシリアの目が丸くなっている。

そう簡単に信じられるものではない。

実際、私もその眼で目の当たりにしたからこそ、正樹の言葉を信じられるようになったのだ。

「歌の力と言うのは私達が考えているよりも強力だ。曲風によってリラックスしたり頑張ったり等々の効

果を得ることがある。その力を応用したものが正樹のあれだ」

「篠ノ之さん。あなたご存知でしたの？」

セシリアが私に聞いてくる。

それに私は無言で頷いた。

「箒の言うとおり、僕はその歌の力をこの笛を吹いて生じたエネルギーを使って色々な術を使う。それを呪歌使いと言う」

「呪歌使いって……それって魔法使いでは？」

セシリアがそう呟いた。

確かに、それは最初のころに私も思った。

「ち・が・う！ 魔法使いは自分の中にあるエネルギーを使うけど、呪歌使いは演奏によって得られたエネルギーを使うから、正確には違うんだ」

「そ、そうですの？」

正樹の剣幕にセシリアが押されているな。

まあ、私もそうだったが。

「一夏は保健室だよな？ 僕ちょっと様子を見てくる」

「ああ、気を付けて」

「いや、保健室に行くだけなのにどこを気を付けろと……まあ、気

を付けます」

正樹は首を傾げながら言うと、私たちの前から去って行った。

「そう言えば篠ノ之さんは、どうやって知ったのですか？」

主語がないが何のことかは、容易に想像できた。

「昔に、見る機会があったのだ」

「そうなんですか。私も出来ればぜひ見てみたいものですわ」

セシリアは目を輝かせていた。

それほどいいものなのだろうか？

(……)

それを見た光景を思い返してみた。

目の前に広がるのは、真っ赤の炎。

そして聞こえてくるのは、苦しげな声だった。

「そんなにいいものではない」

「?? 何か仰いましたか？」

私のつぶやきが聞こえたのか、セシリアが尋ねてくる。

「いや、なんでもない」

私はそう答えた。

今だけでも、セシリアには夢を見せてあげたかったからかもしれない。

そして私たちは再び、一夏が目覚めるのを待つのであった。

S i d e o u t

「一夏は大丈夫かな？」

まだ痛む頭をさすりながら保健室へと向かっていた。

「一ッ！？————」

保健室のドアを開けると、目の前に浮かび上がってきたのはベッドに横たわって眠っている（ように見える）一夏と、その一夏の唇にキスをしようとしている鈴の姿だった。

「……………」

僕は二人に気付かれないように、静かにそこを後にした。

（なんでこんな気持ちか……）

自分の中で膨らむ気持ちに戸惑いながら。

第23話 戸惑い（前書き）

今回は、またあの人が登場します

第23話 戸惑い

「はぁ……何やってんだろ。僕」

夕日が差し込む屋上で、一人でつぶやく。

（なんで今更あんな気持ちに）

僕は、鈴が一夏にキスをするのを見た。

そしたら、僕の心の中にドス黒い感情が湧き起こったのだ。

あの二人に攻撃をしろ。

と言う行動衝動まで出てきたのだ。

「はぁ……」

再びため息が出てきた。

「そんなに深いため息なんかついちゃって……何々、お姉ちゃんに相談してみなさいな♪」

「……………え？」

横を見ると、そこには前に見た水色のショートヘアの女子生徒が立っていた。

「あなたはこの前の……」

「お久しぶりねー織斑正樹君？」

「なッ!？」

僕は思わず息をのんだ。

彼女が僕の名前を知っていたからだ。

当然だが、僕は彼女に名前など言っていない。

「どうして君の名前を知っているのか？って言いたいのかな？」

「……………」

僕の疑問まで言われてしまった。

一体彼女は何者だ？

「そうね〜ヒ・ミ・ツ」

「……………」

女子生徒は人差し指を唇に当てながら答えたが、僕は茫然としていた。

「それで、お悩み事は何かな〜？」

「……………実は」

僕は危険な人ではないと判断して、女子生徒に話を打ち明けた。
好きだった人が違う人にキスをする場面を見たこと、それを見た瞬間二人を傷つけたいと言う衝動が沸き起こったこと。

「なるほどねえ」

女子生徒は手を顎に当てて考え込む。

僕は、女子生徒の言葉を待った。

「正樹君の感情だけど、それって普通だと思うよ」

「普通……ですか？」

「そう。だって本当に好きな人なら、私だってそんな感情が起こるもの」

女子生徒は笑顔で答えてくれた。

「僕は、一体どうすれば」

「いつその事、正樹君も好きな人を作っちゃえば？」

女子生徒の答えに、僕は固まった。

いくらなんでもその発想はなかった。

「ねえねえ、好きな人っているのかな？お姉さんにこっそり教えて頂戴♪」

ものすごいこやかに聞いてくる女子生徒に思わず半歩引いてしまった。

「……………いません」

「へえ〜。それはとても意——————」

女子生徒が何かを言おうとした瞬間、突然軽快な着信音が鳴り響いた。

「あ、私だ。ごめんね」

そう言って女子生徒は携帯電話を取り出した。

「あ、もしもし。……え？屋上だよ……え？でも……わ、分かりました。すぐに戻りますです……！」

意味が分からないが、どうやら呼び出しのようだ。

「ごめんね、私急用が出来ちゃった。じゃあねー！」
「あ、その。ありが……」

僕のお礼を聞かずして、女子生徒はものすごい速さで屋上を去って行った。

「一体なんなんだ？あの人は」

僕はボソツと疑問を口にした。

「好きな人……か」

僕は考えた。

本当はいるのだ。

いや、”いた”の間違いだ。

その人物のためにも名前は言わないが。

「僕のような化け物に、人を好きになる権利なんてないですよ」

僕の言葉は、風によって消された。

僕はしばらく屋上で空を眺めているのだった。

第24話 製作者と新たなIS（前書き）

これって独自解釈なのか、それとも正しいのかはよく分かりませんが。

第24話です。

第24話 製作者と新たなIS

「こんなところにいたのか、織斑弟」

「あ、織斑先生」

屋上を後にすると、織斑先生に会った。

「ちょうどいい、付いて来い」

「え？ あ、はい」

突然のことに、何がなんだかわけがわからなかったが、織斑先生の後について行くことにした。

どうせ、この後になんてなかったしな。

ISへ破門されし者へ

第24話「製作者と新たなIS」

連れてこられたのは、IS学園の地下にある薄暗い部屋だった。
そこは、研究施設のような感じがした。

「あ、織斑先生……って、織斑弟君！？　なんでここに!？」

デスクに腰かけていた山田先生が、驚いた様子でこっちを見てきた。

「私が連れてきた。これでもこいつはISの研究者だ。腕は束とほぼ同等だ。良い意見が聞けると思ってな」

「そ、そうでしたか」

織斑先生の言葉に、山田先生は納得したようだが、それはさすがに言い過ぎだ。

「山田先生」

「はい。何でしょうか？」

僕は一つ重要な事を思い出したので、山田先生に声をかけた。

「さっきは教師に対して無礼な言動をしてしまいすみませんでした」

「え！？あ、いえ。そ、その大丈夫ですので頭を上げてください」

僕の謝罪に、慌てながら山田先生が言うのと頭を上げさせられた。

「それで、結果はどうだ？」

「はい。昨日数中は織斑君の攻撃で焼き切れてしまいましたが、結論を言いますと無人機です。コアも未登録の物でした」

山田先生の解析結果に織斑先生が険しい表情をする。

「あのすみません。突然活動を止めた無人機の方のプログラムを出してもらっていいですか？」

「分かりました」

僕の要求に山田先生はそう答えると、キーボードを操作してモニターにデータを表示した。

「ちょっと失礼します」

僕はキーボードを操作して、無人機のプログラムを解読していく。

「なるほど。これはかなりの天才科学者が作成したものです。プログラムに無駄はなく、しかも会話を分析して戦法を自動で形成するものまでありますよ」

二人の思っていた会話中に攻撃をしないのは、会話の中の戦法の情報をもとに戦い方を考えるためのモノだったのだ。

「な？言っただろ」

「さ、さすがですね」

僕の感想に二人が感心したように口を開いた。

「…………あれ？」

「どうしましたか？織斑弟君」

僕が首を傾げると、山田先生が聞いてきた。

「いえ、途中からプログラムにおかしなところが……」

僕はその部分を指さした。

「どういうことだ？」

「この前と後ろの内容から察するに、攻撃とそれに伴う処理の内容でなければいけないはずなのに、まったく意味のない文字が入力されてるんです。ここまでのプログラムを見てもとても、おかしいです」

僕は織斑先生にそう答えた。

そして、一人の人物が頭の中に浮かび上がった。
こういった不可能を可能にしたり、いたずらをしたりする人物を。

（何か手がかりがあるはずだ）

僕はそう思い、文字を凝視する。
そして見つかった。

「この作成者が分かりました」
「本当ですか！？ 織斑弟君！！」

あまりの迫力に僕は若干引きながら、説明を続けた。

「この不明慮なプログラムの頭文字をとると……」

僕はそう言って近くにあった紙に書き込んでいく。

その文字は『R』『A』『B』『B』『I』『T』『W』『O』『
M』『A』『N』だった。

「ラビット、ウーマン……直訳するとウサギ女です」
「……………」

僕の言葉に、織斑先生の表情が険しくなった。

「織斑先生はご存知なんですか？」
「……ああ、よく知っている奴だ」

織斑先生はため息を吐いた。
どう考えてもこれは束さんだ。
束さんの耳にはウサ耳のカチューシャが装備されていたので確実だ。

「それじゃ、僕はこれで失礼します」

「ああ。それとっておくが、このことは一切口外しないように」

織斑先生の注意を聞いて僕はそこを後にした。

夜、誰もいない屋上である場所に電話をかけていた。

『もすもす終日う？はあい、マーちゃんの大好きな束さんだよ』

「…………お久しぶりです」

電話口から聞こえてきた声に、体中の力が抜けそうになったが、それを必死に堪えた。

『いや、こうして電話をしてくれたっていう事は、あのメッセー

ジを受け取ってくれたんだよね。いやいや、束さんは嬉しいのですよ。』

「…………で、あれだけ派手なことをしてまで連絡を取りたかった用件はなんですか？」

僕は束さんに皮肉交じりで用件を聞いた。

ちなみに、束さんの言うメッセージはアルファベット11文字の後の”Tell Me”だった。

『あ、あれ？もしかして、マー君怒ってる？』

「はい。一夏が怪我をしましたからね。納得のいく説明をされないと、このまま束さんに呪いをかけそうです」

この時、僕は自分ながら、良い笑顔だろうなと思っていた。

『え、えっとね。マー君のIS”神無月”修理が終わったのと、頼まれていたISが完成したって言いたかったんだよね』

「どうでもいいんですけど。神無月に余計な事をしてませんよね？」

僕は束さんにそう尋ねた。

『もちろんですよ。二機のISだけど、明日の朝には届くはずだから』

「ありがとうございます」

僕は束さんにお礼を言った。

彼女には、色々と無理を言ったのだから、お礼を言うのが礼儀だ。

『気にしなくても問題ナッシングなのですよ。それじゃあ、一君

とちーちゃんによろしくって伝えてね』

「分かりました」

僕の答えと同時に、電話が切れた。

「……………本当に、変わった人だな。あの人は」

僕はもう笑うしかなかった。

第24話 製作者と新たなIS（後書き）

今回登場した新たなIS。

今後使うかどうかは分かりません（おい

第25話 休日と引越し（前書き）

これで書き溜めていた分は終了です。

第25話 休日と引越し

六月の頭の日曜日。

僕達はたまの休日を利用して、自宅へと戻っていた。

「さてと。着いたぞ」

『ん？もう着いたんだ』

今僕は一夏の中にいた。

「よっと、わざわざご苦勞である」

「たく、歩くのが嫌だからって入るなって」

外に出た僕に、一夏がため息交じりに注意してきた。

「はいはい。以後気を付けます」

何だか嫌なんだよね。

この季節ジメジメしちゃって。

「さて、服とか必要なもんがあったらもっていかないといけないから。準備しちやおうか」

「ついでに掃除でもしておくか」

僕に続いて一夏がそう言うのと、それぞれ行動を始めた。

「一夏、この食器は？」

「ああ、それは右の棚の上側だ」

必要な荷物をまとめるのは意外と速く終わり、今は一夏と掃除中だ。

「冷蔵庫の中……電源を入れないで2か月間放置してたから、中の食材ほとんどダメだろうな」

「そうだな。食材には申し訳ないけど、ダメなものは捨てちゃおう」

そして冷蔵庫のドアを開けた。

「あー！？ このチーズケーキ、受験が終わったら食べようと思ってたやつ……………」

目に留まったのは、僕がとても苦勞して手に入れた限定50個のレアチーズケーキだった。

白いはずが所々に黒い斑点があった。

「それ、どう見てもアウトだから食べるなよ？」

「あううう」

一夏の言葉など耳に入らずに、僕は血の涙を流していた。

「チーズケーキで泣くって、ある意味すごいな」

一夏がそんな事を呟いていたらしい。

IS〈破門されし者〉

第25話「休日と引越し」

「さて、片づけも終わったし出かけるか」
「そうだねー」

チーズケーキのショックから立ち直った僕は、一夏とともに織斑家を後にした。

「このまま帰るのか？」

「いや、ついでだし弾の所にでもよって行こうと思うんだ」

僕の問いかけに、一夏が答えた。

弾と言うのは、僕たちの友人だ。

いや、悪友と言った方が正しいな。

弾の家は五反田食堂という料理屋をやっているので、時々お世話になっているのだ。

「じゃ、行きましょうか」

「了解」

そして僕たちは織斑家を後にした。

そして僕たちは五反田食堂の上の五反田家の弾の部屋にいた。

「お前以外全員女子か……いい思いしてんだろぅな」
「してねえつつうの」

テレビゲームをやりながら話しているの赤髪に頭にバンドのようなものを付けたやつが、僕たちの共通の友人の五反田 弾だ。

「嘘をつくな嘘を。お前のメール見ているだけで楽園じゃねえか。招待券ねえの？」

「ねえよ馬鹿」

器用にもコントローラーを操作しながら肘で一夏をつつく弾。

「だけど、鈴が転校してきてくれて助かったよ。話し相手少なかったからなあ」

「ああ鈴か、鈴ねえ」

弾が微妙な表情をする。

ちなみに僕は窓側の壁に寄り掛かって、本を読んでいた。

どうもゲームは苦手なのだ。

そんな時であった。

ドカーン!!

「のわぁ!？」

突然の音に驚いて手に持っていた本を落とした。

「お兄、ご飯で来たよ。さっさと食べに気なさ————」

突然入ってきた赤髪の少女はそう告げて去ろうとしたが、再び戻ってくる……

「い、一夏さんに正樹さん!？」

「よう蘭、久しぶり。邪魔してる」

「どうも」

部屋にいる僕たちに気付いたのか驚いた顔をしていた。

目の前にいる少女は五反田 蘭。

弾の妹だ。

彼女も僕たちの幼馴染だったりする。

彼女も一夏に恋をしている。

「い、いやゝあの……来てたんですか？」

「今日は外出。家の様子を見に来たついでに寄って見た」

蘭の問いかけに、一夏は表情一つ崩さずに答える。

「そ、そうですか……」

「蘭、お前ノック位しろよ。恥知らずな女だとみ——」

弾が注意をすると蘭の鋭い睨みが飛んできた。

「なんで言わないのよ!」

「あ、言ってなかったか。そっか、そりゃ悪かったな」

完全に蘭は苦笑いを浮かべていた。

「一夏さんに正樹さん。よければお昼でも食べませんか？」

「ああ、そういえば食べ損ねてたからな。お言葉に甘えるよ」

「右に同じく」

僕と一夏は蘭に答えた。

その後、僕たちはお店の方に移動となった。

「お、服着替えたんだな」

お店に入った時、一夏が気付いたのは蘭の服装だ。

後ろでまとめていた髪を下して、服もふりふりのワンピースタイプにしていた。

「あ、デートか？」

「違います!!」

一夏の問いかけに、蘭はテーブルを叩いて答えた。

「はぁ」

溜息しか出ない。

デート用の服であることは分かっているのだから、後は対象が誰かを把握すればいいだけ何だが。

「正樹さん。これもダメでした」

「だったら、いつその事押し倒して唇を奪うか求婚でもしてみたらどうだ？」

蘭と仲がいいのは、あくまで僕が”どうすれば一夏に好きになってもらえるか”を教えているためだ。

ことごとく失敗しているが、教えあううちに今のように普通に話せるようになっていた。

「お、押し倒すだなんてそんな!!」

「二人とも何を話してるんだ？」

「「な、何でもない（です）!!」」

僕達の華麗なハモリ回答に首を傾げる一夏に苦笑いを浮かべる弾。

「食わねえんなら、下げるぞ、ガキども」

「「「た、食べます!!」」」

五反田食堂の対象でもある五反田 厳さんの言葉に、慌てて座ると食べ始めた。

どうでもいいが、僕はこの人がちよつと苦手でもあったりする。

料理の腕はいいんだが……。

その後ごくごく普通の昼食を楽しんでいたのだが。

「私、来年IS学園を受験します!!」

「お、お前何言って—————」

立ち上がった弾の額に、見事にお玉が命中した。

「受験するって、蘭の通ってる所って確か、大学までのエスカレーター式だろ？　しかもネームバリューだってかなりあるはずだけど……どうして？」

「大丈夫です。私の成績なら余裕です」

見事に言い切る蘭。

「IS学園に推薦なんて無いぞ？」

と、復活した弾が言う。

弾のすごいのは、すぐに復活すること。

あまりすごいとは言い切れないのが実情だが。

「お兄と違って、私は筆記で余裕です」

「だけど、IS学園には筆記以外に実技試験もあるぞ？」

「そうだそうだ」

僕の疑問に弾が乗ってくる。

確かIS学園には通常の試験の他に、ISを起動させる実技があったはずだ。

大方そこで落とされると聞いたことがある。

唐突に蘭が取り出したのは、一枚の紙だった。

それを受け取った弾は髪を広げた。

「IS簡易適性検査……判定　A!？」

Aランクと言えばかなりの才能ではあるが、誰か曰くランクはお飾りのようなもの。

とは言え、これはすごい。

「これで問題は解決済みです」

「で、ですので、一夏さんには、ぜひ先輩として、ご指導願を……」

もじもじしながら一夏に尋ねる蘭。

「ああ、いいぜ。合格したらな」

それにあっさりと答える一夏。

「約束しましたよ!？ 絶対、絶対ですからね!」

「お、おう」

ものすごい迫力に押されながら一夏は頷いた。

そして蘭は嬉しいのか飛び跳ねながら裏に入って行った。

「なあ一夏。すぐに彼女を作れ」

「はあ!？」

それを見た弾が突然一夏にそう言い始めた。

「すぐに作れ! 今年中……いや、今月中に作れ!!」

「いや、そもそも俺には、そんな事している余裕はないし、興味もない」

「お前は枯れた老人か!？ そんなんだから鈴が————」

「……鈴がどうした？」

「ううん! それはともかくだ、誰でもいいから、付き合え! な、な?」

「俺の恋愛は世界レベルの問題だったのか!？」

もはやどうしようもない位の、くだらない言い争いだったので、軽く放置している。

「大体、お前はいつになったら、女に興味をもつんだ？ あれか？

モテスリム気取りか？ ふざけんなよ、この野郎！！」

「何でキレてんだよ！？」

「キレてねえよ！」

「「お兄（弾）？」」

「お、おう何……ヒイ！？」

さすがに沸点を超えたので、弾を呼ぶと、偶然か蘭の声と重なった。

『余 計 ナ 事 ヲ ス ル ナ』

「食事中だ。黙れ」

「は、はいいい！！」

僕の殺気満点の言葉と蘭のぞっとする視線に、弾はようやく静かになった。

やはり食事は休日位は静かに食べたいものだ。

こうして、僕たちのほんのささやかな休日は幕を閉じた。

一夏Side

ささやかな休日の夜の夜。

寮でくつろいでいると、山田先生が尋ねてきた。

「お引越しです」

「「はい？」」

あまりに突然なことに、思わず箒とかぶってしまった。

「部屋の調整がついたんです。篠ノ之さんは別の部屋に移動です」

「ま、待ってください！ それは今すぐでないといけないんですか？」

山田先生の言葉に、突然立ち上がりながらそう尋ねる箒。

「はあ？」

てっきり男子と寝食共にするのは、嫌だと思っていたのだが。

「それは、まあ、そうです。いつまでも年頃の男女が一緒だと言うのも篠ノ之さんもくつろげないでしょう」

「そ、それはそうなんですが……」

箒がちらりとこっちを見てくる。

（あ、そういう事か）

「俺の事なら心配するなよ。箒がいなくても朝起きれるし、歯も磨けるぞ」

俺は箒が渋っているのは俺の事が心配だと思ったので、笑顔で安心させた。

これで箒も安心して移動でき――――

「先生、今すぐ部屋を移動します!!」

「は、はい」

なぜか俺を睨んで大きな声で言うと、ものすごい速さで荷物をまとめ、ドアを思いっきり閉めて行った。

「あいつ……何怒ってんだ？」

俺は首を傾げるだけだった。

「寝るか……考えても仕方のないことだし」

俺は一人になった部屋で、寝る支度をしようとした。

コンコン

「あ、はい!」

ドアをノックされたので、俺はドアを開けるとそこには腕を組んだ箒の姿があった。

「何だ? 忘れ物か」

「は、話がある」

しばらくの沈黙の後、箒が話を切りだした。

「なんだよ? 改まって」

「来月の学年別の個人トーナメントだが……わ、私が優勝したら…

……付き合ってもらおう!!」

突然の箒の言葉に、俺は首を傾げるだけだった。

「で、ではな」

「あ、おい箒!!」

俺の言葉も聞かずに、箒はドアを閉めた。

「……………一体何に付き合うんだ?」

この頃謎が増えて困ると思う俺だった。

コンコン

「また箒か? はい!」

再びドアがノックされたので、ドアを開けるとそこには……

「やっほ。部屋移動とか言われたから来た」

バックを手にした弟君の姿があった。

第25話 休日と引越し（後書き）

この次の投稿はいいたいいつになるかはわかりませんが、次回を楽しみにして頂ければ幸いです。

それでは、また1か月後に。

感想やご指摘等お待ちしております。

第26話 転校生は三人目の男？（前書き）

大変お待たせしました。

ISく破門されし者く第26話です。
今回から、あの人が登場します。

第26話 転校生は三人目の男？

一夏Side

「席に着け、HRを始める」

今日も今日とて、織斑先生の声で全員が席に着く。

「今日はなんと、転校生を紹介します」

山田先生の言葉が終わるのと同時に、ドアの開く音がある。

「あッ」

そして前に立った転校生に、俺は思わず息をのんだ。
なぜならば、その人物は……男だったからだ。

Side out

IS〈破門されし者〉 第26話「転校生は三人目の男？」

教室に入ってきた転校生は、金髪でややスラッとした体格をした美少年ともいえる男だった。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。皆さんよろしくお願いします」

笑顔で自己紹介をする転校生に、クラス中が固まっていた。

「お、男？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を
————」

その瞬間、クラス中が黄色い声に包まれた。

そんな中、僕は転校生を目を細めてみた。

僕にはこの転校生……シャルル・デュノアが男には見えなかったのだ。

「騒ぐな。静かにしろ！」

織斑先生の一括で、クラス中が一瞬で静かになった。

「今日は2組と合流でI S実習を行う。各自すぐに着替えて、第2グラウンドに集合。それと織斑兄弟」

「「はい？」」

織斑先生に突然名前を呼ばれたので、一夏と同時に答えた。

「デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子同士だ。解散！」

織斑先生の一言で解散となり、周りが騒がしくなる。

「君が織斑君？初めまして僕は————」

彼の自己紹介を遮るように、僕と一夏は立ち上がった。

「ああ、良いからいいから。とりあえず移動だ。女子が着替え始め

るから」

「まあ、女子の裸を見たいのであれば構わないけど」

一夏はデュノアの手を掴んで、逃げるようにして教室を後にした。その後に続いて、僕も教室を出る。

「俺達はアリーナの更衣室で着替えるんだ。実習のたびにこの移動だから早めに慣れてくれよな」

「う、うん」

一夏の注意にデュノアは手をつながれているからか、顔が赤い。

「何だ？そわそわして。トイレか？」

「ち、違うよ！」

一夏の言葉に、シャルルが否定する。

「あ、噂の転校生発見。」

「しかも織斑君と一緒に」

「みんなこっちよこっち」

「者ども、出会え出会え！」

瞬く間に僕たちは大量の女子生徒に囲まれた。

「一夏、デュノア。目と耳塞いどきな」

「う、うん」

「まさか!？」

僕は二人に指示を飛ばすと大きな声を出した。

「みんな、痛い目を見たくなければ目と耳を塞いだ方がいいぞ!」

僕はそう宣言すると、カバンからスタングレードを取り出した。
そしてすぐに安全ピンを抜いて床に設置する。

そして驚いて引いてくれたおかげでできた抜け道に逃げ込む。
その瞬間。

キィィィィィン!!!!

劈くような音と光が発せられた。

「どうだ?」

「やり過ぎだ(だよ)!!」

二人から、怒られてしまった。

「ところで、なんでみんな騒いでるの?」

「そりゃ、ISを操縦できる男って今の所、俺達位だからだろ」

「あ!? う、うん。そうだったね」

完全に忘れていた感じで答えた。

そして何とか更衣室にたどり着くことができた。

「何とか巻いたみたいだな」

「う、うん。ごめんね、いきなり迷惑かけちゃって」

全力ダッシュしていたため、息が切れているデュノアは僕達に謝ってきた。

「いって」

「そうそう。あんまり気にするな」

「ありがとう」

一夏と僕の返事に、デュノアはお礼を言った。

「これからよろしくな。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「同じく、弟の織斑正樹だ。正樹と呼んで。よろしく」

そう言って僕は手を差し出した。

「え?」

「日本では、親愛の形とし握手をする物だ」

僕は行動が分からない様子のシャルルに説明した。

「あ、うん。よろしく正樹。僕の事もシャルでいいよ」

そう言って僕の手を握って握手をする。

「……………やっぱり」

この時、僕は確証した。

こいつは、男ではなく女だ。

「え？ 何か言った？」

「あ、いやなんでもないよ」

「一夏も、よろしくね」

シャルルは一夏にも笑顔で告げた。

「一夏、時間」

和やかな雰囲気の中、僕はロッカーについているデジタル時計を指差しながら言った。

見れば授業開始まであと数分と言う状態だった。

「うわ！？ 時間やばいな、すぐに着替えちまおうぜ！」

「うわ！？」

一夏が着替え始めようと服を脱いだ瞬間、シャルルがあからさまに顔を隠して背を向けた。

「早く着替えないと遅刻するぞ？ うちの担任はそれはもう時間にはうるさくて」

「う、うん着替えるよ。でも、その……あっち向いてて」

「いやあ、まあ、別に着替えをじろじろ見る気はないけど」

一夏は首を傾げつつ着替え始めた。

「時間がないから急げよ」

「な、何かな？」

「着替えるの超早いな。何かコツでもあるのか？」

一夏の言葉に後ろを振り向くと、本当に着替え終わっていた。

「い、いや、別に。はは……ははは」

「どうせすでに制服の下に着ておいたというオチだろ」

僕はそんなシャルルを見て小声でボソツと呟いた。

「これ、着る時に裸って言うのが着づらいんだよな。引っかかって」

「ひ、引っかかって!？」

「おう」

一夏の答えに顔を赤くするシャルル。

僕達はISを動かせやすいようにするためか何かは知らないが、このISスーツを着なければいけないのだ。

「一夏それ、軽くセクハラだぞ」

「あ、悪い……ん？」

僕の言葉に、謝りながら何かに気付いたような声を上げる。

「そのスーツ、着やすそうだな」

「これはデュノア社製のオリジナルだよ」

一夏の言葉に、シャルルが答えた。

と言うよりデュノアって……

「デュノア？ お前の姓もデュノアだよな」
「父が社長をしてるんだ。一応フランスでは一番大きいISの関連の企業だと思う」

一夏の疑問にシャルルが答えた。

（なるほどな）

それで僕はシャルルの目論見が理解できた。
おそらくは僕たちのISのデータを盗もうとしている。

「へえ、社長の息子なのか。道理でな」
「え？ 道理でって？」

一夏の言葉に、シャルルが尋ねた。

「ん、なんか気品があつていいところ育ちって感じがするじゃん。
納得したよ」

一夏がそう言うのと、なぜかシャルルは暗い顔をしてしまった。

「ん？」

一夏はそれを見てわからなそうな表情をしているだけだった。

「二人とも、時間がないけど突っ立ってていいの？」
「うげ！？ ヤベッ！ 走るぞシャルル、正樹」

時間にして後2分。
もはや絶望的だった。

「う、うん！」

そして僕たちは慌てて更衣室を後にした。

ちなみにだが、僕たちは見事に遅刻した。

バシン！　バシン！　バシン！

「遅い！」

その為に鬼教官による説教（鉄槌）を、食らう羽目になりました。

第26話 転校生は三人目の男? (後書き)

次回は実習篇になります。

第27話 IS実習(前書き)

今回はIS実習です。
今回もまた長いです。

第27話　IS実習

「本日から実習を開始する」

『はい!』

今日は一組と二組との合同実習だ。

その為かものすごい人数だった。

「今日は戦闘を実演してもらおう。凰!　オルコット!」

「はい!」

「はい!」

織斑先生に指名された二人は元気に返事をした。

極一名、元気が有り余っている人もいるが。

「専用機持ちはすぐにはじめられるだろ。前に出る!」

「あーあ、めんどいなあ……なんであたしが」

「何だか、こういうのは見世物みたいで気が進みませんわね」

やはりと言うかなんというか、二人はぼやいていた。

まあ、これも専用機もちの宿命と言ったらかわいそうだろうか?

あれ?　今織斑先生、二人に何かを言ったような……。

「やはりここはイギリス代表候補生、私セシリア・オルコットの出番ですわね!」

「実力の違いを見せるいい機会よね!　専用機持ちの!」

「……………」

僕は、あまりの変わりように固まっていた。

「今先生なんて言ったの？」

「俺が知るかよ」

シャルルがそんな二人を見て一夏に聞くが、一夏も知らないようだった。

まあ、大方『一夏にいいところが見せられるぞ』的な事でも言われたのだろうけど。

本当に分かりやすい人たちだ。

「それでお相手は？　鈴さんが対戦相手で構いませんが」

「それはこっちのセリフ。返り討ちよ」

「慌てるな馬鹿共。対戦相手は——」

やけに繊維むき出しの二人に織斑先生が一喝をした時だった。何かが落ちてくるような音がした。

「あああゝっ！　ど、どいてくださいゝっ！」

それはIS……おそらくラファールに乗った山田先生だった。

「おいおい、この前の二の舞は勘弁してくれよ!!」

僕はまた自分のISがダメになるのが嫌だったので、安全圏まで避難した。

そう言えば、一夏は？

その答えは、すぐに分かった。

何と一夏は山田先生の上に覆いかぶさっていた。しかも胸まで揉んでるし。

（あの変態野郎）

僕は気付くとISを展開していた。

「そ、そのですね。困りますこんな……ああでも、このまま行けば織斑先生が義理のお姉さんってことでそれはそれでとても魅力的な——」

「こ、これは——」

思いつきり立ち上がった一夏の目の前を青いエネルギー弾が通過して行った。

これを放ったのは……

「おほほほほ、残念です。外してしまいましたわ」

万弁の笑みで、しかしこめかみを引く着かせているセシリアだった。

「一夏あ!!」

「成敗!!」

鈴が放った双天牙月が一夏に迫る。

ついでに僕はガナーに指示を送って、一夏の方へと放った。

そんな時、二発の銃声が響き渡った。

その銃声で双天牙月は撃ち落とされていた。

僕のガナーはその場で静止した。

僕とて一夏に本気で当てる気はない。

「織斑君、怪我はありませんか？」

「は、はい。ありがとうございます……」

山田先生の言葉に、一夏は苦笑いを浮かべながら返事をした。

(すごい)

そんな中、僕は山田先生の射撃技術に驚いていた。

二発の銃は確実に双天牙月をとらえて撃ち落としていた。

今までのあのぼわぼ和した感じからでは、想像が付かなかった。

「山田先生は元代表候補生だ。今のくらいの射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし……………」

山田先生は起き上がって織斑先生の言葉に照れ得ているのか頭を触っていた。

「さて、小娘ども。さっさと始めるぞ」

「え？ あ、あの二対一で？」

「いや、さすがにそれは」

織斑先生の言葉を聞いた二人は苦笑いを浮かべる。

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

織斑先生の言葉に、二人の表情が引き締まった。

本気になったのか、それとも今の言葉が頭に來たのか。

「では、始め！」

そして織斑先生の言葉で、三人は空高く飛んで行った。

そして勝負はすぐに始まった

「デュノア、山田先生が使っているISの解説をしてみせろ」

「あっ、はい。山田先生のISはデュノア社製の、ラファール・リヴァイブです。第2世代開発最後の機体ですが、そのスペックは第3世代にも劣らないものです。現在配備されている量産のISの中では最後発でありながら、世界第3位のシェアを持ち、装備によって格闘、射撃、防御と言った全タイプに切り替えが可能です」

さすがはデュノア社社長の息子と言った所なのか、デュノアはまるでセールスマンのように特徴を話していた。

まあ、それも僕には全く駄目だったけど。

と、そんな時どうやら勝負は決着がついたようだ。

どうやら二人は負けたようで、上空から落ちてきた。

そして二人は何やら言い合っていた。

まあ、負けた理由は二人の連携力のなさだろうけど。

「これで諸君にも、教員の实力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

いがみ合う二人やその周りの生徒に、織斑先生がそう言い放った。確かに友達感覚で接している人がいたもんね。

まあ、これで治るかと言われればそれはないだろうけど。

「次にグループになって実習を行う。リーダーは専用機持ちがやること。では分かれろ！」

織斑先生が言い終わるのと同時に、僕と一夏、シャルルに女子が一気に押し寄せてきた。

「織斑君、一緒にがんばろう！」

「織斑弟君、分からない所教えて」

「デュノア君の操縦技術を見たいなあ」

はっきり言っただけじゃなかった。

「馬鹿どもが。出席番号順に分かれろ！」

織斑先生の一喝で全員がものすごい速さで分かれた。

「それじゃ、ラファールと打鉄どっちがいい？」

「私はラファールで」

「うちは打鉄が良い」

僕の問いかけにグループの女子たちが一気に答えてくれた。

そのことに内心で驚きながらも、僕はラファール・リヴァイブを借りに行った。

IS〈破門されし者〉

第27話「IS実習」

「ISには部活動ないしは試験の際に乗ったことがあるはずだ。しかしみんなはまだ初心者で満足に扱えないものもあるだろう」

僕の言葉に、全員の表情がこわばった。

「だが、それは誰でもとおる道だ。ブリュンヒルデと呼ばれた織斑先生、元代表候補生の山田先生でさえ通ったのだ。そして君達には操縦がうまくなるチャンスが平等にある。その事を念頭に入れて、今日の実習を取組んで行こう」

『はい！』

僕のどうでもいい長話に全員が付き合っていてくれたことがとてもありがたかった。

「さあ、今日はISに乗って貰い所定コースを歩いて貰おう。それでは、出席番号順に整列！」

僕の言葉に、全員が瞬時に整列する。まるで自分が織斑先生の様な感じだ。

（さすがにそれは自惚れかな）

僕は苦笑いを浮かべながらそう否定する。

「それでは、まずは君だ」

「は、はい！」

短めの青髪的女子がラファールに乗り込んだ。

「ISを操縦するのに必要なのは知識もそうだが、感覚だ。そして感覚やイメージは他人から教えるを乞うな！ 自分流のイメージを掴め『ドカーンと』と言うイメージでもいい」

「で、でもイメージは、教科書通りにやった方がいいんじゃない？」

僕の言葉に女子が反論した。

「確かにその通りだ。でなきゃ教科書の意味がない。だが、それはあくまで公式であり、個人差を考えていない。でなければ専用機ISはラファールか打鉄で事足りる。お前たちはいつも歩くのに足を

何センチ前に出し、膝は何度曲げると考えながら動かしてるのか？」

僕の言葉に全員が首を横に振った。

「そういう事だ。教科書通りも重要だがそれはあくまでもそこから先にはばたくための道具でしかない事を忘れないように。では、ISに乗ったら両手を動かして感触を確かめて、一通り準備が出来たら実際に所定コースを歩いて貰おう」

「あの、所定コースって？」

女子の質問に僕は地面に置いたIS用の近接ブレードを手にすると、そのまま地面に引きずるようにして歩く。

「これが所定コースだ。まあ、僕が先導して歩くから大丈夫だが」

「あ、IS用のブレードを簡単に……」

全員が啞然として僕が手にするブレードを見ていた。

「ほら！ とつととやる！！ 時間は無限じゃないんだよ！！」

「は、はい！！」

こうして実習は順調に進んで行った。

途中で一夏ของกลุ่มから歓声のようなものが聞こえた。

見れば一夏にお姫様抱っこされている箒の姿があった。

彼女もとても幸せそうだ。

（良かったな、箒）

ちなみに一番早く終わったのは、僕のグループだった。

箒Side

「い、一夏!」

「な、なんだ?」

私は一夏にお姫様抱っこと言われるものをされながらISに運ばれている私は、一夏にある頼みごとをすることにした。

「今日の昼には用があったりするのか?」

「いや、特には」

私は一夏の答えに思わず顔がゆるんでしまった。

「そうか。では、今日は私と一緒に食事をとるとしよう。うん、それがいい」

「おお、別にいいぜ」

(よし!)

私は嬉しくて心の中でガッツポーズをとった。

これで、少しでも一夏の気を引ければいいのだけど。でも、私は知らなかった。

この日の昼に、あのような目に合うとは……

Side out

鈴Side

「ふう……」

ISの実習を終えたあたしは、教室で着替えながら一息ついていた。

（一夏と一緒にやりたかったな）

あたしの悔いはただそれだけだった。

「織斑弟君、とっても良かったよねー」

「うん、とても分かりやすく教えてくれたし、まるで千冬様みたいなかつこよさだったよー」

（……何だ、正樹の事か）

あたしは正樹の事だと知るとほっとした。

これ以上ライバルが増えたら問題だもんね。

でも、あいつは前から人との付き合いが苦手な方だったから、皆に嫌われるような人じゃなくて良かった。

そんな事を思っている時だった。

「そ・れ・で、ね！　彼女がね一目惚れしちゃったのよ……ね？」
「う、うん」

「ッ！！？」

あたしは驚きのあまりに手に持っていた制服を落としてしまった。
あたしは落ち着いて、制服を拾いながらさりげなく一目ぼれした女子生徒を見てみた。

その子は長い黒色の髪にスラッとした体型の子だった。

名前は分からないけど、あたしから見ても美少女と言える成り立ちだった。

あたしは、正樹にそのことを告げるべきなのかを迷っていた。

(……………何やってんだろ、あたし)

あたしは自分の矛盾な感情に苦笑いを浮かべながら着替えるのであった。

あいつならきっと大丈夫だろうと考えながら。

S i d e o u t

「ふう、これで片付けは終了っつと」

「それじゃ、早く着替えてこようぜ」

同じくI Sを片付け終えた一夏が僕を誘ってきた。

「……………悪い、ちょっと忘れ物をしてきたから先に行ってくれん？」

「お、おう。次の授業に遅れるなよな」

一夏の言葉に『分かってる』と答えると、どこからともなく携帯を取り出してある場所に電話をかける。

「あ、代理の正樹です。少々お願いしたいことが……」

僕は電話であることを頼むと、電話を切った。

「……僕の推測が正しければ、出るはずだが……どうだろ」

僕の言葉に答える者は誰もいなく、僕は足早に更衣室へと向かうのであった。

第27話 IS実習（後書き）

次回は悲劇のお昼を。

そろそろもう一人の転校生の出番も近いです。

しつこいようですが、皆様のご感想をお待ちしております。

第28話 悲劇の昼休み（前書き）

何が悲劇かは、おそらく読んでもらえるところだと思います。

第28話 悲劇の昼休み

やってきました憩いの昼休み。

「なあ、正樹。これから用事とかあったりするか？」

「いや、無いけど……それがどうかしたのか？」

突然訪ねてくる一夏に、僕は首を傾げながら聞き返した。

「箒がな昼飯と一緒に食わないかって誘ってきたんだ。どうせなら人数が多い方が楽しいだろ？」

「……………」

僕はすぐに悟った。

箒が一夏と二人っきりで食べるのを希望していると。

「いや、僕はちょっと……………」

「遠慮なんてするなって。大丈夫、正樹が来たからって箒だって怒りはしないさ」

いや、僕だけと言うよりも誰かが来ることで怒るのでは？

その後も断ろうと必死に抵抗したが、結局は一夏に屈することになった。

（一夏って、本当にくだい）

人を決して見放さない……それが彼のいいところなのだが、こればかりは見放してほしかった。

その後、一夏はセシリアや鈴、シャルを誘って行った。

「どういう事だ？」

「大勢で食った方がうまいだろ？ それにシャルも転校してきたばっかりで右も左も分からないだろうし」

「そ、それはそうだが……」

箒はそう言うと、女性三人と無言で睨み合いを始めた。
きつと三人の間には火花が散っているのだろう。

「ええっと、本当に僕が同席してよかったのかな？」

「いやいや、男子同士仲良くしようぜ。それにこれからは部屋も一緒なんだし」

シャルの疑問に、一夏が笑顔で答えた。

今ほど兄貴を殴り飛ばしたいと思ったことはない。

「ありがとう。一夏って優しいね」

「ッ!!」

シャルが微笑むのを見た一夏は、若干ではあるが顔を赤くした。

「何照れてんのよ？ あんた」

「一夏、本気でお前はそっちの気があるんじゃないかと思われるぞ？」

それを見た鈴が一夏をジト目で睨みながら、言った。

まあ、僕の場合は彼が男ではない事を知ってはいるが、からかいも込めて言っちゃった。

「べ、別に照れてもないしそっちの気なんてない」

一夏の答えを聞いた鈴は膝に持っていた箱を開けた。
そこに入っていたのは……

「おお、酢豚だ！」

「そうよ、今朝作ったの。食べたいって言ってたでしょ？　これは正樹の分」

「ありがと」

一夏と僕は鈴の作る酢豚が大好きだったりもする。

「ゴホンッ！　一夏さん。私も今朝は偶々偶然早く目が覚めまして、こういうものを用意してみましたの」

そう言ってセシリアは、手にしていたバスケットのふたを開けた。

「イギリスにもおいしいものがあることを、納得していただきませんかとね」

その中には色とりどりのサンドイッチが入っていた。

「へえ、言うだけあるな。それじゃ、こっちから」

そして一夏は適当に選んだ卵サンドを口にした。

「ッ！？」

その瞬間、一夏の顔色が真っ青になった。

「いかが？　いくらでも召し上がってくださいってもかまいませんのよ？」

「い、いや…後でもらうよ」

一夏は苦笑いを浮かべながらそう答えた。

「だったら、僕がもらっちゃうよ？　それじゃあ、僕はトマトサンドを」

「あ、はい。召し上がってくださいね」

僕はトマトサンドを口に入れた。

「ッ！！？」

その瞬間、何とも言えない痛みが口の中に走った。
痛い、痛すぎる！！

「……………」

「正樹さん？」

「正樹？　どうしたの俯いたりして」

僕の様子に気づいたみんなが聞いてくる。

だが、僕にはそんなことに答えていられる余裕なんてなかった。

「み……」

『み？』

「みぎゃあああ！！！！」

僕は叫びながらひたすらに走って走って走りまくった。
口の中の痛みに悶え続けながら……

僕が気付いた時には、職員室の織斑先生の前に立っていた。
そしてたつぷりとお説教を食らう羽目になった。

何でも、ここに来るまでに、僕は壁や備品などのありとあらゆるもの貫くか壊すかしていたらしい。
と言うよりも、脆すぎないか？

「そうか、それは災難だったな。だが、反省文は書いて貰うぞ」
「……ひゃい」

僕はいまだ治らない舌のしびれで満足にしゃべれなかった。
あれだけの事をして反省文と言うのは寛大であろう。
まあ、それが50枚であると言うのを除けばだが。

「そう言えば、お前に渡すものがあつたな」
「はい？」

織斑先生は唐突にそう告げると、机の引き出しを開けて一通の封筒

を取り出した。

「なんでも『高月コーポレーション』と言う会社からの様だが……
…お前、何をした？」

「いえ、ちょっとした頼みごとを」

そう答えながら僕は封筒を受け取った。

高月コーポレーションについてはまた機会を改めて説明することにしよう。

そして僕は職員室を後にした。

僕は一人で食堂に移動していた。

「昼休みもあと10分。何も食べてないからおなかがすいたな……
…運よく手元にあるのはこれだけ」

僕はそう言って左手にある酢豚弁当を見た。

あの極限状態ですつと持っていたのはさすがと言うかなんというか
……

「早く食べよ………頂きます」

そして僕は酢豚弁当に舌鼓を打っていた。

「あ、そうだ。調査結果でも見るか」

僕はそばに置いておいた封筒を開けて二枚の紙を取り出した。
どうやらシャルの戸籍の様だ

「デュノア社の所属パイロットか」

一通り見てみたが何も不審なところは見つからなかったので、僕は
もう一枚の紙を見た。

「…………なるほどな。そういう事かよ」

それを見て僕はようやく事の真相が分かった。
そこにあったのは、シャルと瓜二つの名前が違う人物の戸籍だった。

「白黒はつきりつけさせてもらうぞ」

僕の言葉は、ほとんど人がいない食堂にかき消された。

第28話 悲劇の昼休み（後書き）

次回あたりで、シャルルとの一騎打ち（？）となります。

第29話 白黒

夜、僕たちは寮の部屋にいた。

そう言えば、部屋割りがどうなったかを言っていなかった。

シャルが転校してきたので、普通は僕が一夏が部屋を映らなければいけない。

だが、その普通と言うものがない教師がいた。

その教師のために二人部屋なはずなのに、シャルと一夏と僕の三人で生活する羽目になったのだ。

そして今僕たちはお茶を飲みながら寛いでいた。

ちなみに僕は一夏のベッドに腰掛けている。

「はあ……男同士っていいもんだな」

「紅茶とはずいぶん違うんだね。不思議な感じ……でもすごくおいしいよ」

おそらく初めて飲んだであろうお茶の感想を言うシャル。

出来る事なら、今後シャルがお茶嫌いにならない事を願いたい。

「一夏と正樹はいつも放課後にISの特訓してるって聞いたけど、そうなの？」

「ああ、俺はほかのみんなから遅れているからな」

「僕の場合は、少しでも鍛えておかないと有事の際に動けなくなるからね」

シャルの疑問に、一夏と僕は普通に答えた。

「僕も加わっていいかな？ 専用機を持ってるから役に立てると思うんだ」

「おう、ぜひ頼む」

シャルの申し出に、一夏は有難く頷いた。

「うん！ 任せてよ」

「……………」

「どうしたんだよ、正樹？」

僕が何も言わないのをおかしく思った一夏が、心配そうに聞いてきた。

「一夏、僕は冷たい飲み物が飲みたい。買ってきて」

「は？ どうしたんだよ、いきなり？」

僕は一夏の手に500円を突き付けて、何も答えない。

「……………分かったよ。お茶でいいよな？」

「ああ、あとなるべくゆっくり行くように。走ると鬼教官に怒られるからな」

僕の言葉に、一夏は首を傾げながら部屋を後にした。

「さて、少し話でもしようか」

「う、うん」

シャルがためらいながら頷いた。
さて、白黒つけさせてもらおう。

「そう言えばシャルには兄妹とか居た？」

「ううん。僕には兄妹なんていないよ。正樹は一夏がいるけど、やっぱり楽しいの？」

僕の問いかけに答えるシャル。

この時点で、僕はもうすでに逃げ道を塞いでいたのだ。

「そんなことはないさ。一夏の女難がこっちにまで来るもんだから、それが嫌で嫌で仕方ないし時たまあんなのが兄だと思いたくなくなることもあるさ」

「でも、その割には仲がよさそうだよね」

シャルから鋭い指摘が入った。

これこそが、僕たち兄弟を複雑なものにさせる要因の一つなのだ。

「まあね。時には僕が弟として、兄として立ち位置を変えているからな。簡単に言うとお互いの足りない部分を補い合っている関係なんだ。だから大げさに言えば、僕と一夏の二人がそろってようやく一人になるんだ」

「そうなんだ。でも、何だかうらやましいよね。そう言うのって」

シャルがくすくすと静かに笑った。

僕は、少々話すぎたかなと、反省しつつシャルに見えないように愛刀”無銘刀”を取り出す。

「ところで、”シャロット”」

「何かな、正————ッ！！」

僕の鎌にまんまと引っかかったシャル。
そんな彼女の首に刀を突き付ける。

「ようやくぼろを出したな。スパイさんよ？」
「ど、どうして……」

シャルロットが僕に疑問を突き付けてきた。

「この僕の目を騙せるとでも？ お前が女であるのは最初に見た時に気付いた。その後握手をしたよな？ あの時に確証したんだ」
「そんなに早く気づいたんだ」

シャルロットは一步も動かない。
と言うより一ミリも動かさせない。

今首筋には刀があるのだ。
動けばどうなるかは彼女も重々承知しているはずだ。

「まあ、気づいてるのは僕ぐらいだ。僕には昔からちょっとした普通の人にはない能力があるからね。それにしても、君も実に愉快な事をしてくれたものだ」

「……………」

「お前の目的なんて見当がつく。当ててやろうか？ お前が来たのは僕と一夏のISのデータを盗むため。そしてデュノア社の広告塔だ」

「ッー！」

僕の推測に、シャルロットが息をのんだ。
どうやらあたりのようだ。

「今巷を騒がしている、男のIS操縦者。しかしそこに三人目の男

の操縦者が現れ、しかもその人物がデュノア社の物であることが分かれれば、一気に注目が集まる。そう言った所だろ」

「す、すごいね。どうしてそこまで」

シャルロットが僕に理由を聞いてくるが、僕にはそれに悠著に答えていられる時間はなかった。

「悪いが、ネタ晴らしはここまでだ。今度はこっちから聞かせて貰おう。僕の質問にYESかNOで答える。嘘をつけばどうなるのか……それはお前なら十分わかるはずだ」

「……………」

彼女の両手がかすかにだが震えているのが見えた。

さすがにかわいそうかと思ったが、”敵”かもしれない人物に情はかけられない。

なので、僕も気を切り替えた。

「では、最初の質問だ。今まで我が言っていた言葉……これに相違はないな？」

「う、うん」

ついつい一人称が変わってしまったが、彼女が頷いたのを確認して次の質問に移った。

「では、お前は織斑一夏、織斑千冬、篠ノ之束達に危害を加わえる意志はあるのか？」

「な、ないよ!？」

私の問いかけに、シャルロットは必死に首を横に振る。

「…………その言葉に嘘はないな？ お前のISや命にかけても誓えるか？」

「ち、誓うよ」

我はその言葉を聞いて、それが本心からだとなると刀を下した。

「ふう……」

僕は息を吐いて、緊張感を緩めた。

そしてシャルロットはゆらゆらと地面にへたり込んだ。

「ちょっとやりすぎたな。悪かった」

「あ、ありがとう」

シャルロットは疲れ果てながらも無理やり笑顔でお礼を言った。

「そうだ。軽くネタ晴らしをしてあげる」

「へ？」

驚いている彼女をよそに、僕はカバンの中から前に受け取った封筒を手渡した。

「こ、これってフランス側がトップシークレットにしてるやつだよ！？」

「そんなもの、僕のバックにいる組織にとっては朝飯前だ。それのおかげで僕はお前が身分を偽って来ていることを知った。シャルルでの戸籍データが作られたのが最近であること、そしてあんたには兄弟がいらないという事がこれをさらに決定づけたんだ」

どうやって知ったのか？ と聞きたそうな表情を浮かべているので、

組織名の方はぼかして答えた。

「すごいね、正樹って」

「褒めても何も出ないよ。まあ、お前が女であることは誰にも言わないでおくよ」

「ありがとう」

僕の言葉に、ゆっくりと立ち上がってお礼を言ってきたシャルロットに僕はこう告げた。

「お礼を言われる筋合いはない。言っておくが、僕はお前が生きようが死のうが掴まろうがどうなろうが関係ない。僕はただ一夏たちに危害が及ばなければそれでいい」

「……………」

僕の言葉に、一気に部屋の雰囲気が悪くなった。

「戻ったぞ……って、どうしたんだよ、そんなに怖い顔して」

「いや、一夏の恥ずかしいことを色々とな。それは昔、一夏が――
――」

僕は慌てて言うもの笑顔を作っておりもしない事を云った。

「ま、正樹！？ 一体シャルに何を話そうとしてる！！」

「いや、小学生の時のクリスマスの夜の事を話そうかと」

ちなみに、この話は一夏の中では最も禁句な話とされている。

「言うな！！ それだけは言わないでくれ！！」

なので、この話をする和一夏が土下座交じりで止めてくるのだ。

「まあ、そこまで言うのならやめてやってもいい」

「ぐッ！　だったらお前は小学生のころ女子からラブレターばかりもらってたじゃないかよ！！」

一夏の反撃にも似た暴露に、一気に部屋の温度が下がった。

「一夏」

「な、なんだ？」

僕の言葉に、一夏が若干慌てながら答える。

「それはお前が仕組んだことだろ？　ラブレターを送った奴らに尋問をして——ゴホンッ！　お話を聞いたら言ってくれたぞ？」

「…………やめようか」

「そうだな」

一夏の提案に、僕は賛同した。

ちなみに、ラブレターと言うのは小学生の時に女子数人からラブレターを渡されたと言うものだ。

しかも彼女たちは、本気ではなかったらしく、僕の追究に首謀者は一夏であることを自供した。

その足で一夏を問い詰めると、どうやら僕の人付き合いのなさを心配したが故の行動だったらしい。

僕にしてみたら、有難迷惑だが。

「ところで、話について行けずに戸惑っているものがあるんだが……」

「あゝ、分かんなくていいと思うぜ。そう言う事でシャル、正樹が話したことは覚えてなくていいぞ。と言うより忘れてくれ!!」

「う、うん」

一夏のすごい剣幕での言葉に、シャルロットは苦笑いを浮かべながら頷いた。

「もう、寝るか」

「そうだな」

「そうだね」

一夏の提案に、僕とシャルロットは頷いた。

「ああ、僕は一夏のベッドの横の地面で寝るから」

「え、大丈夫?」

僕の言葉に、シャルロットが心配そうに聞いてきた。

これも彼女の優しさなのか、もしくは演技なのか……まあいいか。

「大丈夫だ。こういうのは慣れてるし明日は一夏が地面で寝るんだから」

「そ、そうなんだ」

「それじゃ、明かり消すな」

スイッチの方に立っている一夏がそう告げてきた。

「うん」

「了解」

僕はそれぞれの寝る場所に着いた。

その後すぐに、明かりが消え敷居に置かれているライトのみが部屋を照らしていた。

「お休み」

「う、うん。お休み」

そんな言葉を聞きながら、僕の意識は深い闇へと落ちて行っった。

シャルロットSide

「……………」

私……僕はなかなか寝付けなかったので、正樹の事を考えていました。

正樹には僕がここに来た理由はお見通しでした。しかも僕が男ではない事もすぐに見破っていた。

（どっちが、本当の正樹なんだろう？）

僕を迫及するときの怖い顔、そして一夏たちと話している時の顔。僕にはどっちが本当の正樹なのかがよく分かりませんでした。

「……………寝よ」

そして僕は眠りにつきました。

S
i
d
e

o
u
t

第29話 白黒（後書き）

もう何を書いているんだか自分でもわからなくなってしまいました。
まあ、これでも一応大丈夫ですよ、ね？

第30話 新たな転校生現る（前書き）

今回でようやくの30話。

しかし短めです。

そして、いよいよあの人物が登場します。

第30話 新たな転校生現る

翌日のH R、教室内ではどよめきが走っていた。

その原因は、今僕たちの前に立っている人物のせいだろう。

「ええっと、今日も嬉しいお知らせがあります。また一人、新しいお友達が増えました」

山田先生が若干戸惑い気味に話し始めた。

その横に立っているのは長い銀髪に眼帯のようなもので左目を覆っていて、いかにも怖い雰囲気醸し出す少女だった。

「ドイツから来た転校生の、ラウラ・ボーデヴィツヒさんです」

未だに目を閉じている転校生にクラス中がざわついた。

「み、皆さんお静かに！ まだ自己紹介が終わっていませんから」

「挨拶をしろ、ラウラ」

それまで静かに流れを見守っていた織斑先生が口を開いた。

「はい、教官」

それまで何にも興味を示さず、目を閉じているだけの少女が織斑先生の指示を聞いたとたん背筋を正した。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

ものすごく分かりやすいが、もう少し何か言ってもいいのではない

かと思えるほどの自己紹介だった。

「……………あ、あの以上……………ですか？」

「以上だ」

山田先生の尋ねかけに、彼女は簡潔に答えた。

「貴様が……………」

すると、突然少女……………ボーデヴィツヒは怒りの表情を浮かべて一方を見た。

その視線の先には、一夏がいた。

それを確認している最中、ボーデヴィツヒはゆっくりと歩き出した。

（やばい！！！）

僕はそう思うや否や席を立ちあがり、一夏の襟首を掴んで後ろに引っ張った。

その瞬間、風を切る音がした。

「ぐえ！？」

一夏のうめき声もだが。

ちなみに風を切ったのは、ボーデヴィツヒの手だった。

あと少しでも遅かったら、完全にビンタされていただろう。

「織斑一夏、私は認めない。貴様があの人の弟であるなど認める者か！」

「……………あのさ」

僕は冷静に声を出した。

「お前は織斑先生の何だ？ 義理の妹か？ それとも母親か？ 赤の他人である小娘に認めてもらう筋合いはないな」

「貴様……」

僕の言葉を聞いたボーデヴィツヒが素早く足に手を伸ばしたかと思った瞬間、ものすごい速さでこっちに迫ってきた。

「ッぐ!!」

次の瞬間、ボーデヴィツヒはもといた場所に飛ばされていた。クラスメイトや山田先生も何があったか理解できなかったようだ。

「やれやれ……ドイツでは、男を見たら引っ叩いたり、ナイフで切り刻めと教わっているのか？」

「お、織斑弟君……」

「正樹、血が……」

先生たちが、僕の握りしめられている左手から赤い液体が流れているのを見て、慌てていた。

僕がやったのは、ナイフを手にとってきたボーデヴィツヒを、ナイフの刃をへし折りながら吹き飛ばしたのだ。もちろんちゃんと手加減はした。

これも今までの経験のおかげで見破れたが、もし少しでも見破るのが遅ければ、左手に握られているナイフの餌食となっていただろう。

「これは、返そう。僕が持っても宝の持ち腐れだし、な！」

僕は折れたナイフの刃をボーデヴィツヒの横側に向けて放った。今、ものすごくいい音を立てて黒板に突き刺さった。

「織斑正樹、貴様も私は認めない。あの人の弟であることを私は許さない！」

彼女は、そう捨て台詞を吐くと、自分の席に歩いて行った。

「まったく、余計な怪我をさせるなよな」

僕はポケットから白地のハンカチを取り出すと、それを左手にまきつけて固く結んだ。

「お、織斑弟君、大丈夫ですか？」

「大丈夫ですので、授業を始めてください」

僕の答えで、今日の授業が幕を開けた。

やれやれ、本当に勘弁してくれよ。

しかし、僕はこれがこの先に訪れる事件の序章に過ぎなかったと言う事を、この時にはまだ予想だにもしていなかった。

第31話 模擬戦と一悶着（前書き）

投稿が遅れてすみません。

第31話 模擬戦と一悶着

ボーデヴィツヒが転校してきた日の放課後、僕たちはISの特訓をしていた。

「こう、ズバーン！ とやってから、ガキーン！ ドカーン！ と言う感じだ！」

「何となくわかるでしょ？ 感覚よ感覚……はあ？！ なんてわからないのよ！ 馬鹿！」

「防御の時は右半身を斜め上45度に前方に5度、回避の時は後方に20度ですわ！」

全員がイメージを教えているようだが、何を言っているのかが分からなかった。

「率直に言わせてもらおう。全然わからん！」

「なぜわからん！」

「ちゃんと聞きなさいよちゃんと！」

「もう一度説明して差し上げますわ！」

一夏の言葉を聞いて、三人は再び説明を始めようとしていた。

「一夏、お前のスタンスが間違っているんだ」

「どういう意味だ？」

あまりにも見ていられたなかったので、僕は一夏に本当の事を話すことにした。

「三人の言っていることはある意味正解だと言う事だ」

「だから……」

「要するに一夏。自分でイメージを考えろって言ってんだよ」
「……………」

僕の言葉に、一夏が固まった。

「大体、他人のイメージが分かるわけないでしょうが。セシリアのように几帳面に一つの工程を数式化してやっているようなものもいれば、鈴のように大雑把なイメージをしている人もいるんだし」

「あ、あたしは大雑把じゃないわよ!!」

鈴がある意味的外れな反論をしてくる。

「へえ……だったら前に再会した時に上着のポケットにあった、ぐしゃぐしゃになった紙はどう説明——」

「だー!!!? 言うな! 言うなあ!!」

僕の言葉を遮って鈴が制止した。

「だったら何で教えてくれなかったんだよ!!」

「いや、言おう言おうと思ってただけど、言ったら地獄を見そうなほどの執念で教えている人がいたから中々ね。ごめんね?」

僕は最後に一夏に謝った。

とはいっても、本当に怖かったのだから仕方がない。
そんな時だった。

「一夏、正樹」

「ん?」

突然僕たちを呼ぶ声がしたので、振り向くと、そこにはオレンジ色のISに乗っているシャルロットがいた。

「ちょっと相手してくれる？ 白式と神無月と戦ってみたいんだ」

「シャルル！ 分かった……と言うわけだから、また後でな」

シャルロットの頼みごとを快く引き受けた一夏に三人はむすっとした表情で一夏を見ていた。

「そうだね、僕もちょっと試したい新技がいくつかからぜひお願いしようかな」

僕も、みすみす相手にISのデータを渡すと言うのは嫌だが、新技の検証のために引き受けた。

「ありがとう、二人とも」

「それほどでもない。まずは一夏、お前とシャルとで」

「おう！」

僕の言葉に、一夏は片手をあげて頷くと、シャルロットと対峙した。

アリーナにいた女子たちもこの戦いを見ていた。

「じゃ、行くよ一夏」

「おう！」

そしてシャルロット対一夏の模擬戦が幕を開けた。

IS〱破門されし者〱

第31話 「模擬戦と一悶着」

「くっそー！」

一夏が悔しそうにつぶやく。

結果は見事一夏の惨敗。

シャルの素早い軌道に翻弄され、最後はアサルトライフルを何発も喰らって負けていた。

「防ぐんなら避けるよ」

まさにその一言だった。

「次は、正樹だね」

「休まなくていいのか？」

僕は連戦になるために、少々心配になりシャルロットに尋ねた。

「大丈夫。僕は疲れてないから」

「ぐう！！」

シャルロットの言葉に、一夏が完全に折れた。

今の一言は言い方を変えると”それほど苦戦しなかった”となってしまうのを知っているのだろうか？

まあ、その通りだが。

「あー、箒たち、悪いけどそこにいる突撃馬鹿の事よろしく」

「分かった（りましたわ）（わ）」

地面で落ち込む一夏を鈴たちが引っ張って行った。

「さて、大層な自信のようだが、それを敗因にするなよ？」
「分かってる」

そして僕とシャルロットは向かい合った。
戦いの中に男女なんてものは存在しない。
いつでも真剣勝負だ。

「じゃ、行くよ正樹」

「ああ、掛かってこい!!」

僕はすでに展開してある神無月の情報を見て、驚きを通り越してため息が出た。

シールドエネルギーが99999、武装は破滅の剣（劣）、破滅の剣（真）、盾、そしてなぜかライフル銃があった。

（あの人、絶対に悪乗りしただろ）

そう思いながら、シャルロットから浴びせられる銃撃を交わしつつ僕は左手に盾、右手には破滅の剣（真）を展開する。

（なっ!?! シールドエネルギーが!）

展開するのと同時にシールドエネルギーが目まぐるしい速度で減少していく。

その勢いはわずか数十秒で97000まで減ってしまうほどだ。
僕は慌てて破滅の剣（劣）を展開する。
すると、シールドエネルギーの減少は止まった。

（どうやらこっちの方は大丈夫そうだ。あとは攻撃してどのくらい

減少するかだな。しかしまずは…)

僕は思考を切り替える。

今の状況は空中から地面にいる僕を、ひたすらに撃っているシャルロット。

しかもその狙撃は正確だ。

今も何とかギリギリで躲すが、躲し切れないものもありそれは盾で防ぐがシールドエネルギーが、かすかにではあるが削られていた。

(だったら!)

「瞬時加速!」

僕は瞬時加速で上空に急浮上し、再度瞬時加速をするとシャルロットの背後に回り込む。

「はあ!!」

「ッ!!!」

完全に隙を狙った僕の一撃を、シャルロットはぎりぎりで躲すとアサルトライフルを装備してこっちに向けて撃ってくる。

「なるほど、さすがは代表候補性だ」

動きに無駄がない。

だが……

「所詮は、そこまでだ! ガナー!!」

僕はガナーに指示を送り4機の剣状のビットを放つ。

それはラファール・リヴァイブを大きくそれるように向かって行く。

「何処を狙って……ッ!!?」

その為にシャルロットはその場に留まるが、それが間違いだ。

「引かなかったな。この勝負、一気に終わらせてもらおうぞ!!」

僕はそう叫ぶと、破滅の剣（真）を展開する。

やはりシールドエネルギーが減少を始めた。

「行くぞ!」

僕は瞬時加速でシャルロットの目の前まで迫ると、剣を振り上げてシャルロットを上空に抛り飛ばす。

「己の!」

「ッぐ!」

身動きを封じられ、地面に落ちるシャルロットに下から突き刺すように剣で攻撃して再び下の方に移動する。

「罪を!」

そしてまた突き刺すように攻撃を加える。

「理解しろ!!」

そして先ほどと同じように突き刺すように攻撃を加えると、次はシ

ヤルロットの上空に移動した。

「その罪、この剣で断ち切る！」

僕の手には一回りも大きくなった、赤く光り輝く破滅の剣があった。

「ッ！！」

シャルロットはどうなるかが分かったのか目を閉じた。

「断罪！！」

そして僕はそれを一気に振り下ろした。

「強いんだね、正樹は」

「いや、それほどでもないが大丈夫か」

僕達はピットにいた。

「ホント、俺でも負けたのに」

「お前の場合の特攻するからだ」

一夏の言葉に、僕は一刀両断した。

「でもほんとにすごいね、正樹のIS」

「すぐくはない。逆に扱い辛くて困っているほどだ」

破滅の剣も真を出すとシールドエネルギーが減って行ったりするのは、困り者だ。

まあ、機動力等は前よりもよくなってるが。

「でも、なんで俺は負けたんだ？」

一夏はいまだ敗因を理解できていなかったようだ。

「つまりね、一夏が勝てないのは単純に射撃武器の特性を、把握してないからだよ」

「うーん、一応理解はしているつもりだが」

シャルロットの説明に、一夏は首をひねっていた。

「この白式って後付装置イコライザーがないんだよね？」

「ああ、なんでも拡張領域バースロットが開いてないらしい」

シャルロットの疑問に、一夏が答える。

ちなみに後付装置と言うのは、最初からついている武装に、追加して装備する武器の事だ。

そして拡張領域は武器のデータを保存する物だと思って欲しい。
僕も詳しくは知らない。

「たぶんだけれど、それって単一仕様能力の方に容量を使ってるからだよ」

「ワンオフ？」

シャルロットの単語に一夏が首を傾げた。

「ISが操縦者と最高の状態になった時に自然発生する能力。白式の場合、零落白夜がそれかな？」

「はあ。なるほど、お前の説明ってわかりやすいな」

一夏が笑顔で頷いていたが、その後ろでジト目でつぶやく人がいたが、気にしないでおこう。

「零落白夜って、シールドエネルギーまで攻撃に使うめっちゃくちゃな奴だぜ？」

「うーん、織斑先生が使っていた能力だね。兄弟だからって同じ技を使えるなんてことはないはずなんだけど」

シャルロットの疑問は正しい。

普通はありえない。

だが、それを可能にする科学者が一人いるが。

「それにしても、不思議なのは正樹のIS、神無月だね」

そして話は僕の方に移った。

「後付装置は白式と同じようないんだよね？」

「ああ、一夏のと違うのは拡張領域が9割以上開いているところだけだ」

そう、僕のISは白式とは大きく違っていた。
拡張領域が大量に空いていると言うことは、それだけ武器を増やす
ことが出来るのだ。

「でも、単一仕様能力は分からないんだよね？」

「いや、分かるよ。と言うより既に発生してるし」

「「え!？」」

僕の言葉に、一夏とシャルロットが驚きをあらわにした。

「正樹のワンオフって何？」

「……………僕のワンオフは写し身の鏡だ」

「なんだ、それ？」

意味が分からない様子の一夏が疑問を投げかけてくる。

「シャル、ちょっと失礼」

「え？」

僕はシャルロットに一言断って、肩を軽くたたいた。

「そして……………」

僕は頭の中で、シャルロットの持っていた武器を思い出して呼び出す。

「それって、僕のアサルトライフルだね？ どうして……………って、
もしかして」

シャルロットはこのワンオフの効果が分かったのか目を見開かせて

いた。

「お、おいどういふ事だよ！」

「つまり、先のように触れたISの武装データをまねてこっちでも使えるようにすることが出来るんだ」

僕は一夏にわかりやすいように説明した。

「それって、かなりずるいだろ！！」

「まあ、保有量に制限がないからそうだろうな。でも、まねた武器は全てオリジナルよりは劣るし、一度使ったら展開することはできないし、一機中真似られる武器は一つだけだからあまり意味がないんだよね」

僕は苦笑い交じりに呟いていた。

「お前、一体どのくらいの武器をまねてきたんだ？」

「えっと、セシリアの武装と一夏の雪片二型だけだよ。そんなにISに触れる機会なんてないし」

その後、僕たちはアリーナの方に移動する。

「じゃあ、ちょっと練習してみよう。まずは正樹からね」

「了解」

目の前にあるのは7枚のターゲット。

僕はライフル銃を展開すると、それを構えた。

「銃なんてここんところ使った事ないから、うまくできるかは分からないけど……………」

僕はそう呟いて、昔を思い出しながらターゲットに向けて撃っている。

「79点………すごいよ、なかなかの射撃制度だね」

「まだまだだよ————ツとと！」

僕はライフル銃をしまいながら答えていると、不意に体がふらついた。

「だ、大丈夫!？」

「大丈夫か、正樹！」

その様子を見ていた正樹とシャルロットが心配そうに駆け寄ってくれた。

「悪い、なんだか疲れちゃったから、先に戻るね。一夏、ベッド使わせてもらうよ」

「あ、ああ。気を付けてな」

僕は一夏にそう告げると、そのままふらつきながらも出口の方へと歩いていく。

（ここんところ、一夏の中に入ってなかったから疲れがたまったのかな？）

僕は戻ったらシャルロットの目を盗んで、中に入ろうと考えていた。

（何だ？ やけに周りがうるさいな）

僕は先ほどから聞こえてくる声に嫌悪感を示していた。

「正樹！！ 避けるお！！！」

「ッ！！？」

一夏の叫び声に、朦朧としていた意識が一瞬でクリアになる。

そして、背後から何かが迫る気配に、慌てて振り返るとそこにあつたのは……………

僕に迫ってくる弾丸だった。

「やばっ！！」

僕は何とか避けようと左に回避したが、それがまずかった。

「……………！！！！？」

何かが体を貫くような痛みが走ったかと思うと、僕はアリーナの壁まで吹き飛ばされていた。

（なるほど……………な）

僕はすぐに何があつたか理解した。

弾丸が僕を貫いたのだ。

そして、その攻撃を放ったのは……………

「やってくれる……………な。小娘」

ラウラ・ボーデヴィツヒだった。

そして僕の意識は闇へと落ちた。

一夏Side

一通り射撃の練習をした俺は、突然聞こえてきた声の方を見た。そこにあっただのは、黒一色の物々しい雰囲気漂わすISだった。そして、その操縦者は朝、俺を引っ叩こうとしたり正樹に怪我を負わせたラウラだった。

「織斑一夏」

「何だよ？」

俺は、シャルに銃を渡しながら返事をした。

「貴様も専用機もちらしいな。ならば話が早い。私と戦え」

「嫌だ。理由がねえよ」

「貴様になくても、私にはある」

俺の答えをバツサリと切り捨てる。

やっぱり、ラウラが俺達にあの様な事を言ったのは……

「今でなくてもいいだろ？　もうすぐクラス対抗戦リーグマッチなんだから、その時で」

「そうか、ならば」

ラウラは、そう言う方にある大きな何かを俺とは違う方に向けた。

(何やってんだ? あいつ)

俺は一瞬疑問に思ったが、それはすぐに理解した。

「織斑弟君!! 危ないよ!!」

「逃げて!!」

見学をしていた人たちが、一気に叫んでいた。

(まさか!!)

俺は、ラウラの見る視線の先を辿った。

そこにいたのは、ふらつく足取りで歩いている正樹だった。

しかも周りの声に気付いていない。

その瞬間、ラウラが砲撃を放つ。

それは寸分たがわず正樹の元へと向かう。

「正樹!! 避けろお!!」

俺は正樹に大きな声で叫んだ。

すると、俺の声に気付いたのか慌てて振り返った。

「やばっ!!」

正樹は何とか避けようと左に回避した。
しかし……

「-----!!?」

「正樹!!」

正樹はラウラの放った弾丸によって体を貫かれ、壁に叩き付けられた。

「何するんだ!! あいつはISを展開していないんだぞ!!」

「ふん、お前が理由が欲しいと言うから作ってやったまでだ」

俺の怒鳴り声に、さも感謝しろと言わんばかりの表情で言うラウラ。

「それに、ISも展開できない様な雑魚だ、これで少しは役にでも立ったのではないか？」

「てめえ!!!!」

俺は怒りのままに雪片二型を手にはラウラに飛びかかって行った。

俺は、許せなかった。

俺の家族を、傷つけるラウラが。

『そこの生徒! 何をやっている!!』

アリーナ内に教師の怒鳴り声が響き渡った。

どうやら騒ぎを聞きつけて担当の人が来たようだ。

「……ふん、今日の所は引いてやろう」

ラウラは、ISを解除すると、そのまま去って行った。

「正樹!!」

「正樹さん!!」

俺達は、慌てて撃たれた正樹の方へと駆け寄る。

「だいじょうぶ。まだ息はしてる！」

「誰か、保健室に」

「俺が運ぶ！！」

俺は正樹を担ぐと、急いで保健室へと向かったのであった。

S i d e o u t

第32話 後悔

一夏Side

「失礼します」

俺は正樹を見てもらい、保健室を後にした。

「一夏、正樹は？」

「一夏さん、正樹さんは？」

外に出ると、シャルル達が心配そうに聞いてきた。

「軽い打撲らしい」

「良かった……」

俺の言葉に、全員が安心したような表情をする。

「ありがとな」

俺は正樹の事を心配してくれたみんなに頭を下げてお礼を言った。

「一夏が謝ることはない」

「そうよ。それにしてもあのドイツに代表候補生、許せない！」

「そうですね、ISを装備してもいない正樹さんを狙うだなんて、同じ代表候補生として信じられませんわ」

鈴とセシリアが怒り心頭で、ラウラの事を話していた。

「それじゃ、俺は着替えてくるな」

「あ、僕も行くよ」

俺は話を切り上げるべく、話題を強引に変えるところを立ち去った。

同じ男子のシャルルも一緒についてくる。

俺は眠っている正樹を背負って更衣室へと向かった。

IS 〱 破門されし者 〱 第32話「後悔」

「一夏、大丈夫？」

「ああ心配かけて悪かったなシャルル」

俺はシャルルに謝ると、IS スーツを脱ぎ始めた。

「じゃあ、僕は先に部屋に戻ってるね」

「え？　ここでシャワー浴びていけないのか？　お前いつもそうだよな」

俺はIS スーツの上に制服を着ているシャルルを見て、そう告げた。

「え？」

俺の言葉に、シャルルは表情がこわばった。

「なんで俺と着替えるのを嫌がんだよ？」

「べ、別にそんなことはないと思うけど」

俺の疑問にシャルルは慌てた様子で答える。

「そんなことあるだろ？ たまには一緒に着替えようぜ」

「い、いやあ」

「そうつれないこと言うなって」

俺はシャルルの方を捕まえて話した。

「ッ！！ うわああああ！！！！」

「あ、シャルル？！」

するとシャルルは突然俺の手を振り払って、カバンを片手に悲鳴を上げながら逃げるように去って行った。

「……………何だ？」

俺は何が何だかわからなかった。

「誰だって……………あんなことをされれば……………悲鳴を上げて逃げる、ぞ」

「ッ！？ 正樹！！」

俺の疑問に答えたのは、正樹だった。

俺は慌てて正樹が横たわっているベンチの方に駆け寄る。

正樹は苦しげだがゆっくりと起き上っていた。

「大丈夫か？」

「ああ、大丈夫。……………心配かけて悪かったな」

俺の問いかけに答えると、正樹はふらつく足取りでロッカーへと向かうと制服に着替え始めた。

それにならって俺も着替え始める。

「体の方は、もう大丈夫。一夏の体力をほとんど使って肉体の再生とかやったから、後は今夜一夏の中に入って寝れば完治」

「……………そうか」

俺はほっと安心した。

正樹が撃たれた時、俺の方には痛みが来なかった。おそらく正樹がリンクを切っていたのだろう。

「ごめんね、一夏の体力を無駄に使っちゃって」

「そんなこと気にするなって。俺達は家族じゃねえか」

「家族、か……………そうだったね」

俺の言葉に、正樹は静かに呟いていた。

寮に向かう途中、俺は着替え終えて再び意識を失った正樹を背負っていた。

「……………」

『織斑一夏、私は認めない。貴様があの人の弟であるなど認める者か！』

その道中、どうしてもラウラの一言を思い出してしまう。

「答えてください、教官！！ なぜこんな所で！！」

そんな時不意に声が聞こえ、その方向を見る。

「何度も言わせるな……私には私の役目がある……それだけだ」

そこにいたのは、千冬姉とラウラだった。

俺は慌てて近くの氣に隠れて様子を伺った。

「こんな極東の地で、何の役目があるというのですか！！ お願いです教官……再び我がドイツで再びご指導を！！ ここでは貴女
の能力は、半分も活かされません！！」

「ほう………」

ラウラの叫びに千冬姉はどういう意味なのかと聞くように返した。

「大体、この学園の生徒など教官が教えるに足る人間ではありませんせん！！ 危機感に疎く、ISをファッションか何かと勘違いしている！！」

ラウラは、千冬姉にドイツに戻るように迫っているようだった。

「そのようなものたちに教官が時間を割かれるなど……」
「そこまですておけよ、小娘。」

千冬姉がラウラの言葉を遮った。

「少し見ない間に偉くなったな？ 15歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

千冬姉の言葉から、怒りが感じ取れた。

「わ、私は——」

「寮に戻れ。私は忙しい」

「ッ！！」

千冬姉の言葉を聞いたラウラは、そのまま走り去って行った。
俺は、その場から動くことはできなかった。

「その男子、盗み聞きか？ 異常性癖は感心しないぞ」

「な、なんでそうなるんだよ！ 千冬姉！！」

「学校では織斑先生と呼べ」

俺の言葉に、千冬姉が注意する。

「は、はい……………」

「下らんことでもしている暇があったら、自主訓練でもしろ。このままでは、月末のトーナメントで初戦敗退だぞ」

「分かってるって！」

千冬姉の言葉に、俺は反論した。

そうだ、そう遠くない日には学年対抗戦があるんだ。

そこではラウラと当たるはずだ。

今は練習するしかない。

「そうか、ならいい」

「なあ、待ってくれ」

俺は、去って行こうとする千冬姉を引き留めた。

「さっきの……ラウラってやつが言ってた俺の事……千冬姉の弟とは認めないって、それってやっぱり俺の性で千冬姉が二度目の優勝を逃したことを――」

「終わったことだ、お前が気に病む必要はない」

俺の言葉を遮って千冬姉が言った。

「ところで、正樹に何があったのだ？」

俺の背中に背負わられている正樹をみて、千冬姉が聞いてきた。
もう千冬姉には、何かが起こったとわかっているのだ。

「実は……」

俺は、素直に放課後にあった事を話した。

「……………そうか」

「一夏、降ろして」

その時、背中で眠っているはずの正樹が突然そう言ってきた。

「正樹……！ 起きてたのか？」

「まあね。あの小娘と姉さんと言い合っている時から起きてたよ」

正樹が千冬姉の事を姉さんと呼んだ。
それは教師としてではなく家族としてだろう。
俺はゆっくり正樹を地面に降ろした。

「大丈夫なのか？ 正樹」

「…………一夏から体力を補給したから、日常生活を送れるほどには」

どうやら、俺が背負っている間に体力を強引に取り込んだらしい。
道理で前より重く感じるはずだ。

「…………兄貴、姉さん」

「何だ？」

いつもよりも力ない声色で呼ばれたので、正樹の方を見るといつも
の明るさは消えていて、まるで夜のように暗く思いつめているよう
だった。

「ごめんね」

一言だけ言うと、正樹は寮とは逆の方向へと歩いて行こうとした。

「正樹!!」

「ちょっと風に当たるだけだよ、夕食までには戻るから」

そう告げると、正樹は去って行った。

「…………ではな」

千冬姉も、いつにもましてこわばった表情のまま去って行った。

そして、俺も寮へと向かう。

「あの事件から、俺達のなにかもは変わっちゃったんだよな」

俺は昔の事を思い出しながら、部屋へと戻るのであった。

S
i
d
e

o
u
t

第32話 後悔（後書き）

次回はいよいよ一夏達の過去編となります

第33話 すべてが変わった日（前書き）

一夏達の過去編となります。
かなり暗いです。

第33話　すべてが変わった日

一夏Side

それは忘れもしない中学一年のある日のこと。

「あー、今日も一日が終わった」

「ホントだな」

正樹の言葉に、俺は適当に反した。

正樹の場合は学校が終わるといつもこの通りになるからもう慣れっこだ。

「あ、そうだ。一夏、お金貸して」

「はあ？　お前またチーズケーキに使っただろ……」

正樹からの前借に、俺はため息交じりに答えた。

正樹は無類のチーズケーキ好きだ。

その為、新発売のチーズ系列の食べ物があればすぐに買ってしまうので、お小遣いを使い果たすことがよくあるのだ。

「今日はこれがあってどうしても外せないんだ」

「何々……『チーズケーキフェスティバル』？　一袋300円で詰め放題か……分かった、だけど来月のお小遣いから引いとくからな？」

俺の言葉に、正樹は元気よく返事をする、そのままご機嫌に歩いて行った。

俺もその後続く。

こんな日常が今日で終わるなどと思わずに。

IS 破門されし者 第33話 「全てが変わった日」

「いやいや大量大量♪」

俺の横を軽快に歩く正樹の手には、大量に詰め込まれたチーズケーキがあった。

「なあ、後で一つ分けてくれないか？」
「だゝめ♪」

これまたにこやかに言う正樹。
そのあまりの無邪気さに、俺も反論することはできなかった。
そんな時だった。

「織斑一夏と、織斑正樹だな？」
「そうですけど」
「何か用ですか？」

突然出てきた黒服に黒いサングラスをかけた怪しい男たちに、俺達は警戒しながら答えた。

「ッ！！？」

その瞬間、俺と正樹は強引に車に乗せられた。
その際にハンカチのようなもので口元を覆われ、俺の意識はそこで途切れた。

「一夏！」

「な、何だよ」

突然の大声で起こされた俺に静かにするようにサインを送っていた。

「これってもしかなくても……」

「誘拐の様だね」

なんで俺達を誘拐するのは謎だが、とりあえずここから逃げなければいけない

「一夏、車が止まったら一気にドアを開けて逃げよう！」

「でも、捕まるぞ？ 絶対に」

俺達は中学生だ。

そんな子供に大の大人が負けるはずがない。

「ふふん、この僕を誰だと思って？ 高速化の強化魔法をかければ逃げ切れるさ」

「そう言えばそうだったな」

俺は、正樹の人とは違う能力を思い出した。

そう、こいつは魔法使いだ。

最初は嘘だと思ったが、目の前で見せられたので俺も信じていた。本人は呪歌使いと言っているが……

「それじゃ……我らはチーター、野原を駆け巡る野生の獣。我らに絶対の速さを与えたまえ」

正樹の言葉に呼応して、俺の脚がまるで羽のように軽くなった感じがした。

そして、その時が訪れた。

車が突然止まったのだ。

「一夏」

「おう！」

正樹の言葉に頷くと、俺達はドアをけり破って脱出した。

「なッ！？ 追え！！」

「待て！！」

やはり黒服の男達が俺達を追ってくる。

だが、今の俺達の速さは並みの大人でも追いつけないほどだ。

（よし、いける！！）

そう心の中で確証した時だった。

「一夏!!」

「ッぐう!!」

突然正樹によって俺は横に吹き飛ばされた。

それと同時に、けたたましい音が鳴り響いた。

「があ!!!!」

「……………え?」

俺は目の前で起こったことが信じられなかった。

正樹は、何かによって貫かれたのだ。

そして正樹はそのまままるで糸の切れた人形のように、地面に倒れた。

あたりは血の海と化した。

「正……………き?」

俺は正樹にゆっくりと近寄る。

だが、それと同時に俺達は黒服の男達に捕まり、倉庫に閉じ込められた。

「正樹、大丈夫か!」

「大……………丈夫。このくらい……………何ともない」

俺の叫び声に、正樹が苦しげな声色で答えた。

「なあ、チーズケーキはあるか?」

「……………さっきのでどっかになくなっちゃったよ」

俺の言葉に、正樹は「残念」といつものように答えた。

なので、俺もいつものように話しかけた。

「俺達ここからどうやって出るんだろうな？」

「簡単だよ。僕が魔法でここを突き破るから、それで逃げればいいんだ」

俺の呟きに答えて、立ち上がろうとするが、正樹は倒れたままで起き上がることもできない。

「悪い、力が入らない」

「……………そうか」

俺は横目で正樹の様子を見た。

おびただしい出血だった。

このままでは、正樹が……

（考えちゃだめだ!!）

俺は必死にその先を考えないようにした。

「武士は戦場で死ぬのが誇りだと聞いたけど。こんなところで死ぬのはちょっとあれだよな」

「何言ってるんだよ、まだお前は死なないよ」

俺は正樹にそう反論した。

「あゝあ、せめて死ぬ前にチーズケーキくらい食べておきたかった……な」

「何言ってるんだよ！ チーズなんて後でいくらでも食べられるじゃないか!!」

俺は必死に泣くのを我慢しながら正樹に言った。

正樹は、まるで死を悟っているようにつぶやいているのだ。

「そうだった……な。それじゃあ……僕は、レアチーズケーキを……食べた……」

正樹の言葉は、そこでぱったりと止んだ。

「おい、正樹？」

「――――」

俺の言葉に、正樹は何も答えない。

「なあ？ 何か話してくれよ！ 正樹、正樹い！！！」

俺の叫び声にも、正樹は何も反応を示さなかった。

その後、駆けつけてくれた千冬姉によって助け出され、正樹は病院に運ばれたが、医者から告げられたのは、正樹が死んでいるという事実だった。

その時、俺はひたすらに泣いて泣いて泣き続けた。

この日俺は、義理の弟を亡くしたのだった。

S i d e o u t

第33話 すべてが変わった日（後書き）

まだまだ過去編は続きます。

第34話 一夏と正樹（前書き）

お待たせしました。
第34話です。

第34話 一夏と正樹

「ん……あれ？」

僕は、気づくといつものように目を覚ました。
だが、おかしい。

僕はこの間死んだはずだ。
なのにどうして……

「これは、夢なのか？」

そう思い辺りを見回すと、そこはなぜか一夏の部屋だった。
頭を傾げながらも部屋を出てリビングに向かった。

ISへ破門されし者へ

第34話「一夏と正樹」

「遅い。一体何時だと思っている」

「何時って……まだ朝の8時だけど」

そこにいたのは黒いスーツに身を包んだ姉さんだった。

「“まだ”ではない。”もう”だ！ おかげでまだ朝食を食べていないのだぞ」

「どうもすみません。ところで、どうして姉さんがここに？ それに作るのは一夏に頼めばいいじゃない」

いつもの姉さんの様子に、僕はため息をついて朝食の準備をしながら

ら言った。

「大丈夫なのか？ さっきから変だぞ」

すると姉さんが突然心配そうな様子で俺に聞いてきた。

「別にどこもおかしくはないけど……」

「…………お前は誰だ？」

僕の答えに姉さんはしばらく考え込むと、突然俺にそう聞いてきた。

「な、何なの突然」

「良いから答えろ」

驚きながら姉さんに意図を聞こうとするが、姉さんの剣幕に押されて名前を言う事にした。

「織斑正樹だけど」

「やはりか……鏡を見て来い」

僕は言われるがまま洗面所に向かって鏡を見た。

「……………は？」

僕は思わず固まった。

そこに移っていたのは、まぎれもなく一夏の姿だった。

僕の後ろには”僕”以外は誰もいない。

とすれば、残された答えなど一つだ。

僕はそれを確認するために慌てて色々な部屋を覗いた。

「正樹、どうしたんだ？ 正樹！」

姉さんの制止を振り切って覗いて覗いて、そしてとうとう見つけた。

仏壇に置かれた遺影を。

それは紛れもなく、僕が死んだことの証拠だった。

「……………」

「……………正樹」

僕はその場に力なくへたり込んだ。

「……………どうしよう」

「一夏は大丈夫なのか？」

呆然としている僕に、姉さんがそう尋ねてきた。

そうだ、何より心配しないといけないのは一夏だった。

「ちょっと待ってください……………」

僕は目を閉じて自分の中に集中する。

すると、かすかにではあるが僕とは別の反応を感じた。
おそらく一夏だ。

「一夏の反応がありました。おそらくは僕が一夏の体に乗っ取った
せいで閉じ込められてると思います」

「なんとか治す方法はあるのか？」

姉さんの問いかけに考えをめぐらす。

「今僕は一夏の体に憑依している状態だから、僕が一夏の体から離れれば一夏は解放されるけど……僕は離れ方を知りません」

憑依とか魂とか完全にオカルト的な存在だから、信用されることはないと思うのだが、姉さんは信じてくれた。

「ただ、一つだけ重なった魂を分断する方法があります」

「それはどういう方法だ？」

僕はあまりお勧めは出来なかったが、その方法を口にした。

「使い魔契約です」

「使い……それってなんだ？」

姉さんは聞きなれない言葉に首を傾げながら問いかけてきた。

「任意の動物、生物と特殊な契約をするものです。これを一夏と結べば、契約者と使い魔と言う分類になって重なった魂を二つに分断することが出来ます。ただ……」

「ただ、何だ？」

僕は一つだけある問題を告げることにした。

「この使い魔契約と言う物は、本来魔力を持つ者が行うんです。一夏自体にもごく微量の魔力がありますが、これでは僕の姿を留めておくことは難しいです。契約自体は出来ますが……」

「どういう事だ？」

「つまり、一夏の体力を利用して僕は生活することになるんです。

一応一夏には理論値で二人分まで体力を上げる事は出来るけど……」

それにはかなりの負担とリスクが一夏に押し寄せることになる。
本来は魔力を持つものが行う契約なのだ。

体力の消費は、緊急事態で魔力の出力が出来なくなった際の処置だ。

魔力を持つ魔法使いは、主に体力面でも人よりも多いために、これだけでも数日間だけではあるが応急処置として使えるのだ。

当然だが、これを人間に対して行う前例はない。

つまりどのような弊害が起こるかは全く分からないのだ。

「このまま放っておけば、僕と言う存在が一夏の魂をむしばみ、最悪の場合は一夏自体が消滅します。どうするんですか？」

僕は姉さんに問いかけた。

一夏と会話をすることが出来ない以上、年長者である姉さんの決断が必要なのだ。

「…………このまま何もしないよりはましだ。契約をするのを許そう」

「…………分かりました。それでは、始めます」

僕は心の中で一夏に謝罪の言葉を送りながら、地面に魔法陣を展開する。

「魔法陣よ、我が言葉に答えたまえ。我、使い魔の契約を望むものなり契約者は織斑一夏、対象者は織斑正樹。契約開始！」

僕の言葉に呼応して魔法陣が光を発し僕を包み込んだ。

僕はその眩しさに目を閉じた。

そして、光が薄らぎ目を開けると目の前には一夏の姿があった。

「あれ……俺何をして……って、正樹！？　なんでここにいるんだよ！！」

寝ぼけた様子の一夏は、僕を見るなり混乱したのか大きな声を出して聞いてきた。

「落ち着け馬鹿者。一から説明する」

そして姉さんが僕が説明したとおりに一夏に言い聞かせた。

「な、なるほど」

「理解できたようだな」

事情を説明し終えた僕たちは、遅めの朝食を食べることにした。

「だけどよ、どうすんだよ。もう正樹は死んだことになってるだぞ」

朝食を終えて寛いでいる時、唐突に一夏が聞いてきた。

「それがあったね……そうだ。一つだけいい方法がある」

「何だよ、そのいい方法って」

僕は一夏たちにその方法を説明した。

「そ、それは何とも」

「非常識な事だな。だが、正樹の言っている通りであれば辻褄が合うだろう」

僕の提案に二人は呆れながらも頷いてくれた。

僕の提示した方法、それは僕が死んだというのが間違いであるとする事だった。

少し前に死んでもない人を死んだことにして、火葬すると言う前例があったのだ。

僕のもそれに則って、間違いと言うことにするのだ。

本人がいて、そして骨になっている以上僕の言ったことが、嘘であると断定できる証拠はない。

写真でもとっていれば確かだろうが、それでも他人の空似と言う事で通してしまえばいい。

この後、一夏とこの契約についての特徴を離した。

その特徴が次の点だ。

・普段、家にいる時は一夏の負担を軽減するために一夏と一体になる。

・僕の行動には一夏の体力を利用する。

・契約の対価として、一夏の身体能力全般が多少ではあるが向上する

・それぞれが耐えられない痛みが発生した場合はそれが相手に伝わる。僕の場合は魂から揺らぐため連続してやられると肉体と乖離（つまりは消滅）する可能性がある。

「さて、では私は市役所の方に行ってこよう。何、心配するな正樹の言った通りに説明するさ」

姉さんはそう言って家を出て行った。

それから数日間市役所の人や医者やら研究者やらが大挙して押し寄せてきた。

いろいろと調べられた結果、僕の死亡は間違いであることになり戸籍が回復させられた。

学校に行った際には、当時クラスメイトであった鈴は驚きながら笑うと言う、珍しい姿を見ることがとなった。

後にこれが織斑正樹死亡騒ぎと勝手に言われることになった。

それから約2年、僕と一夏は複雑な生活することとなった。

（せめて一夏だけでも守るんだ）

僕は心の中で強く決心した。

それが、少しでも生きながらえさせてもらう恩返しなのだから。

だからこそ、僕は姉さんがI Sについて教えに行った時はコネを使い、ドイツの軍に偽の噂を流すように頼んだのだ。

それが『織斑千冬が2連勝できなかったのは、彼女の弟の織斑正樹のせいだ』と。

これが今の様な事態を招くとも知らずに。

これが僕と一夏に起こった事件の全容だ。

第34話 一夏と正樹（後書き）

次回からは再び話を進めたいと思います。

第35話 助けるために（前書き）

遅れてすみません。

ようやく完成しました。

第35話 助けるために

僕は学園の屋上にいた。

「……はあ」

そして何度目かわからないため息をつく。
なぜ彼女が一夏にまで敵意をむき出しにするのか……それは見当もつかない。

「一体どうすれば……」

僕はどうすればいいかが分からなくなっていた。
どうすれば一夏を彼女から守ることが出来るのだろうか。

「あれ、またお悩み事？ お姉さんに話してみなさいな♪」

「……またあなたですか」

考えをめぐらせていると背後に人の気配がしたので、振り返るとそこにはいつもの青髪の女子生徒がいた。

「何よ、いけない？」

「別に……ただ神出鬼没ではないかと」

「それで、今度の悩み事は何かしら？」

僕の呟きを華麗にスルーして再び問いかけてきた。

「………実は」

そして僕は何時かのように悩み事を伝えた。

IS 破門されし者

第35話 「助けるために」

「なるほどね。つまりはそのお兄さんを守りたいけれど、どうすればそれが出来るかが分からない……と言った所かしら？」

「そういう事です」

僕の話聞いた女子生徒は簡単にまとめた。

もちろん僕たちの過去については隠しておいた。

あれはむやみに人に言っていないことではないからだ。

「そうね……そのお兄さんに一度話してみたらどうかかな？ 君って何でも一人でやろうとするけど、それが一人でも多ければ守りやすくなるんじゃないかな？」

「でも、普通守りたい人に話しますか？」

あまりにも矛盾した答えに、僕は女子生徒にそう聞き返した。

「普通はないわね。でも、そこは男の子だしね。本当に守りたいんならお兄さんには自分の身を大事にして貰いつつ、あなたが守ればなおのことやり易いんじゃないかな？」

女子生徒の言う事には一理あった。

「……………そうですね。今日戻ったらいう事にします」
「うんうん、素直でよろしい」

女子生徒が扇子を開く。

そこには『感心』と書かれていた。

「ところで、君とそのお兄さんとは、過去に何があったのかな？

話を聞いているとどうも普通では考えられない事態が起こった風に、感じ―――」

「そこまでにした方がいいですよ？」

僕は追及してきた女子生徒の喉元に刀の刃先を向ける。

「貴方は踏み込んではいけない領域に踏み込もうとしています。確かに悩み事を聞いてくれたことには感謝はしますが、だからと言って超えてはならない領域に入ることばかりは許容できません。もしそれ以上聞きたいのであれば、この刀が血に染まるでしょう」

「わ、分かったわ。これ以上は聞かないからそれを下しなさい」

僕の言葉を聞いた女子生徒が慌てた様子で答えるのを聞いて僕は刀を下した。

「貴方が話の分かる方で良かったです。それでは失礼します」

僕は女子生徒に一礼するとそのまま屋上を後にした。

3人称Side

「まさかこの私が………これは予想外ね」

正樹が去って行くのを見ながら、女子生徒はボソリとつぶやく。
彼女にとっては単なる好奇心であったのだろう。

しかし、それは正樹にとっては禁句の一言でもあったのだ。

（あの時の目は、本気だった）

刀を突き付けた時の正樹の目を思い出した女子生徒は恐怖を感じた。

「学園では最強のこの私を震え上がらせるなんて……………さすがだわ」

彼女は感心しながら屋上を後にした。

その時彼女は心のうちでこう思っていただろう。

（彼は一体何者なの？）

そんな疑問を……………

S i d e o u t

一夏 S i d e

「ただいま。シャルル戻ってるか？」

寮に戻ると、そこには同室のシャルルの姿がなかった。
シャワールームからシャワーの音がするため、おそらくはシャワー
でも浴びているのだろう。

「ふう……」

俺は机にカバンを置くと、一息つきながらベッドに座り込んだ。

「あ、そうだ」

俺はふと、ボディソープが切れていることを思い出した。
戸棚を開けてボディソープの替えを取り出すと、シャワールームに
向かった

「シャルル、ボディソープ切れてただろ？ 替えの――」

中に入ると同時に、浴室のドアが開いた。
そこにいたのは一人の少女だった。

「……………うわ!？」

目の前の少女は慌てて隠れる。

「……………これ、ボディソープ」

「う、うん……………ありがとう」

俺は、何とかボディソープを目の前に少女に渡した。

「そ、それじゃあ…な」

「う、うん」

俺はなんとか平静を保ってシャワールームを後にした。

「ッ!？」

(今のってシャルル……だよな?)

俺はとりあえず、シャルルから話を聞くべくベッドに腰掛けて待つことにした。

「で、なんで男のふりをしてたんだ？」

しばらくしてシャワールームから出てきたシャルルに俺は本題を切り出した。

「実家からそうしろと言われて」

「お前の実家って言う……デュノア社の？」

俺はデュノア社について思い出した。

デュノア社。

そこはISの量産機である第2世代の『ラファール・リヴァイブ』を主に開発し流通させている。確か世界第3位のシェア率を誇っているとかな。ちなみにこれは正樹からの話だ。

「そう、僕の父はその社長。その人の直属の命令でね」
「え？」

「僕はね一夏……本妻の子じゃないんだよ」
「ッ!？」

シャルルの告白に、俺は息をのんだ。

「父とはずっと別々に暮らしてたんだけど、2年前に引き取られたんだ。そう、お母さんが亡くなった時、デュノアの人が迎えに来てね。それで色々検査を受ける過程でIS適性があることが分かって……非公式ではあったけどテストパイロットをやることになってね、父に会ったのはたった二回だけ。話をした時間は1時間も満たないかな」

「……………」

俺はシャルルの告白に何も言えなかった。

だがそれは、ある人物を彷彿とさせた。

いや、あいつに限りなく近かった。

「その後の事だよ……経営危機に陥ったんだ」

「え!？」
だってデュノア社って、量産機ISのシェアが世界第3位だろ？」

シャルルの言葉に、俺は思わず声を上げてしまった。

「そうだけど、結局リヴァイブは第2世代型のISなんだよ。現在ISの開発は第3世代型の開発が主流となってるんだ。セシリアさんもラウラさんも転入してきたのも、そのためのデータを取る必要があるからだと思う。あそこも第3世代型のISの開発に着手してはいるんだけどなかなか形にならなくて、このままだと開発許可が剥奪されてしまうんだ」

「それとお前が男のふりをしてるのと、どう関係があるんだ？」

正樹から聞いた話だが、ISの研究機関にはそれぞれに開発許可と言うものが出されているらしい。

この許可が剥奪されればISの開発や研究は出来なくなる。

つまり、ISの開発が主な企業にとってそれは、死刑宣告でもあるのだ。

（しかし、何で正樹はこんなことまで知ってるんだ？）

このことを話している時の正樹からは、まるでどこかの企業のテストパイロットのような印象を受けた。

「簡単な事だよ。注目を浴びるための広告塔。それに同じ男子なら日本で出現した特異ケースと接触がしやすい。その使用機体のデータが取れるかもってね」

確かに、女子だったら多少は警戒するかもしれない。

現に俺は”男子”であるシャルルと親睦を深めようとしていた。

「そう。君と正樹のデータを盗んで来いと言われてるんだよ。僕はあの人にね」

シャルルの言葉に俺は息をのんだ。

「はあ………ほんとのことを話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと今まで嘘をついていてごめん」

シャルルは何もかもが吹っ切れたと言わんばかりな表情をして、俺に謝ってきた。

「………いいのか、それで？」

「え？」

俺はどうとう我慢が出来なくなり立ち上がるとシャルルのそばに歩み寄った。

「それでいいのか？ いいはずないだろ！」

「い、い一夏！？」

「親がいなければ子供は生まれない、そりゃそうだよ。でも、だからって何をしてもいいなんてそんな馬鹿なことは！」

「一夏」

声を荒げる俺にシャルルが声をかける。

だが、俺には許せなかった。

何よりも、実の子じゃないにしろ娘をまるで”道具”のように扱うその人が。

「俺も……俺と千冬姉も、正樹も両親に捨てられたから……俺の事は良い。いまさら会いたいなんて思わないから。けど、お前はその後どうするんだ！」

「どうって……女だってことがばれたからきつと本国に連れ戻されるね。後の事は分からない……よくて牢屋行きかな」

俺はシャルルの言葉を聞いて立ち上がった。

「だったらここにいろ！俺が黙っていればばれずに済む。もし仮にばれてもお前の親父は国は手出しができないはずだ『IS学園特記事項——本学園における学生は、その在学中において、ありとあらゆる国家、組織、団体に帰属しない』つまり、この学園にいればこの3年間は大丈夫ってことだ。その間に何か方法を考えると良い」

「よく覚えてたね。特記事項って55項もあったのに」

「こう見えても俺は勤勉なんだよ」

もしこの場に正樹がいたら確実にこうツッコまれていただろう。

”勤勉って……その特記事項が記載されてるのは、最初の方じゃないか”と。

「一夏。かばってくれてありがとう」

「い、いや……あ、でも正樹はどうする？あいつあれでもかなり勘が鋭いし」

お礼を言ってくれるシャルルに、少しドキツとしながら第1の問題を告げた。

それが正樹だ。

あいつは本当に勘が鋭い。

おまけにどうしてかは知らないが、嘘や隠し事をすぐに見抜く。

「それだったら、大丈夫だと思うよ。もうずっと前にばれてたから」

「そ、そうだったのか」

どうやら俺の予想は当たってしまったようだ。

「まさかとは思うけど、その時に正樹に何かされたか？」

「え？」

「いや、あいつ俺や千冬姉に関することになると人が変わったようになるから」

俺はそう言いながらシャルルの表情を伺うが、どうやらビンゴのようだった。

「その……尋問されちゃった」

「兄として、大変申し訳ない」

シャルルの言う尋問が生半可な物ではなかったような気がしたので、俺は頭を下げて謝罪した。

「そ、そんな！ 悪いのはうそをついていた僕なんだから！」

「それでもだ。正樹に謝るように言ってみる」

俺はシャルルにそう宣言する。

と言うより絶対に謝らせよう。

俺はそう決心するのであった。

S i d e o u t

夜、一夏の部屋（自室だが）へと向かっていた僕は筭と出くわし、

彼女も一夏の部屋に行くとのことなので、一緒に向かうことにした。

したのだが……

「「な、何をしている（んだ）！」」

目の前にいるのは、一夏と、なぜか一夏の腕にしがみついているセシリアだった。

「これから私たち、一緒に夕食ですよ」

「だからと言って腕を組んで密着する必要がどこにある！？」

セシリアの言葉に、箒がかみつく。

「あら、殿方がレディをエスコートするなんて当然の事です」

「どっちかって言うとな俺がされてるような」

一夏の言葉から、その場面の光景が容易に想像できた。

「それなら私も付き合おう。今日は少々物足りなかったのぞな！」

「あらあら箒さん？ 食べ過ぎは体重を加速させますわよ？」

「ふん、心配は無用だ」

そう言って片手で持っていた包みを取ると、一本の刀が出てきた。

「これで居合をして、カロリーの消費をするからな」

「って、真剣だろ！？ それ！」

確か名前は『緋宵』と言ったはずだ。

「で、では参るとするか」

箒はその真剣を包み直して僕に手渡すと、セシリアの掴んでいる腕とは逆の腕にしがみついた。

「箒さん、何をしていらっしやるのかしら!？」

「男がレディをエスコートするのは当然の事なんだろう？」

セシリアの問いかけに、ついさっき自分で言ったことを言い返された。

「待てよ二人とも。こんなの歩きずらいだけ————いてえ!？」

一夏の状況を見ていない言葉に、セシリアと箒は一夏の背中をつねり、僕は預かっている緋宵で背中を軽く小突いた。

「この状況で他に言うことはないのか？」

「自らの幸福を理解しないものは、犬にも劣りますわね」

「坂道から転げ落ちて馬に踏まれて死ね!」

「な、何なんだよ……一体」

僕達からの非難の言葉に一夏は軽く肩を下げていた。

こうして僕たちはちよつと遅めの夕食を取るのであった。

第36話 偽善と情け（前書き）

今回のメインテーマは『情けは人のためならず』です。

第36話 偽善と情け

夕食を終えた僕と一夏は部屋にいるシャルロットの分の夕食を持って自室に戻った。

「た、ただいま」

「戻ったよ」

「お帰り。どうしたの？」

ベッドに横になっていたシャルロットは体を起こすと、一夏の方を不思議そうに見ていた。
ちなみに一夏だが、食堂の方で色々とあり、かなりばてていた。

「……気にしないでくれ。飯もらってきたぞ」

一夏はシャルロットの向かい側にある机に、夕食が乗ったトレイを置いた。

「ありがとう。頂くよ」

シャルロットは一夏にそう言うのと立ち上がって机に向かった。

「うッ!？」

料理を見たシャルロットはその場で固まった。
その料理は魚に惣菜と言った和食だった。

「どうした?」

「う、うん」

シャルロットは椅子に座ると割り箸を割って食べようとするが、うまく使えていないようだった。

「箸苦手なのか？」

「練習してはいるんだけどね」

一夏の問いかけにシャルロットは苦笑いしながら答えた。

「悪かった、それじゃフォークを貰ってくるよ」

「え！？」 あ、いいよそんな」

フォークをもらいに行こうとする一夏を引き留めた。

「シャルルはもうちょっと他人に頼ることを覚えた方がいいぞ？
そんなに遠慮ばかりしてたら損するって」

「その通り」

一夏の言葉に僕は賛同した。

遠慮ばかりしていると色々な意味にで、損するような気がする。

「最初は俺達に頼ることから始めたらどうだ？」

「じゃ、じゃあね……あの……」

一夏の言葉に手をもぞもぞと動かしている。
と言うよりなぜに僕を巻き込む？

「一夏が食べさせて」

「え？」

シャルロットからの予想もしないお願いに一夏が固まった。

「あ、甘えてもいいって言うから………ダメ？」

「うゝッ!? よ、よし男に二言はない」

そう言うで一夏は椅子に座って白身を取るとそれをシャルロットに差し出した。

「じゃあ、行くぞ。その……あーん」

「あーん」

そして一夏はシャルロットに魚を食べさせ始めた。

「馬鹿らしい」

それを横で見ている僕は、この甘ったるい雰囲気日晒され続ける羽目となった。

IS〈破門されし者〉 第36話「偽善と情け」

「なあ正樹」

「何だ、一夏」

シャルロットの夕食も終わり、のんびりしている時、一夏が口を開いた。

「お前は知ってたんだよね？ シャルルの事」

「ああ、彼……彼女が転入してきた日にね」

一夏の問いかけに、僕は素直に答えた。

「だったら話が早い。シャルルを助けたいんだ、何かいい策はないか？」

「ない。と言うよりあっても言う気はない」

僕は一夏に冷たく言い放った。

「な、なんでだよ!!」

「彼女には言ったかもしれないけど、僕は彼女が生きようが死のうが掴まろうが、どうなろうが関係ない」

「そんな言い草はねえだろ！」

僕の答えに一夏が突っかかってくる。

「ならどうして一夏は許せる？ こいつは性別を偽って近寄ってきた挙句にISのデータを盗みに来たんだぞ？ 僕なら許せないね。まあ、もし一夏が許してるのだとすればそれは偽善者にふさわしいけど」

「俺は偽善者じゃない!!」

僕の言葉に、一夏が反論した。

「ならば理由を話して。彼女のしたことを許せる理由を」

「……シャルルの話を聞いてたらさ、昔の俺達を思い出したんだ。両親に道具のようにされている話を聞いたら」

一夏は辛そうな表情で理由を話した。

昔の俺達……それは両親に捨てられた一夏と姉さん、そして突然飛

ばされた僕の事だろう。

「なるほどな。一夏」

「な、何だよ」

「それは偽善じゃなくてね、同情って言うんだよ!!」
「のわ!?!」

僕の大声に反応して一夏がのけぞった。

「それとシャルル、一夏から聞いて知っているとと思うから一つだけ訂正しておく。僕は”捨てられて”はいない」

「それってどういう……」

僕の訂正の意味が分かっていない彼女の言葉を遮って一夏が声を上げた。

「まだそんなこと言ってるのか？」

「当たり前だ。あの人がそんな事をするはずはない。これには何か訳があったんだ。僕は今でもそう思ってる」

一夏は僕の言葉に何も言い返さなかった。

もしかしたらそれ以上踏み込むのは危険だとわかったからかもしれない。

どちらにしろ、こっちにとっては好都合だった。

「まあ、策の件だけど考えるよりも前の問題だ」

「……どういう事だ？」

僕の言葉に疑問を投げかけてくる一夏に、僕はストレートに告げた。

「シャルルが何を望むかだ。父親の元に戻ってまた道具のようにされたのか、父親に復讐をするのか、仲直りをするのか……後はそれに伴う覚悟だ。それが定まらない段階では、こっちは何もできない。で、どうなんだ？」

「僕……」

僕の問いかけに、シャルロットは答えに詰まっていた。それを見た僕はため息をついた。

「まあ、覚悟が決まった時にでも教えて貰おう。そしたら出来る限りではあるが考える」

「うん。ありがとう」

「勘違いしないで。シャルルの事で一夏の立場が悪くならないようにするためだ。決して友であるあんたの為とかではない」

お礼を言ってきたシャルロットに僕は冷たくそう告げた。

「素直じゃねえよな。」

「うるさいよ、兄貴」

「ふふ」

一夏の茶化するような言葉に反論する僕を見て静かに笑うシャルロット。

「それじゃ、そろそろ寝ようか」

「うん」

「そうだな」

一夏の提案で一夏とシャルロットはベッドに、僕は一夏の中で寝る

ことになった。

「それじゃ、明かりを消すよ」

「ああ」

「うん」

そして僕は明かりを消した。

「お休み、一夏、正樹」

「ああ、お休みシャルル」

「良い夢を」

それからしばらくすると、眠ったのかシャルロットの規則正しい寝息が聞こえた。

「一夏」

「ああ、分かってる」

僕は一夏に一声かけると、一夏はゆっくりとベッドから起き上がる。

そして僕は左手を一夏の手と合わせると、一夏の中に入り込んだ。

「お休み、正樹」

『うん、お休み。兄貴』

そして僕と一夏も眠りに落ちたのであった。

第37話 些細な異変と噂（前書き）

すみません、前哨戦は次でした。

第37話 些細な異変と噂

「……ん」

翌日、僕は小鳥のさえずりで目が覚めた。

「…………あれ？」

僕はそこでちよつとした異変を感じた。

背丈が少々違うのだ。

僕の身長は一夏よりやや小さい。

だが、いつもより目線が高いような気がするのだ。

「…………まさか」

原因に心当たりがある僕は、静かに脱衣所兼洗面台に向かうと、鏡を確認した。

そこに映し出されていたのは”一夏”だった。

「なるほどな」

僕にはそれがなんなのかが分かった。

おそらく入れ替わったのだろう。

時たま優先権が変わってしまうことがある。

もちろんではあるが、いつもは優先権は一夏にある。

この優先権がなければ、目が覚めても外に出ることも、体を自由に使う事も出来ないのだ。

この場合は、一夏の意識が目覚めるのを待つしかない。

（ここにはシャルロットがいるし……とりあえず着替えて逃げるか）

僕はそう思い素早く行動に移す。

こうして同じ部屋にいるシャルロットに気付かれないように部屋を後にした。

IS 破門されし者 第37話「些細な異変と噂」

「久しぶりの散歩もいいもんだ」

僕は今、寮のあたりを適当に歩いていた。

早朝の風当たりはとても気持ちいい物であった。

「何してんのよ？ 一夏」

「え!？」

突然背後から声をかけたのは、鈴だった。

（最悪だ）

よりもよって一夏の幼馴染とは……

「え？ じゃないわよ。何をしてんのって聞いてんのよ」

「何って、そんなの決まってるだろ。散歩だよ。今日は偶々早く起きたんだよ」

僕は一夏のふりをして鈴に答えた。

「ちつとも似合わないわね」

「ほっとけ。ところで、鈴の方こそこんなところで何をしてんだよ？」

普通に話してはいるようだが、内心ドキドキだ。

「あたしも偶々早く起きたから散歩してるのよ」

「鈴が早起き？　こりゃ今日は天災———がああ！？」

本気で驚いていると、鈴から鋭い一撃が入った。

「あんた、死にたいようね？」

「いやいやいや！　僕にはそんな自殺願望ないから！！」

鈴の形相に、僕は必死に首を振って否定した。
と言うより怖い。

「さっきから気になったんだけどさ」

「お、おう。何だ？」

鈴の雰囲気が変わったので、僕はなんとか平静を装って先を促した。

「あんたと話していると正樹と話しているように感じるんだけど……」

「ッ！？」

僕は思わず息をのんだ。

ここでミスをすれば僕と一夏の事がばれてしまう。

「ど、どうしてそう思うんだよ」

「さっき一夏、自分の事を”俺”じゃなくて”僕”って言ったでしよ？ 後は感じね。いつもの一夏とは違うような気がするのよ」

僕は驚いていた。

自分でも感じないちょっとした違いを、鈴は見抜いていたのだ。

まあ、僕が間抜けなのかもしれないけど。

「きっと気のせいだって。俺は正樹じゃねえよ」

「…………そうよね。ひょっとしたら正樹が魔法の様なものを使って一夏に化けていると思ったから。それじゃ、あたしは先に戻るわね」
「お、おう。気を付けてな」

僕は鈴が去って行くのを見届けると、近くにあった木に寄り掛かった。

「つ、疲れた」

朝なのにこんなに疲れるとは、今日は果たして乗り切れるのだろうか。

と、そんな時だった。

『おい、正樹。チェンジだ』

「ようやく起きたか、この寝坊助野郎」

僕は頭の中に響く一夏の声に毒づく、目を閉じて一夏に優先権を渡した。

そしてその後すぐに外に具現化する。

「おはよう、正樹」

「ああ、おはよう。この寝坊助野郎！」

僕は一夏を叩いた。

「な、何するんだよ!!」

「うるさい！　僕が被った疲れと苦労のお返しだ!!」

僕と一夏は言い合いながら寮へと戻って行った。

しかし、この時僕たちのルームメイトから色々聞かれる羽目になる
とは知る由もなかった。

「女の子だけの取り決めてことらしいのよ」

シャルロットからの追及をうまくかわしながら支度をすませて、教室に入ると、女子の話し声が聞こえた。

「おはよ」

「おはよう」

「うっ!？」

僕と一夏にシャルロットが中に入ると、輪を作っていた女子たちが固まった。

「何の話をしているの？」

「うわあああ！！」

女子たちはシャルロットの問いかけに悲鳴を上げて散って行った。

「じゃあ、あたし自分のクラスに戻るから」

「そ、そうですね。私も自分の席に着きませんと」

そして残っていたセシリアと鈴も逃げるように去って行く。

「あ、待て鈴！　どういう事かを説明しろ！！」

追いかけるが時すでに遅く、鈴の姿はなかった。

「セシリア、どう言う事を説明して」

「わ、私は何も知りませんよ。私は授業の準備があるので」

セシリアに聞こうとするが、頑なに話そうとはしなかった。

（ここ最近変な噂が飛び交っている）

その内容までは分からないが、どうやら僕と一夏関係らしい。どのような噂かを知らないとは非常に不安になるのだ。

その時、ふと幼馴染の、箒を見た。

その表情はどこか不思議そうな様子だった。

（何か知ってるな。絶対に）

僕はそう推測して、放課後にでも話を聞こうと決めた。

「全員席に着け。SHRを始める」

そんな時、織斑先生が教室に入ってきたので、僕は自分の席に着くのであった。

第38話 前哨戦（前書き）

まずは、お気に入り登録が100を超えました。
本当にありがとうございます。
そしてラウラ党の皆さん。
本当にすみませんでした！！

第38話 前哨戦

箒Side

放課後、私は屋上にいた。

（なぜだ）

私は疑問を感じながら、少し前の事を思い出した。

『わ、私が優勝したら………付き合ってもらおう!!』

（それがなぜ）

『学年別対抗戦で優勝すると、織斑兄弟のどっちかと付き合えることになっているらしいの』

（という噂になるのだ?）

朝の女子生徒たちの話を思い出して、私はため息をついた。

（優勝したら一夏と付き合えるのは私だけのはずだ。と、途にかくだ。私が優勝すれば問題ない。優勝すれば）

そう心の中で決心している時だった。

「ようやく見つけた」

「ま、正樹!?! どうしてここにいる!」

私は突然背後から声をかけてきた正樹に驚きながら問いたでした。

S i d e o u t

I S 破門されし者

第38話「前哨戦」

(どこに言ったんだ?)

放課後、僕は姿を消した箒を探していた。
とは言え、半分勘ではあったのだが……

「ようやく見つけた」

勘で屋上に向かうと、そこには黄昏ている箒の姿があった。

「ま、正樹!? どうしてここにいる!」

「どうしてって、それはあんたに聞きたいことがあったからだ」

驚きながら問い詰めてくる箒に、僕はそう返した。

「今学園中に広がっている噂について、何か知っていないか?」

「な、なぜそれを私に聞く?」

僕の言葉に、箒はそう聞き返してきた。

「それは、この噂の発端が箒のような気がするからだ」

「……今月末の学年別トーナメントに優勝すれば一夏と正樹のどちらかと付き合える。それが広がっている噂だ」

「……………はい？」

予想以上の答えに、僕は思わず固まってしまった。
と言うより何だよその賭けのような噂は。

「それを流したのは箒か？」

「違う！！ 私は一夏と約束したのだ！！」

箒の反論で話が見えたような気がした。

つまりはこういう事だろう。

一夏と箒で約束事……おそらくは、”学年別トーナメントで優勝したら箒と付き合う”というのを聞いていた誰かが、そのことを話した際にさっき聞いた噂話のように捻じ曲がったのだろう。

「どういう約束なのかは大体想像つくから聞かないけど………まあいいか」

僕はすでに感じていた。

一夏が箒の言葉をどのようにとらえているのかを。
だが、それを伝えるのも、なんだか箒に悪いような気がしたのだ。

「さて、そろそろ————」

そこまで言いかけた時、突然爆音が響き渡った。

「これって」

「アリーナからか！」

僕と箒はほぼ同時に僕恩がした方へと駆けだしていた。

アリーナにたどり着くと、そこには一夏とシャルロットの姿があった。

「箒、それに正樹」

一夏がこっちに気付いた瞬間、ものすごい音と振動が発生した。立ち込めていた土煙が晴れると、そこにはブルーティアーズと甲龍が地面に倒れていて、その先には黒いISがあった。

「凰さんにオルコットさんだ!」

「それにラウラ・ボーデヴィツヒも!」

シャルロットと箒の言葉に、僕は息をのんだ。

「何してるんだ? あいつら」

「フレ——!!!」

一夏の疑問もむなしく鈴が龍咆をラウラに向けて放つ。

「無駄だ。このシュヴァルツェア・レーゲンの”停止結界”の前ではな!!!」

「っ……！」

ラウラがそう告げて手をかざすと龍咆は、まるで防御壁に当たったかのように防がれた。

「龍咆を止めやがった!？」

「……A I Cだ」

それを見ていた一夏の驚きに、シャルロットがそう呟いた。

「そうか、あれを装備していたから龍咆を避けようとしなかったんだ！」

「A I C？ 何だそれ？」

「シュバルツェア・レーゲンの第3世代兵器、アクティブイナーシブルキャンセラー」

「慣性停止能力とも言う」

一夏の問いかけにシャルロットと箒が答えた。

（なるほど、そう言うからくりか）

僕はすぐに理解した。

おそらくA I Cによってすべての攻撃を止めているのだろう。

僕のジョイントサークルの劣化版と言った所か。

一人思考に耽っていると、再び爆音がした。

視線を戻すと、そこにはセシリアと鈴が立っていた。

（勝ったのか？）

しかしそれは爆煙が晴れたことですぐに分かった。

そこには、傷一つないラウラのIS、シュバルツェア・レーゲンの姿があった。

「終わりか？　ならば今度は――私の番だ」

ラウラはそう告げると、ワイヤーブレードを射出して動揺している二人の首に絡めると、一気に手繰り寄せた。

「ぐあッ……!!」

「あぐッ……!!」

そしてラウラは拳で殴ったりけったりし始めた。そう、わざわざ遠まわしのダメージの与え方。その魂胆は考えなくてもすぐに分かった。

（やってくれるな。本当に）

僕は怒りで体中の力が漲ってくるのを感じた。

『良いか、正樹。適度な怒りは力のスパイラルだ。戦う気のない物を戦わせたいときに使えば効果はてきめんだ』

あの人が前に教えてくれた心理戦術そのものだ。相手の策に乗るといのは癪に障る。

だが、このまま放っておくわけにはいかない。

二人のISはすでに機体維持警告域を超えて操縦者生命危険領域にまでなっている。
レッドゾーン

このままだとISが強制解除される。すると、今までであったISと言う一種の鎧が無くなり、今受けている攻撃を生身で受けることになる。

当然だがI Sの攻撃を生身で受ければ普通では、怪我や打撲程度では済まない。

「やめろ！ ラウラ！ やめろお！」

一夏が観戦席とアリーナを守るシールドを叩きつけながら叫ぶ。そんな時、ラウラと目が合った。

「っふふ」

そして笑った。

まるで僕たちの滑稽さを馬鹿にしているように。

そして僕は無言で一夏に目配せをして、神無月を展開した。

一夏は白式を展開する。

「ウオオオオオオ！！！」

そして一夏はシールドを破壊すると、アリーナへ入った。

僕もそれに続く。

さっきの目配せで僕は指示を出していた。

それが、僕が囷になってラウラの気を引く。

その隙に二人を安全な場所まで連れて行く。

通じていれば、一夏はそれに見合った行動を起こすはず。

「くたばれえええ！！！！」

僕は保険をかけておき、ラウラに突っ込む。

ちなみに言うておくが感情的になっているのは半分演技だ。

武装は盾だが、攻撃することは十分可能だ。

だが、突然体中が固まった。

「ふん。感情的で、直情的……絵に描いたような愚図だな」

ラウラの冷たい言葉が聞こえた。

これがA I Cの効果なのだろう。

僕は目を動かし、一夏が鈴たちを抱えて行くのを確認した。

（一夏、ナイス）

僕は心の中で、一夏をほめると僕は演技を続けた。

「グウウウー！」

「やはり、この私とシュヴァルツェア・レーゲンの敵ではないな……消え失せろ」

ラウラは、僕が演技をしていることにも気づいていない。
だが、もう頃合いだ。

「ふっ！」

「……何がおかしい？」

僕の表情の変化を見たラウラが険しい表情をする。

「お前馬鹿？ この僕が何の保険も講じずに特攻すると思うか？」

「何っ!？」

ラウラの表情が驚きに染まる。

僕はそれを見ながら頭の中で、特攻する前に放ったガナーに指示を送る。

次の瞬間。

「っちい！」

後ろからの攻撃に気付いたラウラはA I Cを発動させるが、その隙に僕はその場から離れた。

「しかしお前のようなやつにやられるとは、あの二人はかわいそうだ」

「何？」

僕の言葉に反応してラウラが目細める。

「そうでしょ？ お前は猿と呼ぶのもおこがましい存在……人間もどきなのだからな」

「ッ！！？」

ラウラの目が思いっきり見開かれた。

「貴様のような下等動物は動物園の折の中で見世物にでもなっていればいい。まあ、その価値があればだがな」

「黙れ！！！」

僕の言葉に、ラウラは怒り狂ったように叫ぶ。

僕のやっていること、それはあの人が教えてくれて、ラウラがさっきまでやっていた心理術をさらに発展させたもの。怒りは力をあげるスパイシー。

だが、過剰な怒りは己の力を弱める弱点となる。

僕は相手の弱みに付け込んで精神攻撃をしたのだ。

当然だが、これは人として最低の行為だ。

それは重々承知の上。

だが、それを仕掛けたのは向こうなのだから、致し方がない。
それにこれをするだけでもう一つ、僕にとって最強のアドバンテー
ジにもなりうる。

「はっ！ 来いよ下等動物。人間の力を見せつけてあげる……………そ
れとも、もう降参？」

「貴様あ！！！」

とうとう逆上したラウラがこっちに突進する。

後は、左手にある盾で相手を怯ませて、武装を展開し止めを刺すだ
けだ。

だが、それは一人の人物によって遮られた。

そう、それはラウラのプラズマ刀をIS用のプレートで防ぐ織斑先
生によってだ。

「ッ！？ 教官」

「やれやれ、これだから餓鬼の相手は疲れる」

「千冬姉！？」

近くにいたのか、一夏が驚いていた。

「模擬戦をするのは構わん。だが、アリーナのバリアまで破壊する
事態となれば黙認はできん。この決着は学年別トーナメントでつけ
てもらおうか」

織斑先生の言葉は、有無を言わさない迫力だった。

「……教官がそう仰るなら」

織斑先生のおかげで落ち着いたラウラは、ISを解除する。

「織斑兄弟、デュノア……お前達もいいな？」

「あ、ああ……」

「教師には『はい』と、返事をしろ。馬鹿者が」

「はっ、はい！」

織斑先生に睨まれて、一夏は慌てて返事をした。

「僕もそれで構いません」

「僕も同じく」

一夏に続く形で、シャルロットと僕も返事をする。

「では、学年別トーナメントまでの間、一切の私闘を禁止する。解散ッ！！」

パンッ！ と、強く手を打つ織斑先生。

「織斑弟」

「……何でしょうか？」

それを受けてアリーナを後にしようとした僕を呼び止めた織斑先生に、用件を尋ねた。

「程々にしておけ」

織斑先生はそれだけ言うと言って行く。
その意味がなんなのかは僕には十分わかっていた。

そして織斑先生は知っているのだ。

いくら何を言っても、無駄だという事を。

「厄介なことになった」

僕は一言つぶやいた。

今回のこれの影響が、一夏の方に来なければいいんだが。

僕はそんな不安を胸に、保健室へと向かうのであった。

第39話 保健室で（前書き）

更新が遅れてしまいすみません。
一月ぶりの更新です。

第39話 保健室で

今僕達がいるのは保健室。

二人は診察の結果打撲であり、しばらくの間安静にしていればいいとのことだった。

ほっと一安心した僕達であつたが……

「……………」

「……………」

鈴とセシリアは思いつきり不機嫌そうな顔をしてこっちを見ていた。

「別に、助けてくれなくて良かったのに……………」

「あのまま続けていれば、勝ってましたわ……………」

「お前らなあ……………」

二人の様子に一夏が呆れた様子で口にした。

「二人とも無理しちゃって」

飲み物を手に二人のそばに歩きながら言った。

「無理って？」

一夏の問いかけに、シャルロトは小さな声で二人に何かを言う。

「ん？」

「な、なな何を言ってるか、全然分かんないわね！」

「べ、べべ別に私無理なんてしてませんわ」

シャルロットの言葉に、二人は飲み物を受け取りながら慌てた様子で顔をそむけた。

「そもそも、なんだってラウラとバトルすることになったんだ？」

「「ぶふッ!？」」

一夏の根本的な疑問に、二人が口に含んでいた飲み物を吹きだした。

「そ、それは……」

「ま、何と言いますか……ゲホッゲホ! ……女のプライドを侮辱されたから……ですわね」

「へ？」

「あゝ」

一夏は、二人の言葉に首を傾げていたが、僕には何となく理由が分かったような気がした。

おそらくは一夏関連だろう。

「ああ! もしかして一夏の事を————」

「きゃあああ!！」

理由が分かったのか、シャルロットが理由を言おうとした瞬間、けが人とは思えない生やされ二人がシャルロットの口を塞いでベッドに抑えた。

「あんたって、ホンッと一言多いわね!」

「そ、そうですわ! 全くだすわ」

「あ、あはは……」

その様子に、僕は苦笑いを浮かべるしかできなかった。

「やめろって。二人とも怪我人のくせに動き過ぎだぞ」
「ッ!？」

そんな中、二人を止めようとして二人の肩に手を置くとかなり痛かったのか、うずくまった。

「ほら、やっぱり痛いんじゃない。馬鹿だな、無理するなって」
「馬鹿って何よ! 馬鹿って!」

「一夏さんこそ大馬鹿ですわ!!」
「ばーか! ばーか! ばーか!」

一夏の”馬鹿”と言う単語に反応した二人が一夏にもう反論する。

「何なんだよ、お前ら」

そんな二人に一夏は頭を抱えて呟いた。
一夏としては悪気はなかったのだろう。
そんな時、とてつもない地響きがした。

「何だろう……ものすごく嫌な予感が」

そしてその予感は的中することとなった。

I S 破門されし者

第39話「保健室で」

「織斑兄君！」

「織斑弟君！」

「デュノア君！」

ドアをぶち破って入ってきた……雪崩こんできたのは数十人の女子だった。

僕は慌てておそらく見つかりづらい場所に隠れた。
と言うより、怖い。

「な、なんなんだ!？」

「ど、どうしたの、みんな？」

『これ!』

若干驚いた様子の位置かとシャルロットの問いかけに、女子一同が突きつけたのは、何かの紙のようだった。

「え……なにこれ？」

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、二人組みでの参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは――』」

「とにかく私と組もう、織斑兄君！」

「私と組んで、デュノア君！」

どうやら、トーナメントの仕様が変更になったことを告げる物だったらしい。

ちなみに僕はどうやら見つかっていないようだ。

見つかっていれば一夏たちのような目に合っていたに違いない。

Side out

一夏Side

「え、えっと……」

俺はペアになることを、女子生徒にお願いされていた。

（参ったな。このままだとシャルルが女子だってことがばれるよな）

理由はシャルルだ。

シャルルは表向き男子と言うことになっている。

つまり、もし女子と組んでシャルルが女子とわかれば大問題となるのだ。

それだけは防がなければならない。

（そう言えば正樹は？）

俺は目線で弟君を探すが、姿が見当たらない。
どうやらどこかに隠れたようだ。

「皆悪い！俺はシャルルと組むから諦めてくれ！」

俺は正樹に恨み言をこぼしながら、両手を合わせて女子生徒たちに謝った。

「まあ、そういうことなら……」

「他の女子と組まれるよりはいいしね」

「男同士っていうのも絵になるし」

俺とシャルルが組むということを知った女子達は、諦めたみたいで去って行った。

「あ、あの……」

「一夏！」

「一夏さん！」

女子達が去っていった後、シャルルが何かを言おうとしたが、それを遮るようにすぐに鈴とセシリアがベットから飛び出して、俺の両手を掴んだ。

「あたしと組みなさいよ！ 幼なじみでしょうが！」

「いえ、クラスメイトとしてここは私と！」

「ダメですよ」

鈴とセシリアのせめぎ合いを止めたのは、山田先生の一言だった。

「お二人のI Sの状態をさっき確認しましたがけど、ダメージレベルがCを超えています。トーナメント参加は許可できません」

「そんな！ あたし十分に戦えます！！」

「私も納得できませんわ！！」

山田先生の言葉に、二人が反論する。

確か、ISの蓄積経験関連だったよな。

「ダメと言ったらダメです！ 当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥が生じさせますよ」

「それは確かですか？」

そんな時、正樹の声が聞こえたが。
周りには正樹の姿は見当たらない

「ひょいっと！」

「うわ！？」

「きゃ！？」

突然上から正樹が降ってきた。

これには山田先生も含めた全員が声を上げた。

「正樹、あんた一体どこから……」

「いやー、誰にも見つかりづらい天井に上がってたんだよ。あの雰囲気、どうも苦手だし」

鈴の疑問に、正樹は苦笑いを浮かべながら答えた。

「お、織斑弟君、いくらなんでも天井に上るのはいけません！」

「そんなことはどうでもよくて」

いや、よくはない。

と言うより心臓に悪いからやめてくれ。

まあ、言っても無駄だろうが。

「二人のISのダメージレベルは、本当にCを超えているんですか

？」

「は、はい。確かに超えています」

正樹の疑問に、山田先生は不思議そうな様子で答えた。

「何事も間違いと言うのはあるもの。もう一度確認してもらってもいいですか？」

「え、ですが……」

正樹の提案に山田先生が驚きながら反論しようとする。確かに、正樹の言葉は驚きの物だ。

「別に、ISの検査に何億もかかるわけではないのでしょうか？ 時間にかかるかもですが、それだったらやるべきです。もしCを超えていなかったことがトーナメント直前に気付いたら、先生はどういう責任をお取りになられるのですか？」

「わ、分かりました」

正樹の鋭い言葉に、山田先生は背中に暗い雰囲気を漂わせて去って行った。

「正樹、言い過ぎだぞ」

「それはさておき。ここからラボまで歩いて5分、走れば2、3分か」

俺の咎めを遮り、正樹はぶつぶつとつぶやき始めた。

「な、何をする気ですか？」

「何って？ それはね……ちょっとした歌のいたずらさ」

突然制服のポケットから試験管のようなものを取り出した正樹に、セシリアが問いかけると正樹は何かを企んでいるような笑顔を浮かべた。

だが、何をするかは見当がついていた。

「一夏、シャルルを連れて先に寮に戻っててくれるか？」

「…………俺との約束。覚えてるよな？」

だからこそ、俺の方を見てシャルルを外に連れて行くように頼む正樹に俺は問いかけた。

「愚問だ。ちゃんと覚えているし、破ったこともこれまでに一度もない。それに、これからしようとするのだってそれほど危険な物ではない」

俺は正樹の答えを聞いて、少しだけ安心すると、シャルルを連れて保健室を後にした。

正樹のペアが鈴になった事を知ったのは、その次の日であった。

S i d e o u t

第39話 保健室で（後書き）

皆さんに相談があります。

実は現時点でPVが227, 139アクセス、ユニークが27, 893人となっております。

本当にありがとうございます。

そこで、お礼としましてPVが50万達成時に記念として何かを書こうと思うのですが、何がいいでしょうか？

一応候補をいくつかあげますので、いいと思うのを教えてください。

1 ネットラジオ

2 IFストーリー（本篇とは関係なくもしもOOがXXならばどうなるかの物語です）

3 Slide story

期限ですが、12月1日まででお願いします。

他にも案があれば感想やメッセージ等でお知らせください。

それでは、これにて失礼します。

第40話 呪歌とペア（前書き）

今回は呪歌のもう一つの力があらわになります。

第40話 呪歌とペア

「さて、それじゃ始めるけど、その前に……」

僕は一夏が去って行ったのを確認してそう告げた。

「二人とも、これから起こることは一切他言無用を約束して。いいな？」

「何をするのかわからないけど分かったわ」

「私ですわ」

「二人とも、ありがと」

僕のお願いに、素直に頷いてくれた二人にお礼を言いつつ、手にある試験管にあるものを入れた。

そして深呼吸を一回してこれからすることに集中する。

「それじゃ、始める」

僕はそう呟いて左手にある試験管を握りしめながら目を閉じた。

IS 破門されし者 第40話 「呪歌とペア」

右手を二人の方に掲げその手にエネルギーを収束させる。

左手から発せられる熱を気にせず、僕はエネルギーが必要な分収束するのを待った。

やがて、必要なエネルギーが集まったのを確認した僕はそれを紡ぐ。

「呪歌、黙示録第4章……」

その言葉と共に、僕の足元に漆黒の円陣……魔法陣が展開する。

「こ、これが歌の力……」

「静かに」

前に一度僕がやったことを見ていた鈴は、目の前で起こっていることに驚いているセシリアに静かにするように促した。

鈴は、こういう事には集中力が重要であることを知っていたのだ。

（ありがとう、鈴）

僕は、鈴に心の中でお礼を言うと最後のフレーズを口にした。

「傷つきし者達に光の加護をもたらさん」

その言葉と同時に、一瞬周りが光で包まれるが、それもすぐに晴れ元の保健室に戻った。

「正樹さん、今のは一体……」

「すぐに分かるさ」

セシリアの問いかけに、僕はそれだけ伝えた。

二人は首を傾げているが、疑問はすぐに解決するであろう。

——今ここへと向かってきている人物によって。

「あの、お二人のISをもう一度調べましたら、凰さんのISのダメージレベルがAになっていました」

「「え!？」」

保健室に入った山田先生が告げた言葉に、二人が驚いた。

「今凰さんのISは修復中ですが、2、3日中には終わると思いますので受け取りにいてください」

「分かりました」

「あの、私のISは」

山田先生の指示に返事をする鈴をよそに、セシリアが期待しながら山田先生に聞くが、たぶんすぐにそれは消えることになるだろう。

「オルコットさんのISですが、ダメージレベルがCなので、トーナメント参加は許可できません」

「そ、そんな……」

(ごめんね、セシリア)

僕はショックを受けているセシリアに心の中で謝った。

そう言えば、希望を持たされて一気にそれを消した時の絶望はかな

り大きいってあの人は言っていたような……。そんなこんなで山田先生は去って行った。

「それで、さっきのはどういうことなのか……」

「教えて頂きますわ」

そう告げられるとともに、二人の鋭い視線が僕へと向けられた。正直に話す以外に選択肢はないようだ。

「あれは呪歌の例外中の例外の力。歌を奏でずにさっきの様な事象を引き起こすことが出来る物」

「さっきのは修復の効果？」

前に一度これを見ている鈴はすぐに理解して僕にそう聞いてきた。

「そういう事。ISのダメージを回復させたんだ」

「だから、鈴さんのISのダメージレベルが……でしたらなぜ私のISのダメージレベルは、そんなに変わってないのでしょうか？」

セシリアさんが僕に疑問を投げかける。

それも当然だ。

片方がダメージレベルが大幅に変わり、もう片方はそれほど変わっていないのでは、疑問を感じるなど言う方がおかしい。

「鈴のISの修復を最優先にしたからかな。セシリアの方も修復を掛けた事には掛けたけど、エネルギーも少なかったから修復率も変わらなかったんだと思う」

「ちよっと待って、あんたそのエネルギー自分からの物でしょうね？」

鈴がハッと気づいた様子で僕に問いかけてきた。

「いや違うよ。他人から持ってきたエネルギーだ」

「やっぱり……………」

「えっと、どういう事なのですか？」

僕の答えに納得した鈴に、セシリアが訳が分からないのか問いかけてくる。

「つまり、正樹は自分のエネルギーを使わないで他人のエネルギー……体力を使用したのよ」

「そ、そんなことが出来るんですか?!」

鈴の説明を聞いたセシリアが驚きをあらわにして僕に聞いてきた。

「ああ、出来るよ。相手の体の一部をこの試験管に入れて媒体にすれば、その人の体力を使って色々なことが出来るようになるんだ」

「その代り、体力が使われた方はたまった物じゃないけどね」

鈴がジト目で僕の事を睨みながら、補足した。

なぜこうやって睨んでいるのかと言うと、前に一度これを使った時に鈴の体力を1割ではあるが無断使用したからだ。

あの後には、徹底的に怒られたのは言うまでもない。

「ちなみに今回はこれを媒体とした」

「それは髪の毛……………ですか？」

僕の手にある髪の毛”らしき”ものを見てすぐに髪の毛と気付いたセシリアはすごいと思う。

何せ、僕の手にあるのは真っ黒になった髪の毛だったものだからだ。

「その通り、ちなみにこれは小娘の物だから」

「小娘って……まさかラウラの？」

鈴の予想に、僕は首を縦に振って答えた。
鋭い推理力だった。

「あんまし体力を吸い過ぎちゃうと、死んじゃうからぎりぎりイエローゾーンまでしか体力を吸わないようにしてるんだ」

「……………」

僕の”死”と言うフレーズに、セシリアが息をのんだ。

「誤解の無いように言っておくけど、正樹が使う呪歌は元々人を呪うための奴だからほとんどの技は人を殺めるための物……………で良かったんだよね？」

「ん、まあほとんどあってる」

セシリアに説明する鈴が最後に聞いてきたので、僕は肯定すること
で答えた。

そう言えば鈴と一夏、後篇にはこの力の本来の役割を話していたっ
け。

「そ、そんな……………」

鈴と僕の言葉に、セシリアは絶望するような様子だった。

「希望を壊して悪かったけど、それが真実。だから理解して」

僕はそれだけ言うと、この話はもうおしまいとばかりに鈴の方を見た。

「それで、鈴に折り入って頼みがある」

「な、何よ？」

僕の表情を見た鈴が、強張った様子で聞いてきた。

今僕は緊張している。

これほど緊張したのは、前に鈴に告白をしようとした時位だ。

「今度のトーナメントのペアになってもraitたい」

「……………はい!？」

僕のお願いに、鈴が驚いたのか聞き返してきた。

「いや、だから僕のペアになってほしいんだ」

「な、何でよ?!」

鈴の疑問は尤もだ。

おそらく鈴は一夏とペアを組もうとするはず。

だが一夏にはシャルロットとペアを組んでいるし、彼女が女子であることはばれてはいけないのだ。

まあ、それは建前で本当は自分の願望だが。

「僕は、こういう性格だからね。裏を知らないものと組むとどうもやりにくい……………まあ話すきもないけど。だからある程度僕の裏の顔を知っている鈴と組んだ方が僕としてもやり易いんだ」

「……………」

僕の言う、裏の顔こそが一夏が怖い顔をしてまでくぎを刺す理由だ。

「それに、今女子の間で流れている噂『トーナメントで優勝できれば一夏と、準優勝ならば僕と付き合うことが出来る』と言うものだ」

「あ、あんた知ってたの!？」

「ああ、噂が流れるきっかけになった人物がすべてを話してくれたからね」

鈴たちの言葉に、僕はそう答えた。

「僕と組んでおけば優勝確率が高いと思うよ。一夏と付き合える可能性もかなり高まる」

「……………」

僕の言葉に、鈴は僕から視線をそらせた。

「それに……………ちょっとだけ良い思い押したら駄目……………かな？」
「ッ!？」

僕の最後の一言に、鈴が息をのんだ。

「……………分かったわ」

「……………戦法とかは明日打ち合わせをしよう」

僕はそう言って、”それじゃ”と告げると保健室を後にした。

「はあ……」

誰もいない屋上で、僕はため息をついた。

「僕って、最悪だ」

僕は自己嫌悪に陥っていた。

それは、あの言葉だ。

『それに……：……ちょっとだけ良い思い押したら駄目……：……かな？』
「あんなことを言えば鈴が断ることなんて無理な事なんか、分かってたのに」

鈴は僕の告白を断ったことに心のどこかに悪いと思っている。
僕はそれを利用したのだ。

「女性の心を踏みにじるようになったら、終わりだな。……：……でも、ちょっとだけなら良いよ……：……ね？」

そんな僕の問いかけに答える物は、誰もいなかった。
こうして、学年別対抗戦の日が訪れた。

第41話 対抗戦開始（前書き）

ラウラの性格がものすごく改悪されています。
ラウラ党の皆さん、本当にすみません。

第41話 対抗戦開始

とうとうこの日を迎えた。

そう、いよいよ対抗戦が開始となるのだ。

「正樹の相手は鈴だったよな。絶対に負けないからな！」

「上等よ！ この間の勝負の蹴りつけてやるわ」

一夏と鈴はお互いに闘志を燃やしていた。

あれからトーナメントまでの間、鈴とすっかりとした戦法を立てていた。

それ故、そう簡単には負けはしないという自信がつくほどまでになった。

だが、安心はできない。

いつ何時どのような事が起こるかは誰にもわからないのだから。

IS〈破門されし者〉

第41話「対抗戦開始」

「一刀両断！！」

「ぎゃあああ！！」

僕達の最初の試合の相手は1年の学生だった。

僕は開始とともに一気に一人に斬りかかり、シールドエネルギーを0にする。

「鈴、止めを！」

「了解！」

僕の指示で、鈴は龍咆を放ちながら残ったもう一人に近づく。

「なッ!?! 体が動かない!!」

ちなみにすでに僕のジョイントサークルによって動きを封じてある。

そして……

『試合終了。勝者、織斑 正樹、凰 鈴音ペア』

僕達の初戦は”勝利”と言う結果で幕を閉じた。

「ふう……………」

控え室兼、男子の着替える場所となっている更衣室で、一息ついた。

そこで僕は、今回の戦いを振り返る

「僕達の初戦はいい出だし。後は一夏の方か」

コンビネーション力を重視した戦法は成功を収めた様だった。次でも通じるかは不明だが。

そんな僕の不安材料は一夏の初戦の相手だった。

一夏とシャルロットの相手、それは……箒と、小娘だった。

それが僕を言いようのない不安を感じさせるのだ。

「何不安そうにしてんのよ？」

「ッ！？ 鈴か」

突然の声に、僕は驚いたが相手が鈴だと言うのを確認するとほっと胸を撫で下ろした。

「悪かったわね、あたしで！」

「サンキュ、鈴」

鈴から手渡されたスポーツドリンクのふたを開けてそれを一口飲んだ。

「一夏達、大丈夫よね？」

「……………分からない。勝って欲しいとは思っているけど、最悪な場合はただでは済まないと思う」

鈴の疑問に、僕は静かにそう答えた。

正直言っただうなるかは僕にもわからなかった。

一夏は強くなって行ってる。

それは僕にもわかることだ。

だが、復讐と言う炎を燃やすウラ・ボーデヴィツヒに勝てることはできるのであろうか？

そんな疑問を永遠と数十分も頭の中で考えている時だった。

「ッ!?!」

突然体の中から揺さぶるような衝撃が走った。

「ど、どうしたのよ正樹!?!」

手にしたスポーツドリンクを落とした音で、僕の異変に気付いた鈴が心配そうに聞いてきた。

「…………一夏」

衝撃の原因は、おそらく一夏だ。

一夏が耐え切れないダメージを負ったために、僕の方までそれが伝わったのだ。

そして僕は慌てて更衣室を飛び出した。

「ちょっと、待ちなさいよ! 正樹!」

鈴の制止を振り切って。

Side out

一夏Side

俺は窮地に立たされていた。

最初は何とか有利だったが、シールドエネルギーが残りわずかとな
ってしまったためにすべての調子が狂ったのだ。

俺もシャルルから受け取ったアサルトライフルを撃って奇襲したり
したが、それも少しずつ綻びが出てきた。

何時負けてもおかしくない状況。

そして、ついにその時がやってきた。

「一夏、避けて!!」

「なッ!?!」

シャルルの声と同時に、こっちに迫ってくるのはシャルルだった。

「ッぐ!?!」

その次の瞬間、全身に衝撃が走った。

そして今度は背中の方にもだ。

それは俺が壁の方に飛ばされたことを意味していた。

「シャルル、大丈夫——」

「仲間の心配とは、随分と余裕だな」

横に倒れているシャルルに声を掛けようとした時、ラウラの声が俺
のすぐ近くでした。

「ッ!?!」

気づけば、ラウラは俺の目の前にいた。

そして体を動かそうとしてもA I Cで動くこともできない。

そう、すべてが手遅れだったのだ。

「ッグ!？」

俺が感じたのはお腹に走る痛みだ。
おそらく鳩尾を殴られたのだろう。
今度は顔を殴られる。

絶対防御があるおかげで致命傷にはならないがすごく痛い。

(結局、俺に叶わなかった)

俺はそう思いながら意識を手放した。

「あはははははは!！」

声高々に笑うラウラの笑い声を聞きながら。

第42話 静かな怒りと目覚めし物

「……………」

「……………」

更衣室に戻った僕と鈴は無言で座っていた。
雰囲気はかなり暗かった。

その原因は、一夏だった。

あの後、急いで駆け付けた僕たちに織斑先生から告げられたのは、
一夏達がラウラに負けた事だった。

それだけならまだよかった。

”何負けてんだよ”と軽く突っ込んでいたところだ。
だが、事態は最悪な事態だった。

『織斑兄は今保健室で眠っている。幸い打撲だったが、しばらくは
安静が必要だろう』

それが織斑先生から伝えられた言葉だ。
弟が怪我した事にも関わらず、織斑先生は気丈に”教師”として振

舞っていた。

だが、その手はきつく握りしめられていた。
それが悔しさなのか怒りなのかは僕にはわからない。

『これより、学年別対抗戦第2回戦を開始します。織斑正樹、凰
鈴音ペア、ラウラ・ボーデヴィツヒ、篠ノ之箒ペアは第2アリーナ
へ移動してください。繰り返します———』

「鈴。行くけど、あまり怒り狂わないようにね」

「分かってるわよ。正樹こそ怒り狂って昔のようなこと、しないで
よね」

鈴の”昔”と言う言葉は、何を意味しているのかは容易に想像が出
来た。

「それは難しいけど、まあ努力はするよ」

僕は万弁の笑みで答えた。

「……………そ、そう」

それなのに、鈴はそれを見て頬をひきつらせていた。
そして、僕たちは試合場所へと向かった。

S i d e o u t

鈴 S i d e

怖い。

それが、あたしの正樹への印象だった。

いつもはほんわかとしているが、今の正樹は恐ろしい。

まるで正樹の周りに針が生えているような感覚だ。

それはあの時の感覚に似ている。

あたしが正樹と親しくなるきっかけにして、一番怖い思いをしたあの時の感覚に。

あの時に起こった惨状は、今でもはっきりと覚えている。

（あれだけは絶対に止めないと）

あたしは心の中でそう思うと、試合会場へと向かうのでした。

S i d e o u t

I S 破門されし者

第42話「静かな怒りと目覚める物」

試合会場となるアリーナは、何とも言えない雰囲気漂う。

その原因は、前の試合と僕の醸し出す雰囲気のせいだろう。

「ようやく貴様と戦えるな」

「ああ、そうだな」

小娘が話しかけてくるが、僕は一言だけ答えた。

「あの雑魚の弟がここまで来れるとは相当運が良かったのであろうな」

「…………貴様の未来は決まった。半殺しにしてくれよう」

小娘の一言は、俺の中に眠るものを目覚めさせるのに十分だった。

「何？」

「いや、半殺しにするのも惜しいな。貴様のような下等動物はその身をも喰らって我が糧と——」

「正樹！ そろそろ始まるわよ！」

僕の言葉を遮って、鈴が試合開始間もないことを伝えてきた。

「まあ、せいぜい努力することだ」

僕は深呼吸して小娘にそう告げた。

（駄目だな、感情的になるなんて）

僕はまだまだ未熟だなと思いながら、試合開始を待つ。

「鈴、プラン変更。プラン名はB」

「分かったわ。くれぐれも！ やりすぎないでね」

その間プランの変更を告げた。

鈴の忠告に、僕は手を上げることで答えた。

そしてとうとうカウントダウンが始まった。

5，4，3と秒を刻んでいく中、僕はどうやって相手をいたぶるかを考えていた。

そしていよいよ……

「叩きのめす!!」

因縁の対決かつ試合^{死合い}が始まった。

第42話 静かな怒りと目覚めし物（後書き）

いよいよ次回からラウラVS正樹戦が始まります

第43話 狂戦士（前書き）

今回の試合は、ワンサイドキルです

第43話 狂戦士

対抗戦が始まるまで、僕と鈴は念密な作戦を立てていた。

「こんなところでいいか」

「そうね。あまり多いとこんがらがるし」

鈴の同意も得たところで、作戦を立てるのを終わらした。

これがもとで二つの作戦が出来た。

僕が前衛且つ四で鈴が後衛でサポートをしながら止めを刺す『プランA』

僕と鈴で別個に相手を倒して行く『プランB』

通常はプランAにしておくと言うこと。

それが決まったのが、数日前の事だ。

「でも、ラウラ・ボーデヴィツヒに勝つ秘策とかあんの？」

「勿論だ。ちゃんと勝つための秘密兵器を二つ用意しておいた」

鈴の問いかけに、僕はそう答えた。

そして鈴に見せたのは、二枚のディスクだった。

それこそが、篠ノ之束と僕の案を兼ね揃えて出来たアップデートパッケージだった。

IS 破門されし者

第43話 「狂戦士」

僕は右手に破滅の剣（偽）を展開し、小娘の元に一直線に特攻する。

「ッぐ！」

しかしそれは小娘のA I Cによって遮られた。
いわばA I Cと破滅の剣によるせめぎ合いだ

「開始早々の先制攻撃か。やはり貴様の兄と同じく分かりやすいな」

「お褒めいただき恐悦至極だ。だが、前にも言わなかったか？」
「なに？」

僕の言葉に、目を細める小娘。

「こういう事をするときは、保険を用意してあるとなー!!」

僕はそう言い切ると一気に行動に移した。

「ガナー！」

中に浮かんでいる三本のガナーがどう動いても逃げられないように、
僕と小娘を囲むように地面に突き刺さった。

「馬鹿が、狙いが外れてはどうにも——」

「それはどうかな？」

自分の建っている所を外れたことに笑っている小娘に、僕はそう言った。

「狙いが外れていても出来る事はあるんだよ？ 開始」
「戯言を——」

小娘がそう言いかけた時、この膠着状態に変化が現れた。

「何！？　ぐあ！！」

小娘が驚くのも無理はない。

自分を守っていたA I Cが突然消えたのだから。

「だから言ったでしょ？　狙いが外れても、出来る事はあるんだと」

僕は相手を小馬鹿にするように小娘に声をかけた。

「貴様、何をした！！」

「……ガナーが持つ特殊能力の一つ。ガナーの範囲内にいる物の特殊武装や能力を一つだけ封じる物さ。通称、サイレントフォトニクシヨン」

小娘の問いかけに、僕は静かに答えた。

僕の秘密兵器の一つ目は、ガナー新たにつけた能力だった。

「サイレント・フォトニクシヨン……だと？」

「僕が封じたのは小娘のA I Cだ。ちなみに効力はI Sを展開中だから、解除するには再装着しないといけないな。まあ、こんな戦いでそんな事をすれば負けになるだろうし、その隙を僕が見逃すと思っ
て？」

僕の言葉に、小娘が舌打ちをする。

「卑怯だぞ！」

「卑怯とな？ さすがは下等動物だ。貴様は軍人として一番やってはいけない事をしたのだぞ。その見返りであると思えば、まだ軽いほうさ」

小娘の一言に、僕は笑いながら反論した。

「軍人としては、一番やってはいけない事だど？」

「敗者の冒瀆さ。負けた者だろうと、最高の敬意を払うものさ。なぜなら敗者は勝者に経験値を与えるのだからね。でも、お前は敗者を愚弄した」

戦いの中で、一番のアドバンテージは何かと聞かれればいくつもの候補が出る。

力、体力、頭脳。

どれも確かに必要だが、最も必要なのは”経験”だ。

銃を握った事のない物に銃を打てるのか？

答えは否だ。

要するに、経験と言うのは尤も成長させるものなのだ。

だからこそ、負けた相手にはそれ相応の敬意を示す。

経験値を与えてくれたのであるから。

「ちなみに、この僕も自分の武装の一つを封じた。条件としては対等だろ？ それに、ここは戦場だ。生半可な思いで挑めば……死ぬよ？」

「ッ！ うああああ！！！」

僕の言葉を聞いた小娘は、一気にこっちに肉厚してくる。

それを僕は最低限の動作で交わすと、今度はワイヤープレートが放たれた。

「はッ!!」

その攻撃に僕は破滅の剣を一振りして相殺する。

「っふ!!」

「なッ!?! 速い!」

僕の瞬時加速を見た小娘が驚いた様子で声を上げる。

しかし、僕はそんな彼女の背後を取ると盾を振り下ろそうとした。

「ッ!?!」

それを間一髪のところ以小娘は躲した。

その後も長い時間をかけてせめぎ合いが続いた。

時にはこちらから、時には向こうから切り込んでいく。

そんな時間が続いた。

それから15分後。

「なるほど、下等動物にしては、なかなかやるな。まあ、人間もどきと言う称号から下等動物に昇格させてあげる」

「黙れ!!」

僕の言葉に、小娘がいきり立つ。

横を見れば、鈴と箒の戦いは佳境を迎えていた。

向こう側は鈴の勝利で間違いないだろう。

専用機と量産機の差もそうだが、彼女は力の意味合いが不安定だ。それがここまで負けている理由だろう。

「さて、ここで一気に終わらせてもらおうよ。ガナー」

「……」

僕の指示にガナーは一気に小娘とは外れた場所に放たれる。

「ちいッ!!」

小娘は前ので学んだのか、その場を離れようとするが、1本のガナーによってそれは出来なかった。

急いで回避しても当る距離まで迫っていたのだ。

小娘は手にプラズマ刀を展開すると、ガナーを弾き飛ばすことで直撃を回避する。

だが、それは俺にとっては計算道理だった。

「掛かった」

「なッ! しまッ————」

小娘は身動きが取れなくなった。

「さて、行くぞ」

「なッ!? なんだ、それは!!」

僕が展開した武器を見て、小娘が慌てて聞いてくる。

「これか？　これはね……………」

僕が展開したものを右肩に乗せて、ハイパーセンサーで照準を合わせる。

そして完璧に照準があったところで、僕はその武器の名前を言う。

「破壊大砲だよ。通称、I S 殺し」

「ッ！！？」

これが、僕の最後の秘密兵器だった。

僕と束さんとで意見を出し合って作った新武装だ。

この効果は後程説明するでしょう。

「喜べ、貴様はこの破壊大砲の実験台になるんだからな！」

「ツク！？」

小娘は必死に逃げようとするが、ジョイントサークルの効き目が切れるまで、動くことはできない。

そして、僕は引き金を引いた。

すると、目の前に5，6個の黒い円陣が展開する。

この状態はただのチャージだ。

そしてすぐにチャージも終わり、円陣から黒い砲撃が放たれた。

「ッぐあ！？」

命中と同時にすごい音が鳴り、小娘はやや後ろに弾き飛ばされた。

「どうだ？　僕の破壊大砲を受けた感想は？」

「黙れ!! 何の効果もないただの脅しではないか!!」

僕に声高々に言い返してくる小娘。

「ふふ、武装を展開してみろ」

「何を言って……ッ!？」

自身の武器であるワイヤープレートを放とうとするが、まったく反応がない事に驚きを隠せない様子だった。

「そう、これがあの大砲の効力。ブレイク・アビリティと言ってな。相手の武装の一部ないしはすべてを破壊することが出来る優れものさ」

それこそが、僕の切り札でもあった。

相手の武器の数を少なくすることは、相手の戦法さえも少なくさせる事と同意義だ。

それを可能にしたのがこの武器なのだ。

「まあ、唯一の欠点は放とうとすると、相手の最高シールドエネルギーの数倍を消費することと、相手のシールドエネルギーを回復させることだけだ」

「何!？」

小娘は僕の言葉に、シールドエネルギーを確認する。

どうやら、相手のシールドエネルギーは完全回復していたようだ。

対する僕のシールドエネルギーは残り12,000。

まだ大丈夫としても、これからしようとすることを考えればかなりぎりぎりだ。

(ちょっと遊びすぎたかな?)

僕は反省しつつ次の手を打つ。

「小娘が展開できる武装はプラズマ刀のみ。お遊びはこれでおしま
い」

「遊びだと? 貴様にとって私は所詮遊ぶ程度の相手と言う事か」

小娘が目を細めて睨みながら言ってくる。

「はは、冗談を。貴様のようなレベル、僕の遊び相手にもならんつ
まらない相手だ」

「おのれええ!!!!!!」

僕の言葉は、言い換えると弱いと言っているようなものだ。

だからこそ小娘がこっちに特攻してくるのだ。

だが、もう決着なんてものは最初からついていた。

僕は破滅の剣(真)を展開していたのだ。

そして……

「たあ!!」

「があ!?!」

僕が剣を振り上げ、小娘を宙に浮かせる。
やるのは僕の必殺技だ。

「これは、姉さんの分!!」

「ッぐ!!」

「これは兄貴の分だ!!」

「うあああ!!」

何度も突き上げられる小娘の姿は、まるで弄ばれる子供のようなものであった。

それは、見方を変えればワンサイドキルになるかもしれない。

だが、これは真正銘の試合なのだ。

ただ相手が弱かっただけ。

それだけだ。

そして上空に浮かんだ小娘に向けて僕は、一回り大きくなった剣を構える

「その弱さと罪を胸にして……死ね」

「ッ!？」

次の瞬間、小娘は僕の止めによって地面に叩きつけられた。

見たところピクリとも動かない。

「我が家族には光の祝福を」

だが、僕はそれで良しとしない。

次の攻撃の準備をする。

「そして、家族を傷つける者には闇の裁きを!!」

剣を両手で前方に構えて、一気に降下する。

目標は小娘のいる場所。

これを食らえば、たとえ絶対防御があったとしても、ただでは済まない。

最強にして最悪な技だ。

そして、それが当たったと思った時だった。

小娘のISに異変が現れた。

第44話 非常事態（前書き）

今回でトーナメント戦は終了となります。

第44話 非常事態

3人称Side

モニタールーム。

そこでは真耶と千冬の二人が織斑、凰ペアとラウラ、篠ノ之ペアの戦いを見ていた。

「こ、これはどういう……事ですか？」

目の前で繰り広げられている状況に、真耶の表情が強張っていた。

「ボーデヴィツヒは、あいつの目覚めさせてはいけないものを目覚めさせてしまったんだ」

「目覚めさせてはいけないもの？」

千冬の言葉に、真耶が首を傾げる。

「それはよく言えばデュエリスト、悪く言えば狂戦士。あいつにとつて、今日の前に立つ者は自分の血の渴きを潤すものでしかない」
「……………何だか、恐ろしいですね」

千冬の説明に、真耶は感想を口にした。

それは正しい認識だった。

今画面に映る正樹のゆがんだ笑みは、直接見た者であればトラウマ級の恐ろしさだ。

それはまさに狂った戦士、狂戦士と言う名がふさわしかった。

「ああ見えて、いつもは穏やかだ。今回は偶々いくつもの要素が絡

み合ったが故だ」

その一言にほっとしていいものかそれとも気を付けた方がいい物なのかと悩む真耶だった。

この時、この場にいる物の誰一人として、この後に置訪れる事態を予測できるものはいなかった。

IS 破門されし者

第44話「非常事態」

（こんなところで負けるのか、私は……）

正樹の必殺技”断罪”を食らい、地面に倒れ伏すラウラは、悔しさを感じた。

（私は負けられない！ 負けるわけにはいかない！）

なぜ、彼女がここまで必至になるのか。

それは彼女の複雑な過去が原因だ。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。

それは彼女につけられた名前。

そして識別上の記号だ。

彼女に一番最初に付けられた記号は『遺伝子強化試験体C-003

7』

人工合成された遺伝子から作られ、鉄の子宮から生まれた存在だ。

暗い。

暗い闇の中に彼女はいた。

彼女はただ戦いのために作られ、生まれ、育てられ、鍛えられた。

知っているのはいかにして人体を攻撃するかという知識。

分かっているのはどうすれば敵軍に打撃を与えられるかという戦略。

格闘を覚え、銃を習い、各種兵器の操縦方法を体得した。

彼女は優秀であった。

性能力において、最高レベルを記録し続けた。

それがある時、世界最強の兵器――ISが現れたことで世界は一変した。

その適合性向上のために行われた処置『ヴォーダン・オージエ』によって異変が生まれたのだ。

『ヴォーダン・オージエ』

擬似ハイパーセンサーとも呼ぶべきそれは、脳への視覚信号伝達の爆発的な速度向上と、超高速戦闘状況下における動体反射の強化を目的とした、肉眼へのナノマシン移植処理のことを指す。

そしてまた、その処置を施した目のことを『越界の瞳』と呼ぶ。

危険性はまったくくない。

理論上では、不適合もないはずだった。

しかし、この処置によって彼女の左目は金色へと変質し、常に稼働

状態のままカットできない制御不能へと陥ってしまった。

この”事故”により彼女は部隊の中でもIS訓練において後れを取る事となる。

そして待っていたのは”出来損ない”と言う烙印だった。

そんな彼女が、出会ったのが、当時1年限りの教官としてドイツに来ていた、織斑千冬だった。

「ここ最近の成績は振るわないようだが、なに心配するな。1ヶ月で部隊内最強の地位へと戻れるだろう。なにせ、私が教えるのだからな」

千冬の言葉に偽りはなかった。

彼女はIS専門へと変わった部隊の中で、再び最強の座に君臨したのだ。

そんなことが、強烈に、深く、織斑千冬と言う人に憧れていた。

それは千冬の強さ、凛々しさ、その堂々とした様に、自らを信じる姿にだ。

（ああ、こうなりたい。この人のようにになりたい）

そう思った彼女は千冬が帰国する前に聞いた。

「どうしてそこまで強いのですか？　どうすれば強くなれますか？」

「私には二人の弟がいる」

「弟……ですか？」

「まあ、一人は義理の弟だな。あいつらを見ると、わかると
きがある。強さとはどういうものなのか、その先に何があるのかを
な」

「……よくわかりません」

千冬の言葉に、彼女は分からなかったのかk日を傾げていた。

「今はそれでいいさ。そうだな。いつか日本に来ることがあったら
会ってみるといい。……ああ、だが一つ忠告しておくぞ。あいつに
――」

その時の千冬は、いつもの鬼のような表情から優しい表情へと変わ
っていた。

（違う。どうしてそんなに優しい顔をするのですか？私が憧れるあ
なたは、強く、凛々しく、堂々としているのに）

だからこそ彼女は許せないのだ。

教官にそんな表情をさせる存在が。

教官を変えてしまう弟たちが。

それを認められず、認めるわけにはいかないのだ。

それが、彼女が二人を目の敵にする真の理由であった。

彼女の頭の中には、そのような事をすれば教官と慕う者が、どう思
うかは頭にはなかった。

(力が、欲しい)

彼女は心の中でそう呟く。

それに反応するように、それは語りかけた。

『――願うか……？ より強い力を欲するか……？』

(よこせ、力を。比類なき最強を！)

そして彼女は、禁断の領域へと手を差し出したのだ。

D a m a g e L e v e l …… D .

M i n d C o n d i t i o n …… U p l i f t .

C e r t i f i c a t i o n …… C l e a r .

『V a l k y r i e T r a c e S y s t e m …… b o o t .

S i d e o u t

「あああああああ！！！！」

突然聞こえてきたのは小娘の叫び声。

そして辺りに迸る電気の様な物と衝撃波のようなものによって、僕

は吹き飛ばされた。

「ッく!？」

その次の瞬間、小娘のISが変化し始めた。

黒い何かの飲み込まれながら、大きくなっていく物体。

(な、何だよ、あれ?)

通常、ISの変形は『ファーストシフト』、『セカンドシフト』の二回のみだ。

今回のこれは、そのどちらにもあたらない。

そして、変形し始めたそれから見慣れた物が現れた。

「あれは、雪片？」

刀のような武器。

見間違うはずがない。

あれは織斑先生の使っていた武器だ。

『非常事態発令! トーナメントの全試合は中止! 状況をレベルDと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む! 来賓、生徒はすぐに避難すること! 繰り返し――』

その次の瞬間、サイレンと同時にアナウンスが流れた。

向こうの変形も終わり、その姿をはっきりと現した。

その姿は、まさしく織斑千冬そのものであった。

「……………どれだけ人をコケにすれば」

「正樹？」

僕の変化にいち早く気づいた鈴が問いかけるのと同時に、僕は一気に肉厚した。

「気がすむんだあああ!!!」

それはただの怒りだけだった。

一夏を馬鹿にされ、今度は姉さんまでもを馬鹿にされ。もう限界だった。

だからこそ、僕は一番の悪手”自分を見失う事”をしてしまったのだ。

「はあああああ!!!」

僕の剣を、それは簡単に弾き飛ばしたのだ。

「ッ!？」

次の瞬間、僕は雪片によって腕を切られた。それと同時に、強制解除までされた。

「うおおおおお!!!」

だが、僕は止まらない。

無謀にもそれに向かって突進する。しかし、それを止める者達がいた。

「落ち着きなさい、正樹!」

「そうだ。一体なんなのか説明しろ!」

二人掛かりで必死に僕の動きを抑えた。

「離せ！！ あの野郎、ただじゃおかない！！ 粉々にして八つ裂きにしてやる」

僕の口から出るのは、憎悪のみしか感じさせられない物だった。心では分かっているけど、どうにもならない。

自分を制御できないのだ。

本当に未熟だ。

自分でもそう思う。

「離せ！ さもないとお前たちも——」

「いい加減にしない！！」

鈴の怒鳴り声が出たかと思った瞬間、鋭い音共に頬に痛みが走った。それが、ビンタされたのだと気付くのに時間はかからなかった。

「あんたが暴れてどうするのよ！！」

鈴の怒鳴り声が、僕の心の闇を一気に晴らしていく。思考がクリアになる。

「……悪い。あいつは織斑先生をまねている。僕はそれを止めたい」

「……もう教師部隊も来ている。お前は休め」

箒が僕を気遣ってか、そう言ってくれた。

「ありがとう。でもね、ここで屈するのは織斑家の……織斑千冬」

弟として嫌なんだよ」

「正樹……」

「だから、僕は奴を倒す」

僕は二人の方を強い眼差しで見る。

絶対に自分の意見を変えないとばかりに。

「……分かったわよ。やんなさい、一夏の代わりにあたしが許す」

「恩に着る」

鈴の言葉に、僕はひとことお礼を言うと手に意識を集中する。

（絶対に倒さなければいけない。だから僕に力を貸して。創造せし者、クリエイト!!!）

心の中で叫ぶと、両手から光が溢れだす。

それは、呪歌でもなんでもない。

あの人から教わった本物の”魔法”。

それを今、僕は解き放とうとしていた。

しかし、それもある人物の声によって遮られた。

「その役目、兄である俺が引き受けるぜ！」

そんな声と共に登場したのは、白のISに乗った人物……

「「一夏!?!」」

そう、一夏だった。

「心配させて悪かった。さっき目が覚めて緊急事態だとのことで、急いでここに来たんだ」

具合が悪そうではなかったので、僕は安堵した。

「さて、この偽物は俺がやりたいが、いいか？」

「ああ、いいよ。兄貴らしくびしっと決めて」

「おう！」

僕の言葉に、頷いた一夏は一気に偽物に向かって肉厚する。

偽物が剣を構え振り下ろそうとするが、一夏はそれを雪片二型で見事に弾き返しそして……

「はあああ！！！！」

織斑先生と同じ構えで、偽物を斬り付けた。
すると、その切れ目から小娘が出てきた。

「やっと終わった……………か」

それを見た僕は、今までの疲労が一気に押し寄せてそのまま地面に倒れるようにして意識を手放した。

遠くの方で、誰かが呼びかける声がする中で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7276r/>

IS（インフィニット・ストラトス）～破門されし者～

2011年11月14日03時04分発行